

【役員OBインタビュー特集①】

自分の信念に基づき運動する

前田 幸太郎さん（元全建総連中央執行委員長）

聞き手・古市良洋さん（元全建総連書記長）

2015年10月21日取材

三池炭鉱で「生産阻害者」として解雇されながらも劣悪な労働環境から安全確保を求めて闘争

前田 私は終戦の1945（昭和20）年、田舎に疎開していましたが社宅に入居できるということで、福岡県大牟田市の三井三池炭鉱三川坑に就職しました。そこで三池の組合運動（末尾参照）に関わってきました。三池には15年いて、三池・安保のたたか



前田幸太郎さん

兵庫土建の書記長、委員長、兵庫県連の事務局長、会長、全建総連では中央執行委員、副委員長などを歴任された後、3期（2003年～2006年）中央執行委員長を務められる2007年～2008年に顧問2016年10月8日、ご逝去

いがあり、社会的にも色々な運動が盛り上がりつつありました。

古市 15年いたというと、終戦で帰ってきたのは何年ですか。

前田 私は戦争には行っていない。

古市 三池のたたかいは1960（昭和35）年ですよ。

前田 1960（昭和35）年に三池炭鉱をクビになりました。

古市 その時クビになった1200人のうちの一人ですか。

前田 その時のクビの切られ方がひどく、「生産阻害者」という名前で切られて闘争が始まりました。

古市 2、3日前に、三池労組がつくった「三池20年」という記録集と資料集をかいつんで読みました。私たちが若いときには「三池に学ぶ会」というのがあり、一緒に若い人を三池に送る運動をしていました。ですので、若い時から三池のことは認識にあり、三池に学ぶ気持ちで運動してきました。

炭鉱ではどういう仕事をしていたのですか。

前田 当時、炭鉱での職種は色々あり、採炭は炭を掘る人（採炭工）、坑内は炭を掘る人だけでなく、坑道を掘る人（掘進工）、材料を運ぶ人（さおど

り）などがあります。私は機械工でした。機械工の主な仕事は3つあり、1番は、坑内には水がたまるため水をポンプで吸い上げる機械の運転、管理をする人。2番は、採炭現場のことを切羽と言いますが、切羽では石炭を運ぶチェーンコンベアーを管理する人。3番は、炭車に炭が満積になったら、それを引き上げる機械を運転する人。私は3番の仕事をしていました。

勤務は三交代制で朝・昼・晩と分かれ、一番方、二番方、三番方といいますが、坑内は高温多湿で暑くて汗が流れます。それで水分をたえず補給します。採炭現場の最前線が一番暑いんです。普通の人が働くところではありません。そういう状況の所に15年いました。

三池闘争は安全を確保するための闘争から始まりました。事故が起きると、まず会社は何を言ったかという「機械は大丈夫か」でした。私たち「人間は大丈夫か」とは聞かない。私たち人間を無視した会社の保安対策は許さない。安全な現場を確保するたたかいから三池闘争は始まりました。

古市 炭鉱労働者のみなさんのくらし、生活ぶりはどうだったんでしょうか。

前田 主に炭住（炭鉱住宅）、社宅住まいが多かつ

たです。そこには連絡、世話役をしている会社の人がいきました。監視役も兼ねていたようです。

古市 一番方、

二番方、三番方の出勤は何時でしたか。



三池炭鉱の過酷な労働環境の改善を始めとする激しい闘争を語る前田さん

前田 一番方は午前5時から、二番方は午後2時から、三番方は午後10時から次の交代が来るまで働きますが、

困ったのは家に帰って寝るにもタイミングが一週間交代で変わるため、生活がバラバラでした。

三池闘争が始まる前に坑内夫でしたが、執行部に来てくれと言われ、教宣部を担当しました。教宣部は機関紙をつくるのではなく、朝・昼・晩の3交代だから三池闘争の色々な運動の要求を組み込み場（色々な職種の人が集まる場所）に行って短い時間で「どう運動をしているのか」、また、しなければいけないなどを話して組合の情報を伝えました。

機関紙は、三池の中央本部に機関紙部があり、機関紙部長がいて機関紙「みいけ」を発行していました。私たちは支部機関紙や支部ニュースを作ったりはしなかったです。私は支部の教宣部役員で、学習活動も組織していました。労働講座も開催しました。その講座の講師は大学の先生に協力してもらいました。

新たな職を経て、兵庫土建にめぐり合う

前田 1960（昭和35）年に解雇された後は、大阪にいました。大阪の社会党本部に「仕事はないか」と頼むと、何ができるかと聞かれ、私は三池炭鉱の前に第三バルブという鉄工所で働いており、旋盤を使った仕事で2年程度勤めたことを話しますと、「それならば尼崎に行け。尼崎には高岩さんという社会党の県会議員がいるから、そこを頼れ」と言われました。

私は尼崎に向かい、県会議員の高岩さんに会いました。そうすると、「俺と一緒に苦労して会社をやっている所に行くか。小さい鉄工所だが」と言われ、永井鉄工という所を紹介してくれて働きました。しかし、右目が網膜剥離になり、仕事を続けられなくなりました。その時は、神戸にある県立医大に高

岩さんの世話で入院して、目の手術をしました。高岩さんはどこかに仕事を探さないといけないと言っており、ちょうどその時期に労働大学の学習センターが始まっていたので、その事務局に就職しました。

この仕事をしている時、高岩さんから「神戸にある職人さんの組合で人を探しているの、そこへ行ってみないか」と言われましたので、面接を受け、兵庫土建に就職しました。それが1965（昭和40）年のことです。

三池で組織運動をやっていたことが非常に役立ちました。私が兵庫土建に行った時には組織人員が少なく、1万人しかいませんでした。そして、1970（昭和45）年に日雇健康保険の擬制適用が廃止になったものだから、大幅に組合員が減りました。これはえらいこっちゃということになって、兵庫土建の立て直しを考え、最初は1万人いるから倍の2万人。そこから3万人、5万人とつくってきました。だから私は、兵庫土建は自分たちが今の人数にしたと思っています。

その時、県連会長にいたのが「田中の秀ちゃん（田中秀和氏）」。この人は本当にえらいし、小さい時からずっと病みもしないで組合にいます。唐沢さ

ん（唐沢平治氏。全建総連初代書記長）に声をかけて、「どうやって飯を食べばいいか分からん」と言って、パチンコで稼いだとか、そのような話を聞いています。私は田中さんを尊敬しています。

運動に必要な組合費の使途を明確に、組織の強化拡大を前進

古市 兵庫土建が大きくなった頃、1987（昭和62）年の機関紙「全建総連」で、一気に増勢した際に取材をしています。6年で2倍になっています。ここに前田さんの運動があると思います。機関紙では、野村副委員長、前田書記長、竹内組織部長、松下担当中執のみなさんに話を聞き、7年間で70%拡大し、1万7000人になったと書かれています。ここでの苦労話があれば教えてください。第一次組織強化5ヵ年計画の方針をつくり、組合費を100円上げる提案をしたものの否決され、1年間粘り強く説得して1978（昭和53）年にやっと認めてもらえたともあります。ここから拡大が軌道に乗ってきたということでしょうか。

前田 そうです。私が組織強化5ヵ年計画を作り、組織が目標を持って拡大しなければいけないと訴えました。そうしないと、「拡大をしろ、しろ」と

言っても兵庫土建全体が動くものではありません。一つの目標をきちつと決めて、各支部含めて頑張ろうと。そのためにはお金が必要で、そのお金は「本部が使うものではなく、全て支部のために使うから組合費を上げてくれ」と言ったのですが、「うまいこと言って、しまいは書記局の人情費に変わるのが関の山」とボロボロに言われ、最初提案した時は否決されました。

しかし、私はあきらめませんでした。こんなことでくじけてたまるかと思いました。三池ではもっと苦しいことがありました。そして、今度は逆のやり方で提案しました。組合費の上げ幅を200円にしてほしいと提案し、この中のお金の使い方をすべて提示しました。非専従の皆さんばかりだと拡大はうまくいかないので、事務員を各支部に必ず置き、その代わり、事務員の人情費の一定程度を本部が負担することと、事務所を維持するための補助として3万円程度のお金を出すことにしました。そして、拡大を1人すると奨励金を出すことにしました。目的をはっきりさせたら、本部の人情費に変わるものではないことがわかってもらえて、5ヵ年計画が承認されました。

兵庫土建の創立者 吉田直義さんについて

古市 兵庫土建の吉田直義委員長（兵庫県連初代会長）が、全建総連の前身の土建総連の最後の委員長になった時、非常に大きい役割を果たしたと思いますが、前田さんから見て吉田さんとはどういう方でしたか。

前田 尊敬している人で、教養人で、その当時に中央大学を出ていました。大学を出ていながらも、組合の仕事をしていました。ちょうど終戦直後で、物が無い時代の上、配給制。建築資材の「釘をよこせ」「トタンをよこせ」と言っていました。そういうものをもらうためには組合をつくらなければいけないと言われ、組合をつくったと聞いています。労働組合というよりも、米の配給を多くするとか、酒の配給もあるとかそれをもたらえる組織として吉田さんがつくりました。

吉田さんは人物としても温厚で、ちゃんとした見通しを持って組合を運営されていました。ずっと尊敬しています。吉田さんの奥さんは吉田晴子さんと言いますが、私の住んでいた近く、神戸市北区にある小学校の先生でした。古市さんが社保対部長をやっていた頃と思いますが、思い出として、山梨県で社保対部の会議がありました。その時唐沢さんが

全建総連に対する組織論と運動論を持ち、人を育てる

古市 前田さんが全建総連委員長になることを決断した時の気持ち、決断に至った経緯を教えてください。

前田 組合の大会の時、当時の全建総連の佐藤正明書記長から全建総連の委員長を務めてほしいと言われました。三鷹の市長（坂本貞雄氏。第6代全建総連委員長）、長崎の江口利作さん（第7代全建総連委員長）の後を継いで、加藤さん（加藤忠由氏。第8代全建総連委員長）が委員長になる際の話し合いでは、「委員長なんてやらない」と加藤さんは言うて、私たちが頼んでもなかなか聞いてもらえませんでした。結果として引き受けていただきました。そのことは良かったのですが、その後が悪く、後継がないから、もう一年、もう一年と続けてきました。毎年、毎年、加藤さんは「今年1年だけやる」と。しまいに加藤さんは「何年やってきたと思います？もうこれ以上できないから、絶対辞める。何と言っても辞めるから」と言って啖呵（たんか）を切りました。それで、次の委員長をどうしようかという議論になりました。

私は、Aさんに頼んだらどうかと考え、加藤さんと私とAさんとで喫茶店で会って、やってくれと伝えました。そうすると、「委員長という役職はあり

いて、私に「前田さん、葦崎というところの先に、吉田さんの奥さんが住んでいる。そこが奥さんのふるさとのようだが、そこに一度行って見ないか」と誘われ行ってみるようになりました。ところが、翌朝起きると雪がものすごく降っていて唐沢さんに「行けない」と言うと、「車で行くから大丈夫」と言われました。車でと言ってもタクシートの運転手でしたが、唐沢さんが交渉をして行くことになりました。膝くらいまで雪が積もっているなか向かいしました。吉田さんの奥さんは親戚の大きな家の横に小さな家を建ててもらい、ひっそりと住んでいました。その時唐沢さんがこう言いました。「感動だね、前田さん。吉田さんの奥さんは仏壇の上の方に表彰状を飾っている。それは、兵庫土建組合の表彰状のようだ。それを仏壇にちゃんと飾って、奥さんは毎日仏さんにお供え物をして拝んでいる」。そういう意味で、奥さんも吉田さんを尊敬していると感じました。表彰状一枚で感動しました。

古市 吉田さんは兵庫土建の創立者ですか。

前田 そうです。

がたいができない」と言われました。Aさんは「家内が癌で調子が悪い」と。そしてAさんの娘が「お父さん、お母さんがこんななのに、まだそういう運動をやるのか。止めてくれ」と言いました。その後、私は「加藤さん、これはAさんを説得するのは難しい」と伝えました。

他の人を探そうかとなりましたが、なかなかいい。そして私に回ってきただけです。そういう経緯があり、そういう状況であればやるべきだと思います。やるのであれば、自分の信念に基づいてやるべきだと思います。そのためにはまず、自分なりの全建総連に対する組織論や運動論を持ち、人材を育てないといけないから、きちっとした考えを持ってやるべきだと当時思ったのは間違いありません。

加藤さんは面白く、加藤さんが兵庫県の大会に来て、終わった後に喫茶店に行って、「加藤さん、私が委員長を引き受けることになりましたが、どんなところに気をつけたらいいですか」と聞くと、「前田さん、何も難しいことはない。ちゃんと自分の信念に基づいてやればいい」と加藤さんは言われました。

※「前田幸太郎さん、田中秀和さん共同取材」に続きます。

《三池闘争について》

1959～1960（昭和34～35）年、三井鉱山三池炭鉱における人員整理反対闘争。（広辞苑）

「三池闘争」は、三井鉱山の第二次合理化案（昭和34・8・28提示）、特にその中で三井炭鉱の1200名の指名解雇をめぐって、わが国労働運動史上、一企業労組の闘争としては未曾有の規模でたたかわれた合理化反対闘争であった。それが未曾有の規模になったのは全国の労資が当面の合理化と反合理化のたたかいの成否をこの三池闘争にかけたからであった。三池闘争は、いわゆる総資本対総労働の合理化をめぐるツバゼリ合いであったのである。（「みいけ20年資料篇」三池炭鉱労働組合編 労働旬報社）

【役員OBインタビュー特集②】

土建総連運動に身も心も捧げた

田中 秀和さん（元全建総連中央執行委員）

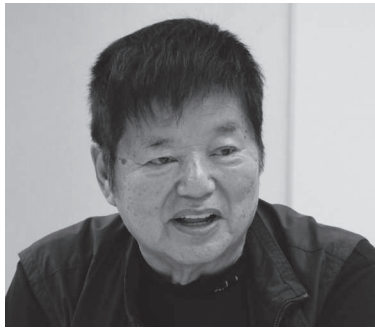
聞き手：古市良洋さん（元全建総連書記長）

2015年10月21日取材

「お前も土建に入れ」の一声で全日土建事務所に住み込み

田中 前田幸太郎さん（元全建総連委員長）は人生の先輩ですが、組合の先輩は私。前田さんは1965（昭和40）年に兵庫土建、私は1949（昭和24）年に甲南土建に入りました。

あの時代は物資がない時代で、闇市（やみいち）



田中秀和さん

兵庫県連・甲南土建の書記長、委員長、兵庫県連の会長を歴任、全建総連では中央執行委員を8期務められる。1952（昭和27）年当時、全建総連の前身の全日土建本部に甲南土建から応援に入り常駐。当時の書記局のメンバーには、のちに全建総連の初代書記長となる唐沢平治さんや第2代書記長・副委員長の三枝満慈郎さん等がおり共に活動される

が流行（はや）っていました。甲南土建の初代委員長の高橋太一さん（土建総連の初代委員長）が「お客さんが来たから闇市で肉を買ってきてくれ」と私の親父に言いました。親父と私が一緒に組合事務所ですき焼きを食べていた時、唐沢さん（唐沢平治氏、全建総連の初代書記長、土建総連の第2代書記長、全日土建書記長などを歴任）が来ている中で、高橋さんが「お前も土建に入れ」と言い、唐沢さんも「私が身元を保証する。高校も大学も面倒見るから、東京へ来い」と無理矢理誘われて東京へ行きました（※全日土建、土建総連など全建総連の前史については**末尾参照**）。

そうして私は、全日土建の組合事務所に1年間は住みました。当時の書記局は、唐沢さんと三枝さん（三枝満慈郎氏。全建総連の第2代書記長、副委員長などを歴任）、大関律子さんという女性書記第1号と私を含める4人でした。ガリ版刷りの機関紙「じかたび」をつくっていましたが、当時はまだ非合法の時代でしたから、東京にある「あかつき印刷」の前に私服警官が張り込んでいました。あかつき印刷に行くとき原稿を没収されたり、逮捕されたりすることでしたが、「君なら若いからいいだろう」と。私が印刷物を持って行き、そして持ち

帰って全国に配布をする、そういう生活をしていました。ただ当初は、高校や大学に行くことになっていましたが、なくなりました。

当時、高橋さんが月に一度は上京し、私は甲南土建から給料をもらっていました。わずかな給料でしたが、謄写版（ガリ版）の印刷費に使われてしまい、ひもじい思いをしました。全日土建会館の裏にお寺があつて、お供えをもらい生活をしたこともあり大変苦労しました。その当時、食べ物ジャムを挟んだコッペパン、うどん・そばが17円の時代でした。

余談ですが、私は事務所の2階に住んでいて、生活ができないので目黒駅前のパチンコ屋さんへ行っていました。タバコを稼いでおき、全国の親分衆がよく来ていたので、その人たちにタバコを売って生活費にしていました。給料をくれないからしょうがない。パチンコは上手で、その当時は手で一つひとつ打つ手弾きでした。

血のメーデー事件で唐沢さんを逃がす

田中 血のメーデー事件があつた1952（昭和27）年、当時私は事務所で寝起きをしていたので、深夜・早朝の電話は私に取りました。午前9時前、全日土建委員長の千葉さん（千葉常和氏。元東京土

建委員長）の奥さんから電話がありました。奥さんは「今、警視庁から刑事が来て主人が逮捕された。今からすぐそちらにメーデー事件の件で行くと思うから気をつけて」と言われました。その直後、刑事が来ました。

公安の目的は、唐沢さんの逮捕でした。唐沢さんは事務所にいましたが、警視庁は本人の顔を知らず、私に唐沢さんはいるか、と尋ねました。すぐ後ろにいましたが私が「いません」と言うと、刑事は「後ろの君（唐沢さん）は誰だ」と尋ねてきました。唐沢さんは、どもって「ぼ、ぼ、僕は中西吾一といいます」と言いました（甲南土建に当時「中西喜一」という方がいた）。その後、あれこれと家宅搜索をして帰りました。

その後、唐沢さんを変装させて東京まで逃がしました。当時は新幹線がない時代なので、汽車で関西へ向かい、甲南土建事務所に行きました。それからしばらく滞在して兵庫土建へ。当時はまだ2つしか組合がなかったです。兵庫土建で、吉田さん（吉田直義氏。兵庫土建の第3代委員長、土建総連の最後の委員長、兵庫県連初代会長）や松栄さん（松栄義久氏。兵庫土建の第6代委員長、元兵庫県連会長）にお世話になりながら、淡路へ渡りました。

淡路には小栗さん（小栗實氏。元兵庫土建書記長）という兵庫土建の書記さんがいて、そこでお世話になりました。兵庫県には4〜5ヵ月はいたと思います。転々としていないと捕まってしまうので、次に岡山・九州へ飛びました。すべて行った先で旅費をもらい、ほとぼりが冷めてから唐沢さんは東京へ帰ってきました。逮捕されず前科一犯がつかずに済んだのです。

古市 田中さんが全日土建に行って戻ってくるころには、土建総連はつくられていなかったのですか。

田中 まだなかったです。土建総連をつくるために愛知の布施兵五郎さん（元土建総連委員長）、三重の森治平さん（三重建労の初代委員長、元土建総連委員長）、大阪の菅野勇利さん（大阪建労の初代委員長）、奈良には正木義知さん（奈良建築の初代書記長）という古くからいる書記長がいました。そして、兵庫には先ほど話のあった吉田さんなど。私は身も心も土建労働運動に捧げてきました。

土建労働者のために組合で初の診療所をつくる

古市 資料で読んだのですが、甲南土建が組合で初めて診療所をつくった時の話を教えてください。

田中 1946（昭和21）年4月に甲南土建が生まれました。1960（昭和35）年か1961（昭和36）年に理由があって売り払ってしまいました。一番最初に土建診療所をつくったのも、六大都市の市会議員になったのも、甲南土建の高橋委員長でした。その後、続々と各組合の委員長が立候補して当選しました。

古市 全建総連の草創期に活躍された高橋さんはどういう方でしたか。

田中 土建会館も隣の診療所も全部近くの大きな地主さんから無料で寄付してもらい、高橋さんはそういう人たちに熱く土建運動を語りました。高橋さんは「私は全国の土建労働者のためにこれをつくる」と言って、そこから始まりました。最初、高橋さんは自分の家を組合事務所にしていました。1946（昭和21）年4月に組合ができて、学校の本山の小学校の北側に自分の家の玄関先を組合事務所にして、それから3〜4年してから会館を建てました。高橋さんは偉い人でした。

防衛隊に守られた大会、大勢で氣勢をあげたメーデー

古市 甲南土建の大会の事が全日土建の機関紙に出

れ、その後、名前ははっきりしませんが、長野の上伊那土建が二番目。それから東京土建とかです。兵庫土建は1947（昭和22）年に誕生しています。それから全国で続々と土建組合が誕生しました。

甲南土建が誕生した時は、高橋さんが委員長で、1952（昭和27）年だったと思いますが土建診療



建設中の土建診療所（1952年、昭和27年）

所をつくりました。当時、病気をしてもケガをしても健康保険はなく、ケガと弁当は手前持ちの時代。一人700円のカンパを集め、カンパを出せない者は3日間勤務奉仕をしてもいい、診療

しており、「代議員1200人が参加した」と書いてあります。その当時、甲南土建はほぼ全員参加だったのでしょうか。

田中 そうでした。

古市 メーデーにも1000人参加したと書いてあります。

田中 メーデーに行くのに、兵庫区にある湊川公園を通過して、国道二号線を通って赤旗を振りました。事務所を出る時に孤樽を割って、みんなで飲んで、氣勢をあげていきました。ガンバロウと言っていたのではなく、「ヤートトコセー」と伊勢音頭を踊っていました。

国道二号線は今では立派だが、当時車もほとんど通らず、信号もほとんどない。のどが乾いたら牛馬用の飲料水があり水が出ているので、その水を飲んでのどの渇きを潤して会場まで行っていました。

古市 1200人が参加した大会の報告で、「警察等の妨害に備えて防衛隊200人が警戒する中で小学校の講堂で大会を開いた」とあります。警察の妨害とあり、昔はそうでしたが、今の人は警察が組合を妨害すると言っても意味の分からない人が多いと思います。

田中 当時は警備二課というのがありました。ここ

※全建総連の前身について

1947（昭和22）年6月に戦後初の建設労働者の全国組織である「全日土建（全日本土建一般労働組合）」が結成された。この組織に参加した組合、役員がのちの全建総連結成にも大きな役割を果たすこととなる。

しかし全日土建は、結成から1年4ヵ月で分裂。分裂の契機は、日本共産党が1948（昭和23）年3月に提唱した「民主民族戦線」という統一戦線運動に参加することの是非をめぐる論争であった。民主民族戦線への参加に反対する東京土建産業労組を中心とした労組は全日土建を脱退して、1948年11月に全国土建一般産業労働組合（全建労。後に全国土建産業労働組合連合会と改称）を結成した。

全日土建に残った組織内部では、その後、建設職人グループと日雇・自由労働者（職安）グループとの間に矛盾が広がる。建設職人グループは賃金・仕事確保が重要であり、日雇・自由労働者（職安）グループは失業対策が運動の柱であった。立場が違う双方を同一組織に内包することの矛盾が亀裂となり表面化した。また、組合費が建設職人の方が高かったことも拍車をかけた。

1952（昭和27）年になると、それぞれのグループで会議を開くなど対立が深刻となり、両者の溝は埋めがたいものとなった。職人グループは、「全国的な土建労組をつくりあげる」という全日土建中央委員会の確認に沿い、1952（昭和27）年6月16日に「土建総連（全国土建労働組合総連合）」を結成するが、自由労働者の組合は反発し、同年9月に開かれた全日土建第7回大会で職人部出身の千葉常和委員長と唐沢平治書記長を分裂主義者と断定し除名処分にした。その後、全日土建は1953（昭和28）年の第8回大会で「全日自労（全日本自由労働組合）」と改称し、日雇・自由労働者で構成する組織として再出発した。

全日土建は、土建総連、全建労、全日自労の3組織に分かれたが、利害の共通する課題では共同闘争を行っていく。1953（昭和28）年には日雇健康保険制度を勝ち取り、1957（昭和32）年の建築士法の改正にあたっては、土建総連や全建労は一定の実務経験があれば講習を受けることで、無試験で取れる二級建築士制度を導入させた。

そうした中で、1957（昭和32）年に転機が訪れ、土建総連、全建労、東建産（東京建設産業労働組合）、全国土建の4組合は8月29日、土建労組統一協議会を結成（後に全国土建は、緩やかな協議会のような組織を希望するなど温度差が表面化し、やがて統一組織への参加を見送る）。

その一方で、土建総連、全建労、東建産は懸命に話し合いを続け、1958（昭和33）年5月1日に「土建労働組合統一に関する声明」の発表につなげる。「建設労働者全体を代表する新しい組織が必要」との共通認識の下、組織統合には多くの困難が伴う中で、統一に向けた各組織内での議論が1年以上にも渡って積み上げられ、1960（昭和35）年11月24日、全建総連（全国建設労働組合総連合）が結成することとなる。

日雇健保擬制適用廃止当時の運動

日雇健保の擬制適用廃止があった当時、私も東京に務めていましたが、参議院の社労委員長で佐野芳雄さん（元参議院議員）という兵庫県出身で労働金庫の理事長の方がいました。皆さんが集まって、佐野さんのところへ行きました。そこで、佐野さんは「私は皆さんの言うとおり、いくらでも否決する。ただ、その後の責任は皆さんが持つんだよ」と何回も念を押されました。かなり考慮していました。最も

後に、強行突破をしようという結論になり、それで、「勝った、勝った」と言っていました。翌日に擬制適用を廃止されて、それから大変でした。

労働組合側の記事を読んだり、発言を聞いていると何でも政府当局が悪いとなっていていますが、擬制適用廃止の件など、私たちも、もう少し真摯（しんし）に反省しなければいけないと思います。

※「前田幸太郎さん、田中秀和さん共同取材」に続きます。

【役員OBインタビュー特集③】

全国の仲間から支援の手が届き感謝

前田幸太郎さん（元全建総連中央執行委員長）

田中 秀和さん（元全建総連中央執行委員）

聞き手・古市良洋さん（元全建総連書記長）

2015年10月21日共同取材

阪神・淡路大震災で組合会館が傾き、仲間が仮設事務所を建てる



田中秀和さん(左)と前田幸太郎さん(右)

古市 阪神・淡路大震災の後、中越地震、中越沖地震、東日本大震災と次から次に地震が起こって、全建総連も役所との関係も少しずつ勉強してきましたわけですが、一番最初の都市型の大災害だったので、みなさんがあ

の震災にどういうふうに対処したか、お話を聞いて教訓を記録に残したいと思っています。

田中 前田さんの所（兵庫土建）は組合会館が崩壊しましたが、うち（甲南土建）はそうではなかったです。

前田 兵庫土建の5階建て事務所は傾きました。4階には兵庫県連事務局もあったから、全体の仕事ができなくなりました。

その時、阪元昇さん（元兵庫土建副委員長）が仮設事務所を建ててくれました。材料がどうにもならない時に、2階建てのプレハブ仮設事務所をつくってくれました。

田中 阪元さんは仕事を脇において、会館としてのプレハブ事務所を建てるのに頑張ってくれました。阪元さんは自分のところの職人も全部投入してくれました。兵庫土建の復興も国保の復興も阪元さんの尽力がなかったらもっと遅れていました。

前田 自分のところの家が被害にあっているのに、建ててくれました。材料の手配も震災が起きてからすぐだから驚きました。兵庫土建を立て直してくれた人だと思っています。

古市 プレハブを建てた、近くの駐車場はどういう関係だったのですか。

前田 あの駐車場の不動産屋さんは組合と取引があって、日頃付き合ひのある方から話してもらって、長期間とはいかないが、ちょっとなら使っても良いと言われて、そこに阪元さんがプレハブを建ててくれました。

その後は、プレハブ仮設事務所に書類を運ばなければいけません、これを運ぶのに時間がかかりました。また、入りきらない。大事な書類がいっぱいありました。災害に遭ってからでは管理する場所がありませんので、平常時には、書記局の人員と書類を管理することを考えておかねばなりません。災害に遭うとどうにもなりません。

また、全国から寄せられた支援物資は大変励みになりました。支援物資を受け入れる建物と管理をたえず考えておくことも大切です。全建総連全体が支えてくれるというのが一番ありがたかったです。

被害が甚大で共済金の原資足りず

前田 もう一つ感謝しなければいけないのは、カンパ。すごい額が集まりました（約4億3700万円）。しかし、被害が大きく、全建総連が元々している共済関係のお金と、全国からきたカンパでも足りませんでした。後から、秀ちゃん（田中秀和さ

ん）が悩んだのが、全労済に加入していなかったの、そこからお金が出ずに、組合員に約束していたお金を支払うのに足りない。最後まで足りなかった。東北でどれくらい被害があったかは分かりませんが、神戸は大都市でしたから、被害がものすごく大きく、被害者も多い。そのためのお金をしっかり準備しないといけない。

田中 独自共済をやってしばらくしてから震災で、何億とお金がありました。が足りませんでした。前田さんと二人でどうしようと悩みました。このまま支払うと県連がパンクして倒産してしまう、と。です。ので会館を担保にして労金から借り入れて補填（ほてん）しました。結果的に、亡くなった人は減らせないから全額払い、家屋の倒壊は申し訳ないが約半分にしました。約束事が達せられなかった。あの時、私が会長をして、前田さんが事務局長をやっている、2年間ほど寝ても夢に出てきて、血の小便が出ました。それだけ辛かったです。けれど、前田さんと2人で何とか乗り切った後輩にバトンタッチしました。前田 大変なことでした。震災が起きた時に、全労済には兵庫県内でも他の労働組合は沢山入っていました。が、全部お金が払われたそうです。だから、私たちもし入っていたら、かなりのお金が入ってき

たと思います。それが無いものだから組合員さんには県連で決めた金額を規定通り支払うことができませんでした。そういうことがあり、災害に備えて組合員に保障がある程度できる仕組みは考えておかないといけません。

救援物資と支援職人さんの受け入れ

前田 それから、全国から救援物資を兵庫に送ろうという取り組みを全建総連がしてくれました。その時、私が関わったのは、長崎から来た支援物資と徳島からきた支援物資の2つ。その時分一番困っていたのは、暖房と火が使えないことでした。1月だったので寒かった。物を煮たり炊いたりすることができない中、徳島（フレッセ）の東耕夫さん（元フレッセ委員長、元全建総連副委員長）がトラックで運んでくれたのは、カセットコンロでした。「持ってくるのに冷や冷やした」と言っていました。それから、長崎からはブルーシートを中心にもらいました。その後、東京土建（東村山支部）から来た人は偉かったです。震災の最中に道路が寸断されている中、個人で車を運転して支援物資を持ってきたのです。

それから水。水がなく困りました。タンクを置いて

思い出しましたが、古市さんが震災の時に支援に来てくれましたが、泊まる場所がないから寝袋を用意してきたと言っていました。私が今住んでいる所の山側に家があったから、そこに泊まってもらいました。

古市 ありがたいことでした。1日目に大阪に行つて、大阪建労が車に物資を積んでいくと聞いたので、表木五郎さん（元大阪建労書記長）に話をして、一緒に乗せてもらって来ました。夜着いたので、まだそんな状態だから、ガスコンロと山登りの道具でラーメンをつくって、東京から小さいボンベに水も汲んで新幹線に乗ってきたから大丈夫でした。その日は傾いた机に寝ましたが、前田さんが見かねて声をかけてくれたので、寝袋からすれば御殿みたいなところに連れて行ってもらって、毎日歩いて連れて行ってもらいました。

前田 交通機関がないから、歩いて帰らないとしょうがない。いくら寝袋をしいたって寒くてしょうがないでしょう。

田中 長田区、兵庫区、東灘区の地震が強かった。神戸市は横に広がっていて、真ん中はあんまり被害がないところもありました。

前田 後に里見秀俊さん（元全建総連税金対策部

ていしましたが、そんなものはすぐに空っぽ。水の供給をどうするかは大変でしたが、篠山支部の倉清春さん（篠山支部長）が運んでくれました。また、会議をする会場がありません。組合員のために何をするかと言っても会議をする場所がなくて、最初は少ない人数で今ある会館で会議を開き、さまざまな対策を考えました。

田中 頼りにしていた兵庫土建の会館がなくなっていたから、私の所（甲南土建）に空き地があったので、そこに4階建ての建物を建てて、支援職人さんに住んでもらいました。専門の調理師さんを入れて、朝と夜の食事をつくって、長いことあちらこちらと後片付けをもらったりしていました。震災の当時、平山和雄さん（元全建総連書記次長）が張り付いて頑張ってくれました。建物が足りないからと、兵庫県教職員組合の宿舎を借りてそこに住んでもらいました。

前田 全国から労働力として職人がきてくれましたが、その応援の人を受け入れる宿舎がなく、日教組の兵庫県教職員組合の建物があり、その時の会長は石井さんという方で、石井さんと秀ちゃん（田中秀和さん）が話をして、教職員組合の宿舎に受け入れをしました。

（長）も泊まりました。気が付きませんでした。里見さんは交通事故で足が悪かったんですね。歩いて行かないとしようがなかったが、あの往復は大変だったと思いました。

古市 ちょうどあの頃は私たちが働き年で、40歳になつて少し全国のことかわかつて、組合のこともわかつていような歳でした。携帯電話がまだ大きく、みんな固定電話がつぶれて通じないから、携帯電話を各組合に一つずつ配りました。その当時は、まだ団体の登記簿謄本を持っていけないと手続きできない時代でした。新幹線で小俣書記に運んできてもらいました。

田中 あの震災後、携帯電話を持ったのは兵庫県が一番でした。

1000カ所超の避難所でポスター掲示、組織拡大行動で仲間を結集

古市 私が一番感心したのは、すぐテレビで組合の宣伝をやり、避難所が1000カ所超もあったのにポスターを貼りだしたのは凄かったです。あれは良かった。

前田 避難所でポスターを掲示しました。連絡をくれとか、お金（組合が支給する支援金）を取りに来

てくれとか、救援物資を取りに来てくれとか書いてあるから、「すぐいい組合だな」と他の避難者がびっくりしたのは間違いないと思います。

古市 事実、組合員を増やすのに成功しました。

田中 避難所で、ベニヤ板の掲示板に求人やお知らせを書きました。だから、神戸新聞や毎日新聞の記者が来て宣伝してくれました。

前田 あの震災の翌年に、こんなことがあったからといって組合の大事な行動を休んだらダメだと思い、私が「拡大をやろう」と言いました。そうしたら組合員が、「事務局長、バカなこと言っつて、家に人がいないのにどうやって拡大するんだ」と言いました。私は「そんなこと言わないで、あっちこっちにバラバラになっても避難所に職人さんは行っているんだから、やったらいい」と言いました。それを唐沢さんが聞いて、「すごいことを言った。びっくりした」と。ここで一つ組合員を結集する時ではないかと思いました。みんなバラバラになって、気持ちが落ち着かない時代でした。

古市 東日本大震災では福島県、宮城県、岩手県にまたがっていて、福島県は放射能の問題があり、宮城では建物そのものは大丈夫でしたが事務所までの交通がないなど、それぞれ組合ごとに支援しなければ

密集していない地域とは差があったと思います。

心に残る全建総連運動とは

田中 土建の運動と関係ありませんが、いま健康麻雀の講師をしており、そこに出てくるのは、「お酒を飲まない」「タバコを吸わない」「賭けない」、この3原則と「人にやさしく、自分に厳しく」、これが原則。ただ全建総連の運動を見ると、人の足を引っ張るようなミスを鬼の首を取ったように追及しています。「人に厳しく、自分に優しい」と逆だから、あんまりよくないと思います。

前田 私たちが関わってきた運動の中で、一つ印象的なのは日雇健保擬制適用廃止反対闘争。これは大きい。それと唐沢さんの話が出ましたが、彼が政策的につくったものがいくつもあり、3・25全国統一行動、住宅デーは今でもずっと続いています。運動の形なり政策を提言できるというのは大事。土建運動をよく知っているというのが私の印象では唐沢さんが一番ありました。

私自身の運動の関わりは、職人の組合をつくるというところは大事だと思ってやってきました。そういう組合を目指すべきであって、普通の企業の組合とは違って、組織をしていく、全国的にあそこの組

ばいけない中身が違っていました。同じ方針ではできないため、すぐに岩手チーム、宮城チーム、福島チームをつくって、ほとんど全建総連書記局の機能はそればかりになりました。組合機能が壊れたところもあり、全建総連が行って組合機能を復活させました。あれもこれも、兵庫の震災から学習しました。

田中 神戸は震災、倒壊、火災。福島は原発がひどいから復興が遅れてしまう。神戸は20年かかると言われていましたが、3年程度で完全に直っていました。

前田 震災の後は惨憺たるもので、火事があり、家は大きく倒壊していました。道路の真ん中まで家が倒れていて通れない。道もふさがれて、通勤して歩くにも困りました。一番活躍したのはバイク。バイクだったらあちらこちらに行けました。

古市 浜名辰雄さん（元兵庫県連会長）がいつもバイクで来ていました。

前田 私は浜名さんが亡くなったのが一番こたえました。仲が良かったので。

田中 全建総連本部の林君（林裕司氏。元全建総連書記次長）も亡くなった（その後の兵庫支援を担当した）。

前田 まさに大都會での震災ということで、人口が

合はなかなかいい職人さんが集まっているな、というイメージを受けるためには、職人の組合というイメージがもっと前面に出てもよいと思います。

今もそれなりに努力していると思いますが、その時々々の政治情勢があるから難しいとも思います。そこは、笹田君（笹田己由氏。元全建総連専従役員、組織部長・住宅対策部長）が全方位外交という言葉を使っていました。それで良いのではないかと今でも思います。

そういうことを支える人材をどうやって育成していくのか、ということがあると思います。全建総連本部の指導部としての役割が地方から見るとあります。全建総連本部は輝いている星であってほしいと思います。

全建総連の組織は、全国的なレベルから見ても素晴らしいと思っています。普通、職人さんは見習い工から始まり、職人さんになり、一人親方になって中小事業主まで含めて組織されてきました。全国80万、90万を展望できる組織を今から先でもつくったって遅くはないと思います。これは書記局のみならず、単組のみなさんの奮闘を期待したいです。

以上

「役員OBインタビュー特集④」

組合全体が良くなれば一組合員の自分も良くなる 職人のための運動が必要

田村 豪勇さん（元全建総連中央執行委員長）

聞き手・古市良洋さん（元全建総連書記長）

※建設山口の吉村修委員長・小林和弘書記長が一部同席

2017年2月27日取材

日雇健保のため組合を結成

古市 田村さんが組合の活動に没頭するようになった経緯を教えてください。

田村 現場で、組合をつくれればタダで使える健康保険があるという話が伝わってきました。日雇健康保



田村豪勇さん

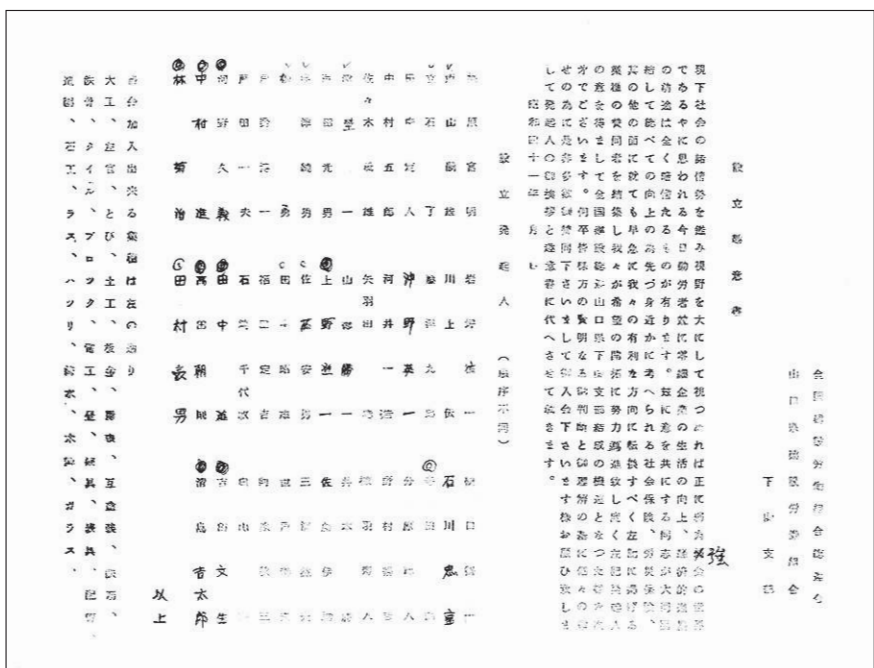
建設山口の書記長を33年、委員長を4年、中建国保の副理事長を15年、理事長を9年、また、全建総連では中央執行委員を29期、副委員長を2期、中央執行委員長を2期（2010～2011年）務められるなど、要職を歴任される。2012年に顧問
2024年6月6日、ご逝去

使って動ける範囲で、棟上げには馬車を使うくらいでした。ちょっと坂があると動けなくなるので、近くで仕事をしていました。自分の仕事をするエリアがありますが、その棟梁連中はうちの父を含めて10人ほどいたと思います。八頭を中心に3人の棟梁が中心になって大工組合を作るところでした。その結成集会に行ってみたところ、本堂に50～60人いました。話を聞いていると、組合結成の理由は、仁田商事という建材屋があつて、組合員になるとそこでツケで買えるようにするというのが一番大きな目的でした。加入できるのは大工だけだったので、そんな組合で何をするのかと思いました。私のところには大工だけでなく畳も左官もいるので、入るのは止めました。

その当時、全畳連（畳職工組合）がありましたが、そこから「組合をつくったら無料で病院にかかれる健康保険があり、事務所をつくれれば、保険が扱える」という話を聞きました。それだったら入ろうじゃないか、作ろうじゃないかということ動き始めました。ガリ刷で設立趣意書をつくりました（色々な職種の方が加入できるようにしている）。私たちが中心になって動き出し、40数人のグループになりました。その時に畳職工組合の方々がみんな

険です。

その1年前に大工組合ができるという話を耳にし、その結成集会が新地町にある妙蓮寺で行われるというので行きました。行ったら八頭という棟梁などがいきました。うちの父も当時棟梁で、昔の大工さんは車がないのであっちいきこっちいきせず、大八車を



山口県建設労働組合下関支部を結成した時の設立趣意書
田村豪勇さんが設立発起人の一人として名を連ねている（2段目左端）

入ったわけではなく、やめた人もいました。それで日雇健康保険を使い始めたのですが、当時の支部長は畳職工組合の役員で、その人が日雇健康保険で集めたお金を使いこみました。だから役員会を開くたびに組合をどうするかという話ではなく、支部長から保険料を取り返すために、夜になったら10人くらいで「金返せ」とやっていたわけです。そこで組合を完全に組織化しなければと、だんだん動き始めて、こういう変遷でできていったということです。

当時、全建総連には中央委員会というのがあって、田町で開催された時に初めて東京に行きました。それと同時に、山口県の執行委員になりました。

茶席づくりのため京都で腕を磨く

田村 下関で博覧会があつた頃、京都から左官の片田儀斉という人がきていて、その人が父に「（田村さんに）茶席を学ばせなさい。私は裏千家の関係があるから京都に連れていく」と言われ、行きました。そうは言っても行きっぱなしではありません。仕事がある時だけ京都にいました。今では孫が継いでいるのですが、片田工務店という所があります。

この儀斉と言う人が私を京都に連れて行って、裏

千家の関係ができあがって、山口と行ったり来たりが3年続きました。

古市 向こうに行つて左官の仕事をするのですか。

田村 左官の仕立てというのがありますが、下地をつくるわけです。例えば、昔の左官さんは今のように分業していないわけです。大工さんがなんでもやったものです。左官さんが屋根の瓦も葺く、壁の土も塗るなど、昔は全部湿式だったので、竹を割つたものを藁で組んだ縄で編んで、それに荒壁をつけて塗るんです。今でも本当の茶席はそうします。それで、塗っていくまでの過程でいろいろな木を使わなければいけないのです。貫を入れたり、下地まで入れて中の窓をくりぬいたりするのに大工の手が必要なのです。それでずっとやってきました。大工が必要な時に私が行き、1ヵ月ほど行つては、2、3日下関に戻つてまた行つたりの繰り返しでした。ずっと住み着いているわけではなく、京都の富小路松原というところに八勘という旅館があつたのですが、そこに下宿してやっていました。今でもそのあたりのことはよく知っています。それで、「あんたはようできた」と言ってもらえました。というのももうほとんど一人前になってから行つたんです。

古市 基本的に茶席だけやっていたのですか。

「夜だけ」という条件で説得し入社しました。私はキャバレーの時代、営業課長でいわゆる支配人でした。みんな私の指揮命令で動いていました。

当時、私の息子は3歳でした。私が（大工の）仕事から帰ると着替えて、またすぐに（キャバレーに）「いつてらっしゃい」でした。それで寝ているうちに帰ってきます。そういう時期が1年ほど続きました。その間に私は書記長の役職に就いていたので、キャバレーに務めていると夜の役員会に出られません。

そこで、女房の弟の享君が弟子入りで熊本から来ていて、代理で役員会に出てもらっていました。あんまりお小遣いを持たせて悪いことに使ってしまうといけないから、小遣いを持たせませんでした。当時の役員会はクリスマス前でしたからみんな二次会に行くわけです。役員会でもお酒は出していました。が、事業主の年配の方が多かったわけです。二次会の話になった時に義理の弟は、お金がないのでエレベーターを使わずにこっそりと労働会館の3階の会議室かららせん階段を歩いている時に、踏み外して落ちたのです。エレベーターを使っていた連中がそれに気が付いて、すぐに国立病院に担ぎ込みました。私の働いていたキャバレーにも連絡が来て、弟が

田村 茶席を中心にやっていました。それで、私も茶席をやるうとなつたわけです。私は「下関に京都をつくりたい」と思っていました。

「帰つてもいいよ」と言われて、それで帰つてから最初にやった茶席がキャバレーの社長である小田さんという社長の茶席だったわけです。その翌年、現在下関市内より車で30分くらいのところにある高杉晋作の墓所「東行庵」の中にある茶室「無隣庵」という茶席を作りました。26歳の時に小田さんの茶席をつくつて、27歳の時に無隣庵という茶席を作り、高杉晋作が亡くなった齢と同じ27歳で同時に組合も作りました。

義弟の手術の輸血に組合の仲間がみんな協力してくれる

田村 京都から帰つてきて翌年に、小田社長に頼まれて茶席をつくりました。仕事を通じて社長が私に惚れ込み、私を自分の会社にはしがりました。その時に、うちの父が「跡取りだから困る。会社に入れることはできない」と言つたので、茶席の仲立ちをしたお茶道具屋のおじいさんと小田さんの2人がお酒の飲めない父と私をキャバレー・ハイライトに連れて行つて毎晩飲ませるのです。父に「仕事を終わ

落ちて病院に担ぎこまれたと聞きました。病院に行つたら享君が大きな声を出しているわけです。たまたま運が悪く、土曜日なことに加えて役員会でお酒も出ていてその匂いもしたので、担当の医師は専門医でないから酔っぱらつてワーワー言っていると思つたのでしょう。一晩中その繰り返しでした。それで、日曜日まで丸まるそれだったので、手当が早ければ助かったと私は思っていますが、最終的には頭を打つて脳内出血です。後でわかったのですが、視神経を血が押していて、手術をしても助かりませんでした。1週間後に亡くなりました。

その時に、輸血をしなければならなかったのですが、一緒に来ていた役員たちがみんな献血してくれました。その当時血液は売血者と呼ばれる人がいる（くらい貴重な）時代に、新鮮な血液じゃないと脳手術ができないということで、組合員に頼んで、みんな血を供給してもらう体制をつくつて手術しました。最終的にはそれでも1週間目には心臓を機械で動かしていましたが、完全に脳死状態だと医者は断言しました。かわいそうに思いました。私は、これ以上苦しませてはいけなから本人のために心臓を動かしている機械を外してもらおうかと言いましたが、逆に医者が最後までベストを尽くさせてくれと



言いました。その時は本当に悲しかったです。医者
が、頼むから最後まで治療をさせてくれ、「ラスト
ベストです」と言った言葉がこびりついていました。
当時、中建国保が始まったばかりで、よく医者
のミスでの訴えが始まった時期です。その頃は念書
をとって手術する時代ではなく、家族は「医者が悪
い」と言いましたが、医者が悪い以上に運が悪かつ
たです。土日だったので。それは時代だからし
ょうがないと思って、諦めるしかなかった。全
労済の全員加入（の死亡共済）に入っていてその頃
100万円です。組合費の中からかけていて、その
お金が下りました。その当時の100万円は大きい
です。日当750円から専業になれば1000円も
らえるかの時代です。

**日雇健保擬適廃止反対闘争／カンパで東京へ代表を
送る**

田村 組合のことで東京に行く時は、夜行列車でみ
んな行くんです。今のように新幹線や飛行機を使っ
ていくような時代ではありませんでした。日雇健康
保険がなくなるかもしれないという時代だったので、
その時にカンパをするわけです。出張で行くのの日
当をもらっていくような時代ではなく、みんな手弁

建設山口）の組織人員はうなぎのぼりでした。その
当時、全建総連の唐沢平治さん（初代書記長）は
「山口建労に救世主が出た」と言っていました。
私から言わしてみれば、救世主は佐野勝郎さんでし
た（元兵庫土建書記長、元全建総連財政部長。建設
山口に事務局長として入局されていた）。佐野さん
が唐沢さんの指示でいてくれて尽力してくれていま
した。

その当時は田中角栄さんが総理大臣で、みんな真
面目に行動し、大衆行動をたくさん組んでいました。
その時、幕の内弁当が170円くらいで、お酒の
とつくりも1本買ってそれを持って行かせて真面目
に送り出していました。送り出すまでは飲み屋に
行って景気を付けて、駅まで歩いて行って送り出し
ていく。その途中でキャバレーに電話がかかってき
て、私も向かいました。キャバレーの期間は1年く
らいで、その繰り返しでした。

労働力プール化構想に危機感抱き、組合に本気になる

田村 私は、今のようない時代がくると思っていまし
た。中四国ブロック会議をやっている時に、私はも
う結婚していて、32、33歳の時ですが、建設省から
「中小企業戦略構想」という本が出ていました。50

当です。みんな組合が寄って汽車賃をつくり、代表
を送るのです。畳屋で書記次長をしていた吉田文
ちゃん（文生さん）が最初に「東京に行ってみ
たい」と言うわけです。ホームに役員が上がってい
って、蝶ネクタイをしている私も上がります。東京に
行って、明日帰ってくるということ、みんな手
握って「文ちゃん、頑張ってきてくれの」とみんな
が泣くような状態で真剣に見送ったものです。今は
そういったものは全くありません。そういう純情・
純真な気持ちが当時はありました。

私が書記長になった時点から並行して中建国保の
理事をやっており、その後、中建国保の副理事長に
なりました。副理事長は5期15年間やりました。そ
して、その後の理事長は3期9年やりました。その
前の組合会議員は1期2年半やったんですね。八木
さん（幹男さん・元建設山口会計）の後を継いで私
が組合会議員になりました。

日雇健保擬制適用廃止反対闘争で東京に行ったわ
けですが、日雇健康保険がなくなるかもしれない、地
区ごとに集会を開くわけですが下関の場合は組織人
員400人くらいになっていました。毎年何十人と
入ってくる、今では考えられない時代でした。1年
で100人くらい平気で増えていき、山口建労（現

ページほどのもので、空色の表紙でした。その本を
開けてみた時に、組合で力を入れないとんでもな
いことになると思いました。

その本には、今の町にいる職人さん、ちようど日
雇健康保険がなくなる時代ですが、「そんなのはは
びこらせたらロクなことにならないから、今の大手
の企業の中に下職としてみんな使う体制をつくるべ
きだ」と書かれていました。できればあの本がほし
いと思いますが、誰に聞いても知らないと言ってい
ます。そんな怖いことが書かれていて、それが今着
実にできています。社会保険未加入問題がそう
です。その途中に、苦しいから健保適用除外すること
によって、建設国保に残り、厚生年金と同等の扱い
となっています。その前段でそういう動きがあつて、
どんどん追い込まれてきています。もう40年も経っ
ています。

古市 当時、日建連が中心になって、「建設労働力
プール化構想」を打ち出し、建設大手が一人親方も
含め直接労働力を支配しようとしていました。
1970、1971（昭45、46）年のことです。

田村 ちようどその頃です。日雇健康保険もなく
なっている時です。

古市 政府や建設資本は、日雇健保擬適廃止で全建

総連の組織をガタガタにしようと狙っていましたが、あてが外れたため、次なる弾圧としてプール化構想や4国保組合（日鷹、日左連、全国板金、建設連合）の合同劇（全建総連の国保組合への揺さぶり）



ご自身の生い立ちから組合結成、日雇健保闘争、労働力プール化、運動論、税金対策、役員の心構えなど多岐にわたって話していただく（右は古市元書記長）

ているんです。

これは全建総連への苦言になるかもしれませんが、全建総連は委員長の定年制をつくりました。これは大きな間違いだったと思います。今、全国が困っています。定年を過ぎても優秀な人材を持っている団体もあるのです。まず中央執行委員になってから、副委員長になるにしても、中国地協であれば5組合あつて2年ずつと考えても10年になるわけです。その間に運よくその役がいい人に回っていればいいですが、それで運動が引く張っていいとは思いません。

私は、職人の運動と言うのはあっちもこっちもなく、正に「職人の運動」をやればいいじゃないかということが頭にありました。だから私が委員長になつたら絶対にそういう考えを無くすという気持ちがありました。一つにしていまいたかったです。

今は一つになったように見えますが、やがてまた（対立が）強くなる気がします。それが委員長の選考問題に引つかかってくると思います。その責任は、あの当時執行委員にいた全部の人間が定年制をつくったためにあると思います。専従の場合は定年制があつてもいいですが、非専従の場合は、定年制をつくつたら労働組合はダメなんです。だから私が山口で定年制を頑としてつくらせないのはそこなので

を仕掛けてきました。

プール化構想では、職別団体を日建連の支配下に置き、労働組合を排除・無力化することを目指していました。国保組合の全国4団体は、日建連のプール化構想に便乗して日建連から資金を引き出し、自ら招いた国保組合の赤字を何とかしようとしたことが各団体の利害対立もあつて、4国保組合の合同は失敗に終わりました。

田村 組合が力を持たないと大変なことになると、本気になり始めました。それと同時に弟の死が重なって、献血してくれた人にお返しすることができないから、そういう世界（キャバレー）から足を洗って、組合のことに本気になろうと決め、組合のことばかりになったのです。それから組合の「はしかにかかった」（熱中した）わけです。

やはり組合は「団結」、団結を保つリーダーシップが必要

田村 私たちは社会の虐げられた中で運動しているので、職人のための運動が必要なんだという思いで長い間やってきました。私は一組合員だという認識で、組合全体が良くなれば、一組合員である自分も良くなるんだという思いで今日まで運動を続けてき

す。いい人材は絶対にできません。

何とかして組織を伸ばしていくという時には、連合体なのであまりカチツとしたことをやってはいけません。ハンドルに遊びがありません。事故を起こします。遊びがあるからこそ安全に走れる、つまりは、ゆとりが必要です。

定年制でカチツと縛っていくようなものにしてしまつと、切れる時はいつぺんにきれます。今は国保予算の運動があるから保てていますが、もしこれが無くなった時には全建総連は解体でしょう。そういう憂き目をみないとも限りません。そうなつては困るので、みんなが団結しなければなりません。やはり組合と言うのは「団結」なんです。団結の輪を保つためにリーダーが取るリーダーシップが求められます。

税金対策の取り組み

田村 税金申告のことですが、マイナンバーができたため、一括申告ができなくなったので止めました。法律では一括申告できなくなっています。あくまで組合の運動としてやってきたことです。マイナンバーを書くために、私どもは勝手に流用することはできません。今度みんな団体で行くのですが、何が

起こるかと言うと全部窓口に行ったらマイナンバーを申告時に一つ一つ出すので、もう一度税務署で書かなければいけません。もし税務署がいじわるするんだとしたら、受け付けをしません。法律では受け付けなくてもいいことになっています。建設山口の下関支部は税金でナンバーワンです。これは佐野さんから学びました。山口を辞めていって、返り咲いた後に「田村さん、うちは税金をやっているから、山口県に広げていくためにうちの税金の指導をみてごらん」と言われました。

しかし、マイナンバーが入ってくると一括ではできません。それで、私は4〜5年前から「切り替えていかないと絶対に問題として出てくるよ」と言っていました。あのマイナンバーは今から30年も前に話が出ていて、今に始まった話ではありません。社会保険未加入問題もそうですが、私から言わせてみれば、なぜもう一度適用除外の運動をしないのかと思います。

税金については、下関支部では半数の役職員の人が指導できます。そういう風にしてきています。税金申告では本部から2人きて、うちは今までは250人くらいの人を見てきましたが、だんだん減ってきて最終的に98人でした。自分でできるので、

青色申告もそうで、今は白色でも収支内訳書をちゃんと書いているじゃないですか。下関で税金申告を始めたころは、収支内訳書が出た時でした。「書けません」と言うのと、税務署は「名前だけ書いてほしい。それで出したことにします」と約束して出してきました。名前の次は「売上を出してくれ」となって、10年かかってやっと全部できるようになりました。今度は、間違いなく指導をして、本人に確認して自署申告ですから、組合ばかり頼るのではなく、自分たちも頑張るということを組合員に思わせて、自分で出す努力と日ごろの伝票整理は自分でするんだと認知させます。そうすれば収支内訳書を白色でもちゃんとしていて、帳簿もちゃんとしているとなれば、次の運動があります。青色申告の10万円特別控除を引き上げる運動。我々の組合だけでなく、全国に波及します。できなくても声を出すんです。青だけでなく白でもちゃんとしている人には2万円の控除をするなど、運動としてやると非常に面白い運動になると思います。

私たちは税金のこといろいろなことを削られてきました。生命保険料控除まで新法と旧法で変わって損をしているじゃないですか。やがていつかはなくなっていくます。老年者控除もなくなつて、どん

できるようになり始めた人から自分で税務署に申告に行くようになりました。特に今回は私どもがまとめて一括でやらず全部封書に変えて投函する方法に変えました。初めてだから何か問題が出るかもしれませんが、その時は組合に言ってみよう。不利益がもしあったとしたら、私たちが組合として税務署交渉を改めてすると、これが運動だと言っているわけです。

たとえば仕事確保の運動でも、県本部は行政に行つて仕事をくれと言っていますが、下関ではやっていません。なぜかと言うと、仕事を取る、住宅デーをやるのは、本当は事業主がやることだからです。だから菰田さん（元建設埼玉委員長）なんかは賢かった。もう亡くなられましたが、彼は自分のエリアで「こもだ建総」の住宅デーをやっていました。本当はあれが地方でいっぱいできないとダメなんです。そうすれば、私たちは大手に勝てます。100万人になっていくんです。そういう芽をみんな摘んでしまっています。組合に仕事がたまたま来た場合、仕事の配分はどうしますか。暇な時はやってくれますが、忙しいときはどうですか。自分のお得意を持っている人はみんなしません。被るのは全部面倒を見る役員です。

どん削られていくのに黙って見ている理由がどこにありますか。我々労働者に不利益を及ぼすものには何でも反対していくというのが運動の骨格です。それを忘れた運動が全国にあります。それを克服して全国に広めていくことによって、組織人員100万人というのも夢ではありません。建設労働者が減つたと言っても450万人います。全建総連は61万人じゃないですか。それを100万人にする方法はいくらでもあります。なぜ気がつかないかということが言いたいのです。私にも2年の猶予があれば、今やっていると思います。

一番寂しかったことは、古市さんが突然辞めると言つた時です。悲しかったことは、佐野さんや加藤さんが亡くなったことです。

青年部で講演、役員の心構えとは

田村 この前、山口の青年部から講演を頼まれました。泊まり込みで、下関が担当だったので、うちの息子の弟子が下関の青年部長をやっています。息子が「うちの親父に講師を頼んだら、いつも組合の話をしているから面白いよ」と言つて、私を講師にシール（下関のショッピングセンター）でやつたわけです。2日目は徳島に行かなければならな

かったので、1日しかなく4時間休みなしのぶっ通しで話をしました。

組合の話ではなく、札幌農学校のクラーク博士の話からクリストファー・コロンブスの話まで全部歴史を通じて話をして、組合に結びつけました。今の札幌農学校の前に立っているクラーク博士の像は若い頃のもので。あの人は58歳くらいで自国に帰りました。彼が言った「少年よ、大志を抱け」のみが銅像の下に書かれています。私の読んだ本の中には、その続きがあり、「少年よ、大志を抱け、この年老いた私のように」とありました。私は運動をするとき、歳を忘れています。自分のように夢を持つてほしい。歳は関係ありません。コロンブスもそうで、アメリカ人でもイギリス人でもなく、奴隷船の船長です。西洋人で初めてアメリカ大陸を発見したのがコロンブスで、そういうことまで調べて、全部原稿を考えて話をしましたが、青年部の皆さんはだれも居眠りをしませんでした。4時間ぶっ通しですよ。その時に、建設山口の小林書記長も吉村委員長も来ていて、「役員たるものは人の上に立つ場合、威張るな、組合員の下になれ、下支えをして組合員を立ててやれ、これが運動なんだ。自分が引っ張っていいくなんて大間違いで、組合員に引っ張られて行け」

という話を青年部の中でしたら、青年部は「感激した。私たちはそのための組合だと感じた」と言っていました。

中建国保の給付率見直し

古市 中建の理事長と全建総連の委員長を歴任されましたが、中建の理事長をされていた時に、ちょうど給付率10割からの見直しの頃で、全建総連を二分するような状態になったので、その辺の話を聞かせ願えますか。

田村 給付率を変更するということは、それをやらないと国からの補助が減っていくことです。保険料を上げずに、全体に影響を及ぼさないようにするためには、やはり給付を変えた方が良いでしょうということです。給付は病気になる人が保険を使った時にはじめて活きる。ところが、病気になる人はいない人は8割か10割かというよりも保険料が安い方が良いでしょう。そこで、8割に切り替えようとの結論になったわけです。

そのことは、理事会の中でも随分もめました。その説明をしながらこなしっていったんですが、その時に傷病手当金の引き上げ、あるいは3000円までの頭打ちの足切りが始まっていきました。補助金が

という話を最後にしました。私が帰った後、2日目はみんなで反省会をしたそうで、ものすごい反応だったと言っていました。

その昔、学研がテレビで教材を売る宣伝がありました。その時に市議員で山口支部の組合員でもあった木田さんという人がいました。その人が私に「書記長、けしからん宣伝が出ている。あんた気がついたか」と言うのです。何とかしようじゃないかとなったんですが、学研の宣伝で小学校に入学する男の子に帽子をかぶらせて母親がランドセルを付けた子供を引っ張って行って、「おさむちゃん、あんたも勉強しなかつたらああなるよ」という宣伝でした。ああなるよと言った先では、ヘルメットをかぶった左官さんが首にタオルをまいてひげを生やして仕事をしています。これをテレビの宣伝でやって、けしからんとなって、山口県に学研を呼びました。

古市 全建総連も抗議しました。

田村 すぐやめてくれと言いましたが、やめるまでに2週間かかると言われ、「とんでもない。すぐやめてくれ」とやったことがありました。それが運動じゃないですか。その話をしたら、うちの執行委員の半分は鼻でわらっていました。頭にきて、「あんたら馬鹿か。あの宣伝と同じ。笑うとは何事か」と

減るよりもその方が得だという数字が出たんです。それで、給付率の変更へ舵を切っていきました。ただ、千葉土建は同じ中建国保の加盟組合でしたから（反対の意見も）当然だろうと思いますが、他の単県国保の方々がきましたが、筋違いだと思います。それは仕事にならないくらいです。

中建国保が給付率を10割から8割に下げるという話になった時、9割にという話もありましたが一気に8割まで下げました。その頃は、社会保険制度そのものが8割給付に下がっていった時代でした。あの当時は財政的にみんな苦労していました。どこでも国保の予算を組む際に大変ひどい時代があったということです。国保の給付率切り替えの話で、みんな苦しんでいました。

組合員の運動が使命

古市 あの時、全建総連に特別な委員会（基本問題検討委員会・1998年11月設置）がありましたね。

田村 あれがあったからこそお互いに切磋琢磨したのだと思います。それが一つになって力になるように、流れるような運動になったら本当の運動になります。

例えば、日本の政権をみたらわかるように、昔は

自民党に拮抗する社会党がありました。今は野党バラバラでそういったものはありません。一番いい例は日本の労働組合で、連合です。全建総連は中立労連に所属していて、総評もあって、新産別もありました。各労働組合が、その体系の中でいろいろな意見を出すことによって労働運動は盛り上がったんです。それが国の政策の中で、一つにまとめないと国は組合の言うことは聞かないとなった時に連合となって、力が弱まったのです。

そういう歴史があるので、全建総連は同じ轍を踏んではいけないというのが、さっきの組織人員100万の話につながります。連合の中にいる役員は、企業の中から出ているのでみんな定年制をもっています。ところが全建総連の中にある企業はみんな中小企業ですから、元気で働いている間は現役なのです。それをもって年齢で定年をつけて、非専従であろうとそれを押し込めることになると、夢も希望もなくなって、ほっとけということになります。ほっとけというムードがあった時に私は全建総連委員長になったので、どっちの世界も一緒にしました。そうすることが職人の運動なんです。

いま山口のうちの書記局に言っているのは、「皆さん方は山口の職員として運動している。あなた方

の運動というのはいくら吉村さん、小林さんという優秀な役員がいても二人に基づく運動はするな。組合員の運動をしる。それがお前たちの使命で、それを忘れてはいけない」と。どういうことかと言うと、昔は職員を長くとどめるな、とどめると退職金をたくさん払わなければいけないので入れ替わり立ち代わり辞めさせないと困るという理論がありました。だから私は金子君（書記局）が入った時に、職員の労働組合をつくれと言ったんです。そうしないと職員がかわいそうです。退職金まで払わなくていいという人がいっぱいいたんですから。

小林 退職金制度を作ろうという時、なかなか県内でもまとまりませんでしたが、最終的には職員の地位は確保してあげるべきだとなりました。

吉村 私が役員になって間もないころ、20年ほど前に「吉村さん、書記を全部辞めさせるぞ。新しくする。そうすると出費が3分の1で済む」と言っていた役員がいました。

小林 そういう役員さんがいたことは事実です。

東日本大震災、青木宏之さんとの出会い

田村 東日本大震災が起こった年は、私が全建総連委員長の時で神戸でいろいろな会議をやりました。

その時に全建連の会長だった青木宏之さん（元一般社団法人JBN・全国工務店協会会長、元全木協理事長）たちと一緒に全木協を立ち上げたんですね。中央執行委員会も神戸でやってみたり、すべて神戸に集中させてやったことがあります。神戸国際会議場を使い、今後災害が起こるから、災害のための対策委員会をつくろうと、その当時、養老孟司さんが委員長だった国土交通省内の「木の家づくりから林業再生を考える委員会」を立ち上げ、メンバー7人が集まっていました（田村さんも青木さんも当時のメンバー）。その委員長代理をしていた天野礼子さんがメンバーのことを7人の侍と呼びました。それで印象に残っています。

私が委員長の頃、国土交通省の住宅局の幹部の方と話をしたときに、私を気に入ってもらい、「木の家づくりから林業再生を考える委員会」の委員として出してほしいと全建総連に言ってきました。その時に青木さんと仲良くなりました。

あの時、青木さんから私に直に電話がありました。「なぜ田村さんは出ていないの」と。私は「案内がないから出ないよ」と言うのと、それはおかしいと言って慌ててやったんですが、その時に青木さんが言ったのは、「私と田村さんがいたから今、全建連

と全建総連は仲良くなれましたね。昔は本当にこれ（バチバチ・仲良くない）でした」。それが神戸の震災の後、つくった7人の侍の委員会があつてつながれました。お互い腹を割って話をしました。だから、そういう業界にいる方々に隠し事はいけません。いいと思ったら一緒に話をして、悪いところは改める。いいところは進んでやらないと、いいものはできません。

小林 あの時はナマズの学習会と言っていましたね。

田村 当時、国土交通省の中で話をしていたことは、次に起こるだろう場所や時期を予測していました。次に長野で起こるだろうと思っていました。それは東日本大震災でした。東日本大震災の際に、すぐ全建総連支援対策本部ができて現地へ行ってみると1933（昭和8）年にここまで津波が来たという標識が立っていました。その時代にやはり来ているんですね。それより下がやられています。その標識がいまでもあるんだと思います（昭和8年の三陸沖地震の際に、岩手県宮古市で「此処より下に家を建てるな」という石碑が建立されている話）。

小林 私も見ました。ここから上に逃げろという名言を残していました。

田村 写真もあります。あの時に今でも涙が出る

気がしますが、小学校があるところに立って海を見ている女の子が（津波にさらわれた）お母さんと呼んで、「海が憎い、海が憎い」と言っているんです。あれを見た時は、かわいそうで涙が出ました。

あの当時、支援部隊には自衛隊や各国の軍隊がいて、やはり軍隊の支援はすごいと思いました。例えば、自衛隊は地元の人たちの協力がかなりある一方、海外の軍隊にはありませんでした。それで、水のタンク的車からコックさんまで連れてきていました。全部生活するための部隊を連れてきていて、やっぱり海外は違うなあと思っていました。あの当時そういう力がなければ、現地の復興はできなかったと思います。

被災地に入って、流れているものを盗る人がいるわけじゃないですか。だから一般人を立ち入り禁止にしましたが、ボランティアの名を借りてお金を盗りに行くんです。ひどいものでした。

吉村 今、田村さんが言っていた同じ女の子だと思いますが、4歳のマナミちゃんと言う子が新聞に出ていて、「お母さん元気でいたらいいね」というのがありました。あれから、新聞の切り抜きで社会面の印象的なものをファイルしています。あれから6年が経過するので、小学校4年生くらいだと思いま

はやりたくありませんでした。私は一生アイディアマンである書記長で終わりたいかったです。組合の運動を組み立てていく喜びと、そして書記長と言うのは自分が一組合員であるという認識を持って、全体が良くなれば、自分も良くなるという信念、原点に戻ると言うことが私の原点だったようです。委員長になると上に祭り上げられるだけです。何もアイディアが出せません。ところが、私は山口の書記長だったので、山口の委員長になってもらわないと中央の委員長にはなりたくないということで、嫌々頭をそられたわけです。尼になったわけです。なった以上はその信念を貫くべきだということで、職人の一つにするんだという流れに走ったわけです。

隠された歴史を表に出すのが労働組合の運動

田村 萩支部をつくるときに「組合に入ったら選挙のことばかりやらされるんだ」と言われました。当時佐野さんもいましたが、萩の方々は封建的でその町に組合がきたら賃金の引上げばかりやる組合だ、親方連中はあんな団体に入ったらたまったもんじゃないというところから始まりました。それを説得に説得を重ねて一生懸命やってくれた方々がいました。それで今の萩があります。

すが、その子がランドセルを背負っている写真を見ましたが涙が出ます。ああいう光景は本当に社会の現状を映し出していますね。東日本大震災で被災した女の子が、お母さんと妹を待つ写真が出ていましたがあれは本当に泣けてきます。

書記長はアイディアマンで

田村 私が全建総連の中身を知ったのは、谷内富三さん（元全建総連書記次長）とかがいるところで、九州に行ったり来たりされる時に会食をして全国の情報を聞きます。だから全国の動きを知っていました。どこがどういう動きか知っていたので、私は的確に物を言っていました。

古市 当時、唐沢さんという厳しい書記長がいました。

田村 唐沢さんは非常に厳しい人でしたが、アイディアはすごかったですね。やはり書記長に向いていました。アイディアマンである書記長でないダメです。人の後を追うような運動は止めてほしい。自分のアイディアを駆使してどうすれば組合のみんなが良くなるかということを考えないと、本当の運動になりません。

全建総連の委員長をやると決断した時、私は本当

やはり、自分たちの都合の悪いところを隠してはダメで、歴史と言うのは権力者がつくるもので、都合が悪いと歴史を消します。隠された歴史と言うのが一番大事です。正直な国民の声なんです。それを表に出すのが労働組合の運動だと私は思っています。役員に都合のいいような過去の歴史をつくってはダメなんです。やはり堂々と胸を張って、悪いところは悪いと認め、悪いところを捨てて良いところを選ぶようにしてやっていくのが役員です。

労働組合の基本は建設業で働く労働者の不利益になることはすべて反対するという基本があります。これを忘れてはいけません。

組合費引き上げについて

田村 全建総連が何十年かぶりに組合費の値上げをしますね。それは当然だろうと思います。ただ山口の予算を組むときに、頭から上げるという感覚で組合費の値上げを言うてはいけません。山口の大会にかける時は、できるだけ上げない方法を前提として予算を組んでみて、どうしても削るところが無くなったら時に初めてみんなが了解します。削るところがいっぱいあると分かっているながらやると指摘されます。だから、削る要素を持たないように言葉を出

していかないといけません。

かつて中建国保の理事会で、反対された時に、私は「みなさん気持ちにはわかるが、反対も含めて意思統一してほしい」と言うのです。反対もあろうがそれを乗り切るためには意思統一をしないとできませんという評決をしました。

吉村 今でもその名残があるのか賛成反対で決はとりません。

田村 わかるまで説得するんです。活動家と言うのは歳をとってはいけないんです。

小林 田村さんが言われましたが、健康保険は後期高齢者に移行していても、1929（昭和4）年生まれくらいの人で元気でバリバリやっている人がいます。正直言って、うちの書記さんより腕力も体力もあります。仕事している人は腕を見たらすぐわかります。

加藤忠由元全建総連委員長の人柄

田村 加藤さんを一言で言うと言えなかったです。しかし、人前では涙を見せませんでした。お互いが話をするときにはいつも涙を流しました。なぜかという組合の運動を憂いてです。彼は非常に組合のことで生きた人で、私どもは1年でも長く加藤委員

長に続けてもらいたかったので、ずっとお願いをしてきましたが、最後に辞める時に「田村君、お前たちは俺を殺すのか。俺を辞めさせてくれ。俺の好きな競馬をやらせてくれ」と言いました。「俺は競馬が好きなんだ。それが生きがいだ」と言っていました。私はその時に反論したんですね。競馬と言うのは賭け事か博打ではないかと。加藤委員長は「違う。競馬の発祥はイギリスで、紳士のスポーツだ。俺は紳士でありたい」と言っていました。「俺に暇をくれ。あと1年、あと1年と言って何年やっているんだ。6年目じゃないか」と言われました。その時に「田村君、なんで前面に出ないんだ」とも言われました。私はまだできないという話をしました。

先輩たちの多くの経験を活かすのが組織を大きくするコツ

田村 山口の中でもOB会をつくらうという話がありました。私は止めてくれと言いました。よそにあるOB会というのはすべて昔の思い出話をするところで、私はそんなOB会はいらないと言いました。

たくさんの経験をした人の意見を聞くようなシステムで、卒業生を集めたものを組織の中で作るので

あれば賛成だと言いました。せっかく何十年にもわたってそういうものを作った人たちを無下にしているのはいかなものかと思います。それが、これから先、組織を大きくしていくコツなんだという話をしました。それに気がつかないとダメなんです。そういう古い人たちに残られると自分たちの悪口も出るから嫌だというのは、まだまだ人間が小さい。必死の覚悟でやるのです。人間と言うのはしょせん10本の指しかありません。

私のいままでやってきた人生、夢でも組合の運動ばかり見ていました。夢か現実か分からないことがあります。本当に組合のことばかり考えていました。

以上

【役員OBインタビュー特集⑤】

組合で学べ仕事も人脈も広がった

東 耕夫さん（元全建総連副中央執行委員長）

聞き手・古市良洋さん（元全建総連書記長）

2016年4月13日取材

父親の後を継ぎ大工の道へ

東 1931（昭和6）年8月21日、一番暑い日に9人兄弟の長男として生まれました。兄弟の面倒をみながら小学校に通い、中学校はなかったため尋常高等小学校でした（国民学校令が昭和16年に施行される前の学校のうち、尋常小学校の教科と高等小学校の教科とを一枝に併置した小学校。また、



東 耕夫さん

フレッセ（旧 全徳島建労）の委員長を1987年～2001年（7期14年）、全建総連では中央執行委員ののち、副委員長を9期（1989年～1997年）、中建国保では理事（14年）など歴任される

1940年前後は初等教育・尋常小学校、中等教育・高等小学校、高等教育・師範学校などが主）。私たちの時代は（小学）6年生で義務教育が終わり、尋常高等小学校では、2年間希望者だけ進学できました。私たちの時代は男子で90%の人が進学し、女子は4～5人しか進学しませんでした。この時代は戦争に明け暮れた時代で、尋常高等小学校を卒業する年、1945（昭和20）年8月15日に終戦になりました。勉強という勉強をしたのは（1945年度）後半の、年が明けて2ヵ月くらいでした。

私は長男でしたから、すぐに大工の父親の後を継ぐことになりました。長男は家を継ぐということで、兄弟は沢山いましたが女系家族だったため、2人目の子どもでしたが長男だったため大事にされました。弟以上に大事にしてもらったと身に染みて感じています。

1946（昭和21）年の5月6日から父親の弁当走り（使い走り）として後を追って大工の道に入りました。最初に取り掛かった仕事は、戦争中にあったタバコの乾燥室の家を改造して、徳島の二軒屋（地名）に建てました。通うと大変なので、建てている家に泊まり込みました。帰る時、親父は自転車

で、私は歩いて4時間かかりました。

戦後のため、道具もまともなものがありませんでした。鉋（かな）でも頭の割れたものでした。道具は現金では買えず、鑿（のみ）一丁を手に入れるのに「いでばし（ゆでばし）」（阿波弁・さつまいを茹でて干したもの。干し芋）一貫（3・736kg）で鑿一丁と交換できました。その時父親が与えてくれた道具は特に思い入れがあります。

当時は、墨つぼの糸でさえまともなものがなく、他のもので代用するとすぐに切れてしまい苦労しました。砥石（といし）も同様で、硬い砥石は重く、漬物石にしなければいけないようなものを買った記憶があります。そういう経験をして苦労をして物を大事にしました。刃が欠ければ、鎌を研いでいるような荒い石で一日中研いでいました。一服の時にも、手を休めることは少しありませんでした。家に帰ってきては道具を直します。ボロボロになった刃で、鋼そのものに粘り気がなく鉋を削ってもうまく削れず、折れてしまいます。それをまた一つ一つ研いで、なかなか大変でした。やっとのことで金剛砥石を父親が無理して手に入れてくれました。

それでも、父親が大工をしていたからお金に不自由はしていませんでした。戦後で、大工、職人とし

て人よりも給料は高かったと思います。父親はよくやっていました。その代わり、私は働いても最初の5年間は盆と正月に500円の小遣いをもらうだけでした。それも21～22歳（昭和27～28年）くらいになってからでした。お酒一本500円の時代で、同級生の友達と一緒にお酒を飲むことが年2回の楽しみでした。

尺貫法からメートル法に変わる中で家を建てる

東 そういう時代で生活をしていくうちに、住宅金融公庫の制度ができました。高度成長期で住宅もどんどん建っている時期に、ある建築士に「公庫制度を利用して家を建てる人たちの仕事をしてみないか」と言われました。ちょうど入職して5～6年が経っていて、たった60万円くらいで12坪の家を建てる仕事でした。

それがまた、道がないような場所でした。基礎は35000円くらいで地元の土建屋さんが来てくれましたが、苦勞して苦勞して完成させて、最後には引かれて3万円残され、1万5000円くれるようになりました。これを500円で割って月賦で払うようになって、公正証書を出して契約しました。その時、設計事務所に1万5000円手数料を取られ、

これでは完全に赤字でした。

幸いにして知り合いで懇意にってもらっていた人が山を持っていて、その人の山の木を間伐してほしいと言われました。価格はいくらでもいいということでした。あの時は柱の設計に10cmと書いてありました。その時初めてcmで書いてある図面を見ました。それまでは尺貫法でしたから。3寸3分(約10cm)と書いてあるということは引き面であれば良くて、仕上がりではないのだと思いました。これだけ細く引ければ細い木でもよっぽどきれいにとれます。こういう苦勞をして10cmの平屋の家ができたことを覚えています。

2級建築士を取って早くこれくらいの手続きができるようにならなきゃいけないと思い、何が何でもやるんだと頑張りました。建築士の勉強では数字、構造計算など色々あり、サインやコサインなど小学校を出ているだけの私には遠い話で、見たこともありませんでした。

2級建築士に合格 仕事増え土木も手がける

東 大工になって10年は経っていて、仕事も一人で作られていました。その頃、徳島新聞に2級建築士講座の告知を見つけ、「これこれ」と思い、6ヵ月

の期間(18〜21時まで3時間)、受講しました。土日以外は毎晩講座があり、先生は工業高校の先生でしたが、一番年上だった私にその方が親切に教えてくれました。私は卒業式に努力賞をもらえました。その年に2級建築士の試験がありました。母親が現場に合格通知のハガキを持ってきてくれた時は、天にも昇るほど嬉しく、思わず「ヤッター」と思いました。

それから、資格を武器に金融公庫の申し込みから図面を書いて手続きをすると、どんどん仕事が増えてきて、大工を3〜4人使っていました。基礎工事も頼んでいて、真壁、下地をつけて、荒壁をやってもらっていました。大工は造作が土木に追いつきません。その時に役場でわずか30万や50万の土木の仕事があり、3人を4人、5人にして土木の会社をつくりました。どんどん仕事をやっていくと突如災害があつて、うちには土木がいるから「県の指名に入ってもらえないか」と佐那河内(地名「さなごうち」)の土木の先輩から依頼がありました。すぐに河川工事をやりました。県の仕事はこれが初めてでした。

建材屋の紹介で組合を訪ねる

東 私の住む佐那河内村で太子講(聖徳太子を職能

神として信仰する同業の職人達が集まって、太子像を祀(まつ)り、飲食、会合)がありました。私がよくものを言うようになった18歳頃から、太子講に行くようになりました。太子講はお盆と正月の年2回行われていて、行ってみると年を取った人が喧嘩ばかりして、近所で100円、200円の請負の相場を50円くらいに安くやっているんじゃないかと掴み合いをするほどでした。

そんな時に、私がうすうす感じていたのは、サラリーマンは怪我をした時に休んでも労災があるが、建設業は何もないじゃないかと思いました。何かできないかいつも考えていた頃、徳島市へ新建材を買いに行き、建材屋と話をしていると、「労災を扱っている大工の組合がある」と聞きました。偶然、小松さんという建材屋の2階に組合事務所があることを知り、訪ねました。すると、庄野昌彦県議の父である庄野潔初代書記長がいて、保険(日雇健保)も労災もあるからいいじゃないと言ってくれました。

組合は至れり尽くせり 佐那河内支部を結成、初代支部長に

東 保険(日雇健保)も労災もあるし、組合は至れり尽くせりだと思いました。庄野さんがうちの太子

講に入っている5〜6人の若い衆に説明すると、「労働組合だなんて初めて聞いた」、先輩連中は「そんな条件のいいところなんて、いつかつぶれる」と言っていました。2ヵ月でも保険料が半分で済むし、その時の印紙20円か25円か忘れましたが、20日分はさんでやっていた時でした。それで、若手ばかりで集まって、年のいった人では7つ上の大野さん(後に県本部執行委員)が賛同してくれて、佐那河内支部を1968(昭和43)年7月に22人でつくりました。10割給付で労災もあり、私は2年くらいで執行部に加わりました。

翌年、中央委員会に初代支部長として参加しました。仕事というよりも、組織拡大について話をしていました。健康保険のことはあまり話さなくても、入りたい人だけ入れれば良かったのです。労災保険は制度として良いものだなと思いました。組合は日本の職人にとって、保険もあるし、労災もあるし画期的なもので盛り上がりました。2年も経つ頃には佐那河内支部の人数は60人にもなっていました。その年の中央委員会で、阿南支部の丸山さんが出席できなくなり、補充として私が全徳島建労(現フレックス)の執行委員として出席することとなりました。支部結成から1年で執行委員になりました。それが

組合とのつながりの始まりでした。

事業所も軌道にのり、組合加入で従業員も喜ぶ

東 うちの事業所も軌道に乗り、組合に入ると保険料の半分は負担してもらえ、労災もすぐ対応してもらえ、従業員も喜びました。

古市 日雇健康保険の保険料半分会を面倒みてくれたのですか。

東 その時は、職人も日雇印紙でした。徳島県建設国保組合になってから（保険料半額負担を）できました。この時は1969（昭和44）年で、（1年後に擬制適用廃止となるため）印紙の時はあまり長くありませんでした。

会社にしていたため全員を国保組合に入れました。佐那河内村では、土建屋も健康保険に入っていました。うちの従業員を全徳島建労佐那河内支部の組合員にして、保険料は半分負担すると伝えました。先輩などはびっくりして「お前はよく儲かっているな」と言われました。全然儲かってなんていませんでした。その後、佐那河内建設業協会をつくりました。私は大工上がりで土建屋の中で副会長をし、いつの間にか会長になっていました。

組合に入って、未知のことを組合で学び、役員に

くと、私のことをみんな知っていました。私が県庁へ行くと土木部長が、「東さん何の用事で来たんですか」と向こうから尋ねてくれるくらいフレッセの力が強かったのです。特に強くなったのは三木申三徳島県知事の時代（1981～1993年）からでした。その前の武市恭信知事（1965～1981年）の時よりも強かったです。三木さんは県議会の改革派から出ていた人で、組合との関係が強くなりました。次は圓藤寿穂知事（1993～2002年）でした。

古市 三木申三さんは組合が推薦して、応援して知事に当選しましたね。そこから県との関係性はバッチリになりましたね。圓藤さんも含めて。

東 圓藤さんになってから、圓藤さんを社会党が推薦しました。佐那河内では村長が圓藤さんの後援会長でした。議員ばかりでした。そうしたら、私に後援会の事務局長をやってくれと言われました。それで、役場もタイアップしてくれ、組合のお願いも役場が対応してくれました。補助金をもらったのは佐那河内支部が一番じゃないかと思っています。

フレッセが村の運動会に協賛して、走ったりするとフレッセ賞として景品を楽しみにしているものもありました。地域密着にしなければいけません。一

なったら東京へもしばしば行きましたし、学ぶことができてバラ色、恵まれていました。組合の会議に出ることで、社会情勢や建設労働者、経営者としての勉強にもなりました。同時に、組合のことに對しては絶対の自信を持っています。組合も私も波瀾万丈でしたが、私の人生は仕事と組合を両立しました。悔いありませんし、立派な組合であったことで恵まれています。最高の喜びです。何も言うことはありません。

組合も役員になって以降、仕事は任せっきりで、私は役所へ行くことしか仕事がありませんでした。全建総連の副委員長時代は、月に3日しか徳島にいないこともあり、手提げのビジネスバッグをいっぱい持って行っても、最後には洗濯物でいっぱいに入らなくなって、宅配便で自宅へ送ったことも度々ありました。

組合は地域密着でなければ

東 14年間、全徳島建労（フレッセ）の委員長を務めました。とりわけ、全建総連の副委員長も務めてからは、組合と全建総連の会議が重なり大変になりました。佐那河内の村長から「入札する日ならまず東さんに聞いてみよう」と言われ、県の土木課に行

番良い賞品を出すものだから「フレッセさん、今年の賞品は何？」と聞かれました。それから、地域のふれあいの郷という催し物が年1回あり、支部では、まな板などをつくって販売しました。小間物の木で、職人さんが1日ばかりで作り、売ったものを後で社会福祉協議会に寄付しました。そのため、佐那河内支部に補助金を付けてくれています。住宅デザイナーさんが来る所に密着していかないといけません。そういうことを発想したのも、本部へ出て地方へ行つて、そうしたことを企業より先取りしなければと思ったからです。うちはそういうまとまりが良いからできました。

立派な組合だからこそ今の私がある

東 佐那河内の建設業協会（の会員）は全部、全徳島建労（フレッセ）に加入し、建設国保も加入していました。イデオロギーで抵抗もありましたが、それはもう別問題だと思いました。組合員になったら保険料負担を半分してくれるから、皆さん喜んでくれました。同じ地域にいて、皆さんが建設業協会に繋がりが、皆さんフレッセの保険（国保組合）に入ればあればいいじゃないかと思っています。

私は佐那河内村の建設業協会の副会長、会長も務

めました。組合と建設業協会の役員をしたことになります。フレッセもバックにありますし。色々な役をやらせてもらいましたが勉強になりました。

こんな立派な組合だったからこそ、今の私があると思います。また、私が付き合った人は本当に良い人ばかりでした。全建総連では、私が行くのを把握して会議後の予定もしっかり段通りしてくれました。

日雇健保擬適廃止、組合最大のピンチで建設国保組合を設立

東 組合事務所が小松さんという建材屋の2階から、空いていた私の弟の家に移った頃は、日雇健保擬制適用がある良い時代で、私は全徳島建労の執行委員でした。擬制適用廃止問題では2、3回ほど東京へ行きました。日雇健保改悪案が廃案になった時は「やったー」と喜びましたが、その後に厚生省の通達で擬制適用が廃止になったことを聞かされた時は、私たちの声が聞こえなかったのだと思いました。そこからがたたかいました。

まず、廃止撤回運動に総力を挙げました。県庁に行き、詰めて詰めて（激しく叱責して）県庁の課長を泣かしました。結局、擬制適用廃止の救済として、

なく、運営でした。あの時は運営委員会、理事会と呼んでいましたが、どれも無茶苦茶でした。職人にとっても大変な時期だったと思います。

中建国保への移行

東 結局、1977（昭和52）年には、中建国保に移行するか議論となりましたが、徳島の医療費は高く、特に佐那河内の医療費が一番高かったのです。中建国保も「入っていいよ」とは言えるわけがありません。そんなに高いところはいらないと言われると思いました。

それから（中建国保への移行を検討し始めてから）というもの、唐沢平治さん（全建総連初代書記長・元中建国保理事長）に頼まないことにはしょうがありませんでしたが、色々と大きいことを（唐沢さんが）ふっかけてきます。「徳島が来る来ると言っても、兄やん（東さん）、中建国保は『うん』とは言わないぞ」と脅してきました。元々全徳島建労の名付け親は唐沢さんです。徳島建労と一緒にするという話を当初していましたが、できませんでした。中建国保に入ることに相当抵抗はありましたが、そこは全建総連という組織なので、医療費が高いから入れてもらえないという話にはならないのでは、

3000人以上の各組合は単県国保を設立することになりました（当時、県本部の組織数は5500人位）。国保組合をやる決めても資料も何もないところから始まり、建設国保組合設立の検討委員会をつくりました。委員長、書記長がいて、私、港茂さん、小川好弘さんの3人が委員でした。県評オルグの藤川さんに県庁から資料を全部引っ張りださせました。手探りで本部からの情報を聞きながら、一度やってみようとなりスタートしました。

あの時は全徳島建労最大のピンチでした。10日くらいぶつ通しで、2階で泊まったこともありましたが、一か八かで発足してからどんどん医療費は上がっていきました。保険料を決めるにしても3、4月に市町村国保の保険料が決まり、私たちは5月くらいに決めていました。四苦八苦しなりましたが、医療費がどんどん上がっていつて追いつかなくなっていました。ひどい時には、医療費を年2回値上げしていることもあったと思います（※石油危機後の狂乱物価の下で大幅な医療費の引き上げが行われ、とくに1974（昭和49）年には二度の改定で35・0%引き上げられたこともあった。物価も30%ほど値上がりした時期）。どんどん医療費が上がっていつて、その年は赤字でした。運動というものでは

と思いました。

当時の中建国保の常務は矢田忠昭さん（元全建総連書記長）でした。矢田さんは反対の立場でしたが、全徳島建労にはいい顔をしていました。唐沢さんと矢田さんの2人は手を組んでいたのでは、と当時思いました。唐沢さんは厳しく、矢田さんの策だと思いました。唐沢さんが優しく言って、矢田さんが厳しく言うのが本筋だと思いましたが、実際は逆でした。

全徳島建労は当時、長田委員長でした。長田さんは生粋の職人でしたので、交渉事が苦手でした。私は長田委員長に「2人（唐沢さんと矢田さん）は組んでいる」と話すと、「東さん、それなら交渉を任せたい。やってもらえないか」と言われ、当時副委員長だった私が交渉を引き受けました。一番揉めた問題は持参金でして、私は金額は駆け引きだと思っていて、また中建国保にもメンツがありました。唐沢さんはその時の理事長でしたから。とはいえ、唐沢さんもちらかと言えば全徳島建労の味方になっていたと思います。名付け親でしたから。色々ありましたが、双方の理解で中建国保に移行することができました。

移行から10年、改革に乗り出す

東 10年間、フレッセは中建国保の理事会で発言をしないよう、静かにしていました。10年経ったら一人前です。まず中建国保の内部から改革しようと私が理事会へ出席しました。ただ、あの膨大な数字を出されると、理事とはいえ十分な理解は難しいです。そのため、何百億円というお金を使っていくのだから、予算委員会のような組織づくりを提案しました。しかし、そう言っても耳を貸してくれません。

これは敵わないということで、全建総連の佐藤書記長（当時）に相談しました。私は「中建国保は膨大なお金を扱うのに、ただ事務局だけでやって、三役はあの数字の中身が分かるのか。もっと時間をかけて予算編成をすることが必要だ。予算委員会の方針を出し、委員選出はブロックごとに決めたらどうか」と言うと、佐藤書記長は「それはそうだ。全建総連でも財政部があつて議論している。中建国保に伝えておく」と言ってもらえました。それで予算委員会が設置され、言い出しつべだから最初から出席しました。すると、予算の中身がよく分かりました。

中建国保の運営で、ある程度大きい支部では未収金が出ていました。その未収金がある程度まで調整

するため、中建国保からお金を出して調整しようとしていました。未収金のための交付金では駄目です。未収金の責任は支部になるので、支部負担になります。だから支部は必死になります。なお、徳島県支部の未収金はゼロでした。未収金について、支部ができないことを本部がやってしまったら、県支部は必要ないのではないかと思いました。末端が緩んだら余計にできなくなってしまう。組織とはそういうもので、一本線はきちんとしておかenいといけないのです。そういうことで、中建にもお世話になつて、波乱万丈もありました。中建国保運営にはいろいろ勉強もさせてもらつて、補助率の闘争にも明け暮れました。どんどん医療費も上がっていきま

した。

古市 中建の年間予算が1000億円までいったこともありましたね。

東 1000億円近くなるのに、予算委員会をしないと何事かとなりました。960億円くらいの時がありました。いろいろ悩みもありましたが、中建の運営もなかなか大変だと思います。何が良いつて全建総連組織の要は社会保障の建設国保が一番の魅力だと思います。ここは中建も全建総連も、頭の中

給付率見直しで議論

東 中建国保の保険給付率見直しをめぐって組織分裂寸前の中、全建総連の中に賛成、反対の双方から5人ずつ出して話し合いをすることになり、四国ブロックは私が出ました。最初は互いに衝突して話にすらなりませんでした。とことん話し合い、物別れ寸前まで議論しました。結局は、議論は尽くしたとして加藤忠由元委員長に預けることになりました。

大工や技術屋からすると、こうした路線面でこんなにも争うのかと思いました。けれども、全建総連が踏み間違わなかったのは、加藤元委員長の人望、人格によるものだと思います。あの人があつて仲裁に入つたから、今の全建総連が残っていると思います。私の人生で一番尊敬する人は加藤元委員長です。私の先輩として。あまりしゃべらない人でしたが、ハートが良い人でした。こういう人たちに恵まれて、今の私をつくってくれたと思います。全建総連の危機を救ってくれたのは、加藤元委員長あつてこそだと思います。

「四方転び踏み台」に大工技術のすべてが詰まっている

古市 東さんが全建総連の中執、副委員長になつて、

技術対策部、最後は工務店関係もやってもらいました。技能者養成についてたくさん関わってもらい、

なおかつ自分のところで木匠塾を立ち上げられました。全国的にみると傑出した事業なので、木匠塾をやることになった経緯などの話をお願いします。

東 技術対策部は、一番思い出があります。当時は建設埼玉の菰田さん、神奈川県連の川上さんがいて、私たちは、中小企業の親方で5〜6人を雇用しているタイプでした。コモちゃん（菰田さん）は技対からずーっと伸びた人で、匠をつくると言っていました。よく勉強させてもらいました。

新しいことについては学びます。これからやっていくには、若い人を育てるため、徒弟ではなく、講習会をやり、技術を学ばせたり、講習会で資格を取らせたりもします。全国青年技能競技大会を中心にしようとする、一時は他のところから文句が出ました。あんな椅子（四方転び踏み台）をつくってどうなるのだと。私は「何を言ってるんだ」と憤りました。あの踏み台には大工技術のすべてが詰まっています。あれは矩計（かなばかり＝建物の最も重要な部分を上下に切断した詳細図の一つ）の縮図になつていて、我々の中では指金術と言います。あれがすべてできれば、一人前の棟梁になれます。



機関紙「全建総連」で「とくしま木匠塾」の開校について掲載（1995年5月1日付）

それだけのものがあの課題に詰まっています。それ以外にも材料が少なくて、採点がしやすく、技術が一番ハッキリ出るものです。これよりもいい課題がどこにあるのかと思います。ベストな課題です。

中央役員の任務分担では最初は、社会保障対策部の次に技対部の人数が多かったのです。しかし、時代の流れと共に、技対部を希望してなくなったのは、木造軸組構法と新工法に分かれて後継者が少なくなる兆しだと思いました。職業訓練校でも生徒が減っていてさみしい訓練校もありますが、技能検定は定着しています。これがあるから組合に入ろうかと思う要因の一つになっています。

大工育成校「とくしま木匠塾」に参画、後継者育成の見本に

東 一方、徳島で大工育成校「とくしま木匠塾」をつくることになったのは、木造住宅推進協議会（木住協）が県産材等の利用推進事業で林野庁から声がかかり、徳島県の木材関係の人が立ち上がったためです。その中に全徳島建労（フレッセ）も入っていました。

私と県住宅課長たちとの話し合いで、大工がいないと木材を使うに出来ないのではないかということ

棟梁をしていた若い人でしたが、「一人いい子がいるから、お前のところで教えてほしい。うちから派遣するようにしておくから」と言われました。それで、南徳島から東建設へ就職させました。その息子は今立派になっていて、建築士会の中で青年部長になっていて、それでうちに派遣させました。だから私は6人くらいを入れました。

そういう具合でしたが、10年間やってみたら親方に元気がなくなり、仕事がなくなってきました。私も最後に先生として出ましたが歳をとってききましたし、若い衆では教えることができません。最後に「1000万円の補助金があったら、もう2年くらい木匠塾の運営を伸ばせる。県住宅課に話をし

で、県住宅課が2年かけて徳島県の大工事情を調査しました。その結果、ある年に1万2000戸新築着工する中、これから10年すると人口が約半分になり、7000戸もできるのか分からない状況になるということでした。

急いで大工の後継者育成と木匠塾を行いました。ところが、近頃の若者を育てることを親方やその奥さんなど皆さんが嫌います。まず後継者育成の手をつけていこうと営繕課長は一生懸命でしたが、「財政的な支援等で親方にメリットをつくらないと後継者育成は誰ができるか」と言いました。それで、最初の2年間を生徒として木匠塾で預かることに。木匠塾の運営は、学校としてだけでなく、給料を払います。また、生徒の募集条件は、①親方の事業所に就職し事業所から派遣をもらうこと、②県庁に就職する高卒の初任給（当時は約14万円）と同程度を払うことでした。

しかし、いざやってみると今度は休みがありません。雇い入れている事業所にも2年間補助しました。私の事業所にも2人木匠塾に入れており、労災保険も雇用保険もかけました。仕事するのは土曜日だけで日曜日は休み、月曜日から金曜日は学校へ行きます。私は多い時には3人入っていました。大工の

ろ」と伝えても、木住協の事務局はお金のことで住宅課には言えません。それで、木住協の古参の方から後援会のようなフレッセにお願いしたいと言われて県庁に行きました。課長を訪ねると駄目で、知事のところへ行きました。知事は「財政当局も少しは頭を使え」と言ってくれました。それでどうにか800万円の予算がつき、2年間延長できました。それで、翌年か2年程度を見据えて終わりにしようということになりました。木匠塾は10年で区切りにして止めました。

ちなみに、木匠塾の卒業第1号は、全建総連全国青協議長をやっています（坂本健作議長。全国青協の第54期から第55期まで）。あの子は広島出身で、木匠塾の生徒募集で彼は新聞を見て応募してきました。徳島県内に住み込みで頑張っていました。優秀な子でした。徳島での生活に慣れてきて、こっちで結婚しました。今は鴨島（吉野川市）の鴨島鳳翔太鼓のリーダーになっています。

古市 2015年の11月、フレッセの50周年の記念行事の時に太鼓をたたいていましたよね。

東 今は地域に密着して、結婚して青年部で頑張っています。

そういうことで木匠塾の流れがあつて、あれが



あったから若手が残って立派になっていると思います。100%ではありませんが、8割がたは立派な大工になっています。あれは良かった。現場の人が講師になって、構造や設計は県の建築士会から専門家がきていました。構造は東大出の方がやってくれ、講師は申し分なく、現場は現場で組合が中心になっていました。徳島建労の（講師の）人も来ていました。後継者を育てるとい歴史の中で、大きく、全国版（全国の見本）になったと思います。各県の住宅政策として、住宅界や林業界がよく見に来ていました。

その時に私が思ったのは、職人というものは弱い立場だなということです。社会情勢の動きによって大きな変化があり、それは本当に底辺の人間である職人にとってはなかなか厳しいのです。昔は、5年間は死んでも技術を自分のものにしようと一生懸命やっていたので、社会の情勢は関係がありませんでした。一生懸命やった自信があります。そういう時代でした。これを周りが色々と言うからやりづらくなりました。

古市 5年間一生懸命一心不乱に根詰めてできる、ということがなかなかできにくい世の中になってしまいましたね。

ました。確か5、6年ほどやっていたのではないかと思います。訓練校に通っていた人や訓練校を辞めた人もいました。技能塾からは20人位が卒業しています。フレッセの組合員の中から講師として4人ほど交代でやってもらっていました。

生徒も色々な子がいました。大卒で電気の専門学校も出ている子がいて、大工の父親は住販メーカーの仕事をしていて、木造軸組構法を知りたいということでした。その子に教材をつくってあげました。

技能塾を卒業して2年位すると、大工を続けたかったが仕事がなく、訪問介護の車の運転手をやっていました。その子は「あの時（技能塾）は楽しくて面白かったのになあ」と悔やんでいました。当時、その子がつくったものはまだ残っていました。

一方、呆れるような子もいました。父親が親方で大工歴2年の子ですが、「鉋は研がなくていい。使いついて」と言っていました。やっぱり大工は道具を研いでみて、道具がきれいに直ったときに初めて一人前になります。しかし、鋸（のこぎり）にしても鉋にしても、鉋は面を取るにしても必要ないと言いましたので、私たちの時代は終わったなと本当に思いました。

一方、訓練校は良かったです。脱落者も出ました

東 大体統計を取ってみると、2年間我慢したら3年目から面白くなるのです。2年間は我慢の日々でしたが、我々の時は途中で逃げ出す人は1割もいませんでした。私の同級生には大工になった人がたくさんいます。ほかにする仕事がありませんでした。当時、日本の国土は焼け野原で、バラック（空地や災害後の焼け跡などに建設される仮設の建築物）という言葉はあの時できました。

それともう一つは大阪の万博が影響しています。高度成長の真ただ中で、大工と言うのはそこを機に悪くなりました。素人なのに仕事がたくさんあるので、新建材、新工法を使うと少しの経験で大工ができるようになりました。

木匠塾の後、後継者育成で「フレッセ大工技能塾」を開校

古市 かつて東さんが自分のところの作業場を使って教えたりしていたのは何だったのですか。

東 木匠塾が終わった後、フレッセ独自に後継者育成対策の一つとして「フレッセ大工技能塾」をやることに。私の職場には機械もすべてあったので、私のところでやることになりました。生徒は皆さん親方についている人で、若い子に規矩術を中心に教え

が、大工としての木造軸組構法が学べました。これがあったから徳島県は若い子が大工としてつながれたと思っています。今残っている人はいい仕事をしています。後になって電話をもらい「若い衆はいい仕事をしている。大きな家を建てているから一度見にきてあげてほしい」と言われました。場所を聞くと佐那河内村だというので驚きました。そういうのを見るとうれしく思います。

中央の政策に物言うのは全建総連本部の役割

古市 最近はやっと設計労務単価を上げないと賃金も上がらないので職人がいなくなりダメだと国交省も気づいて、ようやく設計労務単価を上げ始めました。かつて、設計労務単価が一気に落ちた時がありました。当時、東さんが全建総連副委員長の時で、これは一大事だから国交省を全建総連で取り巻いて、直ちに撤回させろと強い主張をされていました。

東 あの時感じたのは、「組織とはなんぞや」ということでした。大工の経費はどんどん上がる一方で、設計労務単価が下がってただ指をくわえてみているだけで腹が立って言わせてもらいました。ああいう政策論争は中央からどんな旗を振っていかないとできません。努力をしても私たちは弱い立場なので、



行政は手助けするような制度を作らなければいけません。1日働いて、生活費にいくらかかって、道具代がいくらかかるかという計算は前から出ています。それなのに、堂々と設計労務単価を引き下げたわけです。

そこで、当時私は副委員長だったので地方の出先機関へ中四国地協で向かいました。相手も最後には、「本省の管轄であり、ここでは答えることができない。本省へ申し上げる」と言ってくれましたが、そこまでです。既に決定した中央の政策に対して、地方で意見を言っても出先機関を通じて伝えるくらいしかできません。例えば、県や自治体交渉をしろと言いますが、地域の声を知るだけのことにしかならないわけです。中央の政策に関わる本省と相対することができるのは全建総連本部だけです。地方の運動は内輪向けの意味を固めるためのものだと思っています。

ただ、地方でも比較的效果が高いのがハガキ要請です。直接省庁へ届くからです。地方が自治体交渉をしても、向こうはビクともしません。私は全建総連の運動の中で、ハガキ要請は厚生省（現・厚生省）が手を上げるまでやらなければいけないと言ったことがあります。本省の職員からは「処分するこ

ともできないし、残業をして泊まる場所も確保できない。こっちからお願いをしているのだけれど、あれだけは止めてくれ」と言われたことがあります。ハガキ要請は省庁にとって堪えたなと思いました。

いま設計労務単価が4年連続で上がってきていますが、実際の状況では上がった分の単価はなかなか取れないと思いますが私は取りました。県の設計労務単価に反映し定着してくれたら、今度は設計労務単価を全建総連の運動の中で払えと、そういう運動を行えばある程度上がってくると思います。公共工事が上がれば民間も上がってきます。

賃金というの、やっぱりこれから親方にしろ職人さんが入って「ああ良かった」と感動するくらいのことをしたら、次の仕事につながっていくと思います。その意識改革を組織で何か教育課程にも入れようかと思うほどです。

古市 東さんは組合の仕事が増えてきたときに誰に後を任せたのですか。番頭は弟さんに任せたのですか。

東 土木については親父の郷の従兄弟が私より2歳上で、土木の経験者だったので、すぐ任せました。大工の方は私の弟子がいて、設計屋さんもいたので、あとは放っておいて、材料だけ注文しておけば何も

問題ありませんでした。

古市 東さんのところは建退共をかけてあげていて、職人さんに喜ばれたと聞いたことがあります。

東 かけてあげていました。みんな建退共をかけているなんて思っていなかったから、退職するときに余分にお金がもらえたら、こんなにももらえると思っ

組合には感謝でいっぱい

東 我々の組織は、一番の土台は技術、現場で働く人が中心になって行うことです。現場の人は事務面や運動面については弱いから、そこは専従役員が足りないものを助けてあげる。そのことを理解して運動をしていけば、あっちだこっちだと動く暇などないはず。そういうことを今も反省しています。

古市 全建総連大会を徳島でやり、かつ1万人突破記念式典をやって名称もフレッセに変え、東さんが努力をされたからですが、一番いい時に委員長をやりましたよね。

東 時期が良かったです。人間はこういうことをよく言いますが、大事なものが3つあります。「真面目」「努力」「運」が必要です。このどれか一つでも欠けているとダメで、いくら真面目に努力しても運

がなければ成功はしません。運はどんな人にもあり、一生に一度や二度はめぐってきます。この3つがそろそろ時があれば、それはその人の定めになります。これは人生の3原則と言います。

古市 運がきたときにそれを使い切れるかどうかです。

東 運を引き寄せるのは努力、真面目からくる信用の部分です。この3つがそろくと波に乗れます。そこに気づきました。真面目に努力していてもできない人はいるし、それは運がない人だなと思います。

息を抜きながらでもいいから、努力と真面目さ、人の信用というのは常に持っていないといけません。いつか運が巡ってくる時のために、残りの2つを心がけていけば、チャンスの波に乗れます。

全建総連という組織の中に入れてもらって、自分の仕事もプラスになり、人との触れ合いも世の中の人と比べると誰よりも多くの世界や人とお付き合いでき、感謝でいっぱいです。

景気のいい時に組合運動に入れたのもチャンスであり、「運」が良かったです。

古市 それもありますし、それを力にできています。例えば国交省との交渉に団長として行くと、その経験を県庁との交渉でもちゃんと活かされます。そう

いうことが誰でもはできません。東さんは存分に活かしていました。国交省と団長として話し合いをするわけですから、戻って県庁との交渉に活かすわけです。

以上

んな元気があったのかと、よくやったと思いました。

東 県庁側からしたら、国交省と話をしてきたという、よく話を聞いてくれます。国交省の誰と話をしてきたと聞かれて答えると効果てきめんでした。悪いことを本省に言われたら大変ですから。そういうことを積み重ねていきました。

人間の付き合いも邪念ではなく、組織の中で議論して、その方向にすると真摯に肝に銘じて、少しでも実行に移るようにしていくと少しもブレません。議論して議論してできあがったものを持っていくと相手に対しても説得力があり、動かすことができます。それはすべてのことに言えます。自分一人の力はたかが知れていますから、多くの議論は文殊の知恵で会議で議論することは大事です。

やっぱり何をやるにしても一つ気を引くとかアイデアを考えると面白いです。全建総連では、技術対策や工務店対策でも新しいメニューというか、課題を考えてみたらきゅっと引き締まります。

色々と波瀾万丈でした。「15年のあゆみ」（フレッセの年史）を昨日読み返してみましたが、当時はこ

【役員OBインタビュー特集⑥】

全建総連・中建国保は日本一の組織

栗山 司さん（元全建総連中執・元中建国保理事長）

聞き手：古市良洋さん（元全建総連書記長）

前田 淳さん（元中建国保常務理事）

2017年3月9日取材

「健保がほしい」と大工集まり組合結成

古市 栗山さんは、最初、絵をやっておられたんですよね。芸術新潮に不染鉄（ふせんてつ・東京生まれの日本画家）について書かれたのを読んだことがあります。最初は絵描きになるつもりだったのですか。



栗山 司さん

奈良建設（現アーキテクトン奈良）の結成当時のメンバーであり初代書記長、理事長、中建国保の理事長、全建総連中央執行委員などを歴任。奈良市議会議員1期、奈良県議会議員4期、務められる
2018年6月8日、ご逝去

栗山 はい。日本画の先生に師事したのですが、あまり良い作品ができませんでした。絵具を塗ることと、塗料を塗ることは同じようなことだと思い、塗装工としてアルバイトをやったことが始まりです。

古市 この世界に入ったのは若い時ですね。

栗山 22歳の時です。「とにかく健保がほしい」と奈良市中心に57人の大工さん達の名前が書かれた便箋1枚から奈良建設は発足しました（1955年4月の組合創立総会で「奈良建設組合」（仮称）として発足。同年7月の組合員総会で「奈良県建設労働組合」に決定。1995年の結成40周年を期に全面法人化を行い「社団法人奈良県建設業振興会」、現在は「一般社団法人アーキテクトン奈良」。組合結成から携わりました。

古市 全建総連に加盟する前から、加藤忠由さん（元全建総連委員長）とお知り合いだったとご本人からお聞きしたことがあります。

栗山 組合を結成した1955（昭和30）年は、ようやく戦後の食糧難、物不足の混乱時代を脱したとはいえ、大工さんたち、建設労働者の生活と、その社会的、経済的地位はまことに低いものでした。また、「ケガと弁当は手前持ち」と言われ、ケガや病気をすれば1円の収入もなくなり、そのうえ、医療

費や妻子の生活費にも事欠く状況で、それから逃れることが当時の大きな課題でした。そうした背景の中、加藤元委員長には奈良建設の結成を手伝っていただきました。

1960（昭和35）年11月には、当時、全建労、土建総連、東建産等いくつかに分かれていた建設労働組合の全国組織が全建総連として一本化をされることとなりました。組合活動を次々と進めていく中で、いち早く情報を知りたい、同じ仲間と頑張りたいなど、全国組織への加盟の願いが奈良建設の中に大きく持ち上がってきました。

そのため組合三役が10月17日に東京の全建労の加藤書記長（当時）を訪ね、加盟の了承を得ました。それを踏まえて、11月4日の定例役員会に諮り、正式に全建労への加盟を決定しました。そして11月24日、東京「中野公会堂」で全建総連の結成大会が開かれ、奈良建設から西田組合長と私が出席しました。

戦後の日本再建の大役担う建設労働者・職人を幸せにする建設労働運動は尊いもの

栗山 全建総連と中建国保という組織は、日本中で見ても立派な組織である、ということを前提として話したいと思います。建設の仕事に従事する者に

とって、幸せへの道は全建総連、中建国保の活動を進展させることが第一だと考えました。日本中の労働運動において、全建総連運動のように立派に活動しているところはあります。

全建総連が60周年（※取材は60周年の前に実施）を立派な姿で迎えられるということだと思うのは、日本は第2次世界大戦に敗北して以来、国民みんなに日本再建への大きな意気込みがありました。日本再建、1964（昭和39）年の東海道新幹線の開業、1970（昭和45）年の大阪万国博覧会の開催など、日本復興へと国民が努力をしたから成し遂げられたことです。

その大きな国民の願いの中心を担っているのは、建設労働者・建築職人なのは明らかであり、それに携わる人たちに熱意がなければ日本再建はできなかったことだと思います。仲間と一緒に、また一人の建設労働者として考えた時に、重要な役割を担う建設労働者・職人に、（ケガをした時などの）苦しみや不安な気持ちがあつてはならないことだと思います。

その第一歩として、建設職人・建設労働者にも健康保険が必要だと考えました。とにかく「健康保険がほしい」と。日本再建の大役を担い立つ建設労働

者・職人を幸せにする建設労働運動は、大変尊いものであると信じてきました。

日雇健保擬適廃止反対闘争で橋本政務次官に詰め寄る前田 私が（奈良建設に）初めて来たのは1971（昭和46）年か、1972（昭和47）年頃で、栗山さんがまだ40歳になっていなかったのではないかと思います。体が大きくはないのに精力的で、言い方は優しくかったです。怖い人でした。

栗山 「日本を再建するのに、建設労働者の力がなくて何ができるのか」と思っていました。政治家や官僚で自分のことを位が高いなんて思っている人はバカ者だと思っていました。

日雇健保闘争では、昔の厚生省のお粗末な建物には中庭があつて、そこに車を入れて、その屋根の上に乗ってシュプレヒコールをしたことを覚えています。そして、さんざん厚生大臣や政治家の悪口をマイクで怒鳴り散らす一方で、「大臣に会わせろ」というのですから、勇ましいものだったと思います。

古市 そうした運動があつて、今日の中建国保を作ったわけですが、日雇健康保険の擬制適用廃止阻止から建設国保設立へと方針転換をした時の苦勞などを教えてください。

八木一男代議士の日雇健保定へのご尽力

栗山 「建設労働者にも健康保険を」と望む多くの建設労働者がいました。そして日雇健康保険法が制定されましたが、その大きな力となったのが、八木一男さん（社会党の元衆院議員、奈良選挙区、1952年から8期）です。八木先生は、社会保障の充実を掲げて選挙をしたので、私たち奈良建設も応援したものです。日雇健保を八木先生が中心となつてつくったことは、建設職人にとって大きな力となったことだと思います。当時、いくら国会議員が当選しても、法律の一本もつくることができない中で、八木先生は官僚任せではなく、それはよく頑張ってくださいました。八木先生はたまたま奈良県の選出でした。あまり奈良県の自慢話ばかりしたくないのですが、あの当時、議員会館（今の議員会館とは違い、木造平屋建ての6畳一間の部屋が議員に与えられていた）で、夜通し徹夜で仕事をされて日雇健康保険法をつくっていただきました。

古市 私も若い時に、唐沢平治さん（全建総連初代書記長）から「日雇健保は八木先生がつくってくれた」といつも聞かされたものでした。

栗山 苦勞は大ありでした。内田厚生大臣に言っても「ダメだ（日雇健保擬制適用廃止通達の撤回）」としか言いません。今もそうかもしれないですが、あの当時は官僚が力を持っていて、官僚の言うとおりに政治が動いていました。

厚生省から擬制適用廃止の通達が出され、全建総連出身地方議員団の一員として、当時、厚生政務次官だった橋本龍太郎さん（のちに総理大臣）に会いに行き、「悪玉」と言つて日雇健保取り上げ撤回を迫りました。私は、ひと際高い声で「橋本さん、国保組合の適用を考えると言われたが、あれはウソか」「前向きに検討するとは何もしないことか」と迫ると、橋本さんはテーブルを叩いて、「分かりました。やりましょう」とおっしゃいました。橋本さんが「分かりました」とおっしゃったのは、建設労働者・職人は戦後の日本復興の力になっていて、これ無しには日本の再建はできないと思われたからだと思います。政治家としての判断をされたのだと思います。日本再建に大きな力を出してきた建設職人・建設労働者の働きを評価して下さり、本当の「分かりました。やりましょう」という言葉だったのだと思います。

組合と議員の仕事と一緒に動かす

古市 栗山さんは、建設長崎の江口利作さん（元全建総連委員長）と1959（昭和34）年に同期で市会議員になられたそうですね。

栗山 そうです。1959年、当時奈良建設の書記長だった私は、奈良市議に組合代表として25歳で立候補し当選することができ、1期を務めました。1967（昭和42）年には県議選に立候補し、トップ当選することができました。それまでに2回県議選（通常統一地方選挙、補欠選挙）では苦杯を喫しており、最後の機会と全組合員・支援団体と共に一丸となって、死に物狂いで選挙戦を頑張り抜きました。

江口さんとは、仕事確保に伴う住宅予算の獲得、公共工事の賃金引き上げ、建築関係の許認可、職業訓練の助成等もろもろの運動を議会活動によって解消していくなど、常に語り合つて組合運動を進めてきました。

古市 市会議員・県会議員と務められ、組合の仕事と議員の仕事と両方やられるというのは大変だったと思います。

栗山 善は急げということで、「建設労働者にも健康保険を」という要望のある間は、組合と議員の仕事



事を一緒にやりました。議員の仕事はどうだつてことではないのです。あの当時、日雇健保の適用を受けて手続きをして、病気になった時は症状をメモに書いた医療券を県へ出して認めてもらわないと使えなかったのです。

古市 今のようには保険証一枚あれば、という時代とは大きく違っていましたよね。

栗山 違っていました。だから県の職員と喧嘩もしなければいけませんでした。

先ほどの話にあった唐沢平治さんについて語っておきたいのですが、「全建総連が日本一」と私に言わしめるほど立派な組織になったというのは、唐沢さんの指導力、活躍によるところが確かにあると思います。

古市 私たち（当時の全建総連書記局員）にとって、唐沢さんは怖い人でした。東の唐沢、西の栗山という感じでした。

栗山 私は優しいものでしたよ。

西川きよし元参院議員への働きかけ

前田 栗山さん、こんなことはありませんでしたか。漫才師の西川きよしさんが参院議員になって、国会で国保組合たたきをやりましたよね。その時に、西

全建総連の旗の下に団結して運動を

栗山 全建総連・中建国保が日本一の組織というのは、まぎれもない事実です。そう感じていらっやらない方が多いかと思いますが。

全建総連がここまで発展してきたのは、「小異を捨てて大同に就く」という言葉にある通りで、それが良かったと思います。これからも全建総連は、ある一定の、特定の政党に影響を受けすぎたりしないしてほしいと思います。建築職人・建設労働者の社会的・経済的地位の向上には、全建総連の旗の下に、今後もまとまって運動していくことが重要だと思います。

前田 栗山さんが擬制適用の廃止から、国保組合の設立に大変な苦勞をされましたよね。今の中建国保は日本有数の国民健康保険組合です。栗山さんに中建国保の理事長をやっていたいて本当にありがたかったです。栗山さんに優秀な国民健康保険組合にしていたいたことも全建総連の年史に書いてもらいたいものです。

栗山 私は理事長をしたくはなかったのですよ。ずいぶん前田さんには抵抗したのですけれど、やることになりました。

前田 あの時はずみません、無理を言いました。

川議員の親類の方が奈良建設の組合員として入っていて、随分栗山さんにお骨折りいただいたことがありましたよね。

栗山 西川きよしさんとも一杯飲んだりしました。

古市 西川きよしさんには苦勞させられました。厚労省が私のところに泣きついてきました。「参議院の委員会でもた質問するそうだ。なんとかしてくれ」と。これは栗山さんをお願いするしかないとなって、栗山さんには何度も何度もお願いすることになりました。苦勞させられましたね。

栗山 前田さんからもお聞きしていたので、働きかけたら案外簡単に「はい、はい」となりました。

古市 ただ、そういう話も西川さんは委員会で「私が質問しようと思ったら、建設労働者の怖い人がすぐやってきて、建設国保の話をするのです」と言ってしまう。だから、建設国保を運営している人たちは大変な力を持っているのです、という話を委員会でした。

栗山 組合の役員をずっとしていただいていた左官の親方がいました。その息子さんのお嫁さんが西川きよしさんのお姉さんの子でした。

古市 栗山さん、長い時間ありがとうございました。

以上

*取材当時、栗山さんは病氣療養のため入院をされておりましたが、体調に無理のない範囲で昔のことを思い出していただきながら、時間をかけて少しずつ、ゆっくり氣力を振り絞りながらお話しをしてくださいました。

全建総連として、1年前から取材を依頼する中で、「体調は厳しくとも何とか応えたい」という栗山さんの強いお氣持ちがあつて実現した取材でした。感謝の念に堪えません。（事務局）



要求の旗は決して下ろすことはない 唯一の武器は「運動」

小林 昭夫さん（元全建総連中央執行委員）

聞き手…古市良洋さん（元全建総連書記長）

2017年3月31日取材

土建産業へ入局

小林 1年半近く社会党にいたのですが、ある時、組織部長をしていた小山哲男さんに「どこか組合のようなどころで仕事はありませんか」と相談してみると、「小林さん、土建産業にいつてみなよ。私の親友（飯田勝彦さん。元全建総連総務部長、教宣部



小林昭夫さん

全建総連の前身組織の一つである全建労の中核を成す東京土建産業労働組合（土建産業、現 首都圏建設産業ユニオン）に入局後、約半世紀に渡って組合運動に尽力される。全建総連中央執行委員（社会保障対策）を16期、東京都連社保対部長、首都圏建設産業ユニオン書記長、東建国保理事長などを歴任
2022年5月25日、ご逝去

日雇健保育成の牽引車だった

小林 全建総連結成以前、当時の全日土建（全日本土建一般労組、後に全国土建労働組合総連合。東京土建が中心）、全建労（全国土建産業労働組合連合会。土建産業が中心）、東建産（東京建設産業労働組合）などが日雇健康保険獲得期成同盟を結成し、日雇健保成立へ足並みを揃えました。

1953（昭和28）年11月に日雇健保法が施行され、「擬制適用」を認めさせることで建設労働者、職人、一人親方も組合加入を条件に適用させることができました。1964（昭和39）年3月には小林厚生大臣が「1965（昭和40）年から日雇健保をなくす。解散させる」と言明しましたが、全建総連の「日雇健保廃止反対」の運動が激化し、そして改善運動へと発展させていくこととなりました。

土建産業での活動（日雇健保について）

小林 私は土建産業に入ってからいきなり日雇健保の担当でした。日常業務に関することは何でも覚えさせられましたが、今でも忘れないのが「人に聞くな」「自分で覚えろ」が加藤委員長、飯田書記長の定番の発言でした。本当に徒弟制度そのもので、誰も教えてくれず、社会保険事務所に日参したものです。

長）が書記長をやっているから」と強く推されて行ったのが土建産業でした。

1962（昭和37）年10月2日に来い、ということで加藤忠由委員長（第8代全建総連委員長）と面接をしました。「今日からやれ」と言われて、机をあてがわれて事務の道具を一式持ってきてもらいました。鉛筆や消しゴムなどの中にそろばんがあつて、「組合がなぜそろばんを使いますか」と聞くと、「使うんだよ。一番大事なんだ」と言われました。後で考えると、保険料や組合費を計算するのに当時は電卓もなかったもので、そろばんが必要でした。

入局して1週間ほどして、私にやってもらいたいことがあるということで、何かと思ったら運動会でした。10月半ばのことで、訓練所（今の訓練校）と組合の合同で、その時の訓練所の担当は今村旬之介さんでした。今村さんは訓練所の事務局長で、彼と運動会を準備しました。そうすると、加藤委員長自ら運動会用の商品を買うに行くというわけです。今の新宿伊勢丹前の交差点の角に「くりはし」という何でも屋さんのような店があり、2人で行ってそこで品選びをしてたくさん買って帰りました。そんなことが書記局に入ってすぐの思い出でした。

日雇健康保険は保険証にハンコを押さなければならず、12ヵ月分のマスがあつてそこに1〜12月まで押していくのです。1枚26円で保険料にあたる印紙を日雇健保印紙貼布手帳というものに貼り、保険証と照合して印を押します。印紙の値段は20円と26円とがありました。全建総連関係は擬制適用なので26円と決められていました。全日自労（全日本自由労働組合）の人などは20円で安かったのです。本来は、今の建退共と同じく働いた日に貼り付ける必要があつたのですが、誰がどこで働いたか分からないので、私が担当していた時の擬制適用の場合（東京）は、1ヵ月に15枚の印紙を貼りました。ただ、2月と8月だけは18枚貼って調整をしていました。印紙は郵便局へ買いにいくのですが、あの当時60万円くらいの現金を持って渋谷の本局へ行つたものです。そうすると、飯田さんが心配をして「君、大金を持っているから注意しろよ」と行く度に言うのです。今の渋谷西武のB館が建つ前が三井銀行で、そこでお金を下ろすのですが、最初の頃はそこまで飯田さんがついてきて、下ろした後、飯田さんは事務所に帰って、私は郵便局まで抱えて行ったりしていました。

印紙は保険証ではなく手帳に貼り、保険証を社会

保険事務所へ新規で持って行くと、社会保険事務所が木版を押してくれず。当月分の印紙が手帳にちゃんと貼つてあるか確認できると、その翌月分まで木版を押してくれます。そうすると翌月までその保険証が使えることになります。

ハンコは保険証に押します。手帳は必ず消印をします。本当は手帳と照らし合わせる必要があるのですが、そこは信頼関係です。手帳は組合事務所に全部置いてあつて、1カ月に1回受払報告書を持って行って、ちゃんとうちは支払っているという証明にしてハンコを押してもらっていました。

例えば、組合員が来月保険証を使いたいとなると、一度組合に持ってこなければいけなくて、それが大変でした。分会によってはまとめて複数人分を持てきますし、突発的に医者にかかるうと思ってもハンコを押していないと使えないのです。そうすると慌てて来るなど、そういう仕組みだったのです。

日雇健保の取り扱いでの思い出

小林 「これが組合だよな」と思う出来事がありました。ある時、赤ちゃんを背負った若いお母さんが来て「いま病院へ行ってきたら、保険証にハンコがないからダメだつて言われた。ハンコを押してもら

は書記長の了解を取る必要があつたのかも知れませんが、相談もせず自分で判断して、その奥さんの持ってきた保険証1枚だけを持って社会保険事務所へ行き、ハンコを余分な月まで押してきました。正式に言えば良くないですが、「保険料を払ってくれたらハンコを押します」とは言えませんが、組合はそこまで不親切ではないという私の気持ちがあつて押しましたが、今でも押して良かったと思つています。やはり、組合はそういう温かみがないと組合ではないと思いました。

また、「どうしても日雇健保は嫌だ」という組合員がいました。というのも、子どもが修学旅行などで保険証のコピーを持っていく際に、「日雇」という文字が入っていると、とても嫌がるのです。1992（平成4）年4月の新聞報道（※前頁の写真）にあります、「日雇」の文字は取れました。沖田正人さん（土建産業副委員長、全建総連会計監査、渋谷区議会議員、都議会議員、衆院議員を歴任）が衆院議員になつてから、保険証から日雇の文字を取れという運動をしきりに行い、やっと実現した話です。その頃、うちは東建国保になつていたので日雇健保は使っていなかったのですが、沖田さんの悲願でした。沖田さんが社会労働委員会に入った

えませんか」と言ってきました。保険料と組合費が入っているか台帳で確認をしたのですが、2〜3カ月前から入っていませんでした。保険料が入っていないことを伝えると、「分かっています。いま主人の仕事が大変なんです。必ず払いますから」と言うので、「いいですよ」と答えました。こういうこと



保険証から「日雇」の文字が消されたことを報道する新聞記事。組織内議員だった沖田正人さんが在任中、一貫して厚生省に要求し実現へ

時に日雇健保の「日雇」を外せと活動してきたのです。

組合員と組合の強い信頼関係

小林 当時は組合員や家族との接触が多く、信頼関係がすごく強かったと思います。組合員も組合を頼りにしていて、大変でしたがすごくいい時代でした。自宅に電話をしても「組合ですが」で通じました。組合員と組合の接点がすごく強かったです。うぬぼれるわけではありませんが、やはり組合を頼つていたという部分が強かったと思います。そこは、書記局長としてとても誇りに思いました。

うちは分会会議を中心にやってきていて、分会は地域ごとに自転車で行ける範囲の近場の仲間が集まってやっていました。だから私のいた渋谷支部の話では、月の初めから12〜13日くらいまではびっしり分会会議の予定を入れていました。分会会議は個人宅でやっていたので、奥さんが「小林さん、夕飯まだでしょう。食べていきなさいよ」と言ってくれて夕飯をごちそうになります。そのうち親父さんが現場から帰ってきて、「泊まっていけ」とも言われ一杯やったりと随分と組合員との接点がありました。それは今でも自分の宝だと思っています。

入ったばかりの時は、とにかく「習うより慣れろ」の徒弟制度的にあれもこれもやっていました。うちは政管健保（協会けんぽ）も扱っていたのですが、日雇健保、労災保険、税金申告、資格取得の手続き、建設業許可など、こういうものにすべて精通していないといけませんでした。というのも、分会会議に行くと組合員は何でも知っていると思っていて、入りたての若造が行って「分かりません」というと「何言ってるんだお前、組合から来ているのだから」と言われるわけです。分らないと、「来月お答えします」と言っただけでした。

「組合員が、いい組合か判断するのは書記局の対応」

小林 組合員が「あの組合がいい、この組合がいい」というのが何を指すかというと、書記局の対応です。私は以前、書記局研修会に呼ばれて「小林さんの時代の組合はどうだったの」という話をした時の一つに、「組合員がいい組合か判断するのは書記局の対応だ」と言いました。「うちの組合は親切だよ、うちの組合はいろいろなことをやってくれる」などです。組合というのは入れ物ではなく、中の書記局のことを見て、「ここはいい組合だ、悪い組合だ」と判断するから注意した方がよいと言いました。

書記局というのは立場上辛い部分もあるのですが、世話活動というものを大事にしなければならないと思います。世話活動なんていう言い方をすると、社会党や共産党のものだというイメージがありました。私は「組合こそが世話活動」と思いました。1つの例で言うと、法律相談や不払いの相談、交通事故処理の対応など、そんなことまで私はやりました。私が入ってから4～5年経った25～26歳くらいの頃、まだ自分でも考えてすらいない結婚と離婚の相談をさせられた時には困りました。それ以降は「結婚と離婚の相談以外はなんでも相談に乗ります」と冗談で言ったことがあります。中には、子どもが大学に入ったからと言って、入学の書類を書いてほしいと頼まれもしました。それから、遺産相続の関係で公証役場に行ったこともあり、2～3人くらいの人に言われて保証人として付いて行きました。それだけ組合が信頼されていたと思います。

加藤元委員長から学んだ2つ

小林 私が今でも人間として加藤委員長から気づかされたことが2つあります。1つは、「我慢せよ、それでも我慢せよ」と言われたことです。私はいろいろなことをやりましたが、土建産業にそっくり組

合ごと加盟した中原大工組合（神奈川県）というところに訓練所があって、その仕事も担当していました。ある時、神奈川県に書類を出すために今村さんに手伝ってもらいながら徹夜で訓練所の申請書類を作り、県庁に届けに行きました。まさに行っている最中に、大工組合の役員で土建産業の副委員長だった方が土建産業に来ていて「担当の小林が全然やってくれない」と加藤委員長に申し入れをしました。私が県庁から事務所に戻った時に、加藤委員長からそのことを言われて、「徹夜でやって今届けてきたところなのに、そんなことを言われるくらいなら組合を辞めます」と言いました。その時、「何言ってるんだ、我慢しろ」と言われ、「いやいや、こんなことなら辞めます」と返すと「それでも我慢しろ」と言われ、「我慢の限界を超えても我慢しろ」というのが加藤委員長でした。それをきっかけに、我慢することを知りました。

もう1つは、東建国保を結成する時に、土建産業と西部建設と関建労（関東建設労働組合・現在建設ユニオンに合流している）の3組合で結成するところでした。ところが、東京建設や大森建設などのいわゆる五月会（さつきかい）というグループがあったので、そのメンバーは本来ならば中建国保に入るのが

筋でした。しかし、どうしても土建産業と一緒にいたいという申し入れがあって、一緒に結成することになりました。最初はAが土建産業、Bが西部建設、Cが関建労と記号がすでに出来上がっていたのですが、記号を振りなおした時に「Aが東京建設、Bが土建産業」と加藤委員長が訂正しました。私は委員長に「土建産業が主たるものだからAで、あとから来た東京建設がAになるのはおかしい」と言うと、「ちいちゃなこと（ちっちゃいこと）にこだわるな。もっと大きくなれ」と言われました。「相手をお客さんだと思えば一歩譲ったっていいだろう。君はなんでそんなことを言うんだ」と怒鳴られて、最終的には東京建設がAで土建産業がBになりましたが、こっちは不満やるかたなしでした。

そのおかげで書記以前に人間としての幅が広くなったし、重さを学ばされたと思います。そういう意味では加藤委員長を尊敬しています。

沖田正人さんと選挙

小林 私が組合に入った年（1962年）の夏に都議会渋谷選挙区の補欠選挙があったんです。社会党からは沖田正人さん（土建産業副委員長、全建総連会計監査、渋谷区議会議員、都議会議員、衆院議員

を歴任）、自民党から粕谷茂さん（元衆院議員）、共産党からも出て、沖田さんと粕谷さんの二人が当選しました。その翌年の1963（昭和38）年に統一地方選挙があつて、沖田さんが再出馬したんです。補欠選挙から1年くらい経つてもう1回選挙をやったんです。加藤委員長から「君は社会党にいたんだから、選挙をやってくれ」と指名されてその時から沖田選挙に関わるようになりました。それから32年くらいの間に都議会選挙は7回関わり、4勝3敗でした。沖田さんが都議会議員を辞めて、その次は新人の石塚聡さんを選挙に出して当選させました。その翌年に衆議院選挙があつて、いわゆる「おたかさんブーム」（日本社会党委員長・土井たか子を中心とする日本社会党優位の選挙戦のこと。1989年の第15回参院選挙、1990年の第39回衆院選挙）の時のことです。中野・杉並・渋谷の旧東京4区から社会党は二人出ました。沖田さんと外口玉子さんが出て、二人とも当選しました。その次の選挙の時に沖田さんは落ちて、政界を引退しました。

私は選挙以外に組合の仕事も抱えていました。大体、選挙の10ヵ月くらい前から執行委員会、沖田選挙に小林を出向させると正式に決めるわけです。ですが、沖田事務所は同じ土建産業の建物の2階で、

組合の仕事もやらなくてはいけませんでした。ある時、渋谷支部の事務所に行くときがなくて、2階を選対事務所にしていたのでそっちへ持っていかれていました。結局、そこで選挙の仕事と組合業務をするんです。

全建総連結成への期待

小林 私は全建総連が1960（昭和35）年に結成されてから2年後に入局をしましたが、全建総連会館が未完成なこともあり、中央執行委員会は土建産業で開かれていました。まだ土建産業の建物は落成2年目で新しかったです。全建総連が大同団結した意義は大きく、組合員と家族の生活を守る砦として全国の組合を通して仲間に伝わっています。もし、全建総連がなかったら私たちの運動は弱く、国や自治体、政党、政治家等を動かすことはできませんでした。

全建総連の各組合は当初、「自分の懐に入った金を組合費として自分で持つて行つて納める」ことをしていました。官公労、他産業労組では考えられないことでした。ここにも、「組合は自分たちのもの」という強い意識を持ち合わせていて、組合を誇りとしています。

日雇健保闘争

古市 日雇健保闘争で印象に残っていることを紹介してくれますか。闘争で人が2万人も集まって日比谷野外音楽堂に入りきれずに厚生省まで流れてきたそうですね。

小林 そういうのもありますし、野外音楽堂の外の公園部分もいっぱいになって苦情がきたという話も聞きました。一番は、大雨の日にたくさん集まりました。擬制適用廃止になる前に日雇健保の制度の危機がいくつかあったんです。1964（昭和39）年の3月に、時の小林武治厚生大臣の発言で「1965（昭和40）年をめどに日雇健康保険を廃止する」という話が出ました。そこで、全建総連はいち早く日雇健保を守る闘いに入っていました。

あの当時の日雇健保と言うのは政府にとってお荷物だったわけです。それまでに日雇健保の財政上の危機があり、1969（昭和44）年度の赤字は195億円、累積赤字は900億円で、1970（昭和45）年度は1200億円になると見込まれていました。というのも、全建総連では日雇健康保険法の制定から内容改善、国庫負担獲得などに取り組み、その結果療養期間を6ヵ月から1年、さらに2年への延長、入れ歯可などの改善をさせ、国庫負担も25%

から35%まで引き上げさせてきた結果、制定以来年々赤字が膨らんでいました。そうした背景の中、1969（昭和44）年5月に日雇健康保険法の改正案を国会に提出され、保険料の引き上げ、療養期間の延長が盛り込まれていましたが、健保特例法の煽りを受けて廃案となりました。1970（昭和45）年2月には同法案が再提出され、全建総連は連日わたって改悪反対運動を繰り広げました。その間、自民党からは3度にわたり修正案が提示され、全建総連など日雇健保共闘は保険料120円へ引き上げる案には反対、廃案にすべきと言う強行意見も出ました。そして、自民党の再修正案にも応じられないとして、日雇健保共闘は総評、社会党に廃案を申し入れることになりました。

全建総連は日雇健保擬制廃止反対運動と位置づけて、日雇健保共闘、これは日雇健保をつくるときにも組んでいたんですが、その時はこのほかに全日自労、全競労（全国競争労働組合）、全林野（全林野労働組合）そういう人たちが日雇健康保険を使っていたから、廃止するという発言に対して一躍立ち上がったわけです。今も予算要求行動を夏と冬にやっていますが、廃止反対運動と内容改善要求を合わせてやってきました。特に年末の寒い11・12月は、

古市 日雇健保廃止反対と内容改善がずっと続いたわけですね。そして、いよいよ1969（昭和44）年、1970（昭和45）年になってくるわけですが、全建総連が擬制適用廃止反対運動から、国保組合を日鳶（日本鳶工業連合会）がつくることになって方針転換を迫られたところのいきさつを教えてください。

人の仲間が結集。6月15〜20日にかけては厚生省で徹夜座り込み行動、6月18日には中央決起大会を行いました。

日雇健保の強制適用制度はなくなりましたのでお知らせします。

一 あなたが加入しておられる日雇労働者健康保険の強制適用制度は昭和四十五年五月三十一日かきりで廃止されることになりました。

二 日雇労働者健康保険の保険料は、六月分から納める必要はありませんが、五月三十一日までに入納めた保険料による診療手当金などの保険給付は、受けけることができます。

三 あなたが引き続き医療保険に加入できるように、つぎの手続きをとってください。

(一) あなたが持っている日雇健保の被保険者手帳は使えなくなりますので、ただちに、もよりの社会保険事務所に返してください。

(二) 市役所 区役所あるいは町役場で、国民健康保険の加入の手続き(被保険者資格取得届の届出)を六月一日から十四日以内にしてください。

昭和四十五年五月 (五〇)三二七 一 番

昭和四十五年五月
(五〇三)一七一番
社会保険庁医療保険部健康保険課

受給資格者票は返す必要がありません

(1) 新聞などでは、気がついていてもあると思いますが
 雇保健の日程問題がでています。
 これに関してあなたにも社会保険庁（厚生省）
 から直接「6月1日から雇保健の手帳は使用でき
 なくなつたから返送せよ」「6月分からは保険料は
 支払わなくて」となどの通知がとどくかも知れま
 せん。

(2) これは厚生省の一方的なやり方で、組合では今
 までこれを拒否しています。すでに8月末まで今
 さんが医者にかかれるよう法律的に確保しまし
 たらご安心下さい。

また、そのため6月も保険料は今までとおり納
 入して下さい。

(3) 9月以後については、いま組合と厚生省と話しあ
 っているが、今までのとおり変な新方法で値上
 げになるを見とされています。なお、保険料は値上
 げにならないようです（額に未定）。

(4) 今後は役所から文書で告げられるかも知れませ
 ん。これら組合と厚生省の口頭交渉のひきで
 すれば、弱味を組合で不利にしないようみんなで
 団結を固めましょう。

(5) 先方からの通知は分會まで組合へとくだ
 りてきます。保険料未納分は至急納入のこと（資格
 がとれなくなります）。

……不審な点は組合へ問い合せて下さい……

(左) 組合から仲間へ、「通知は厚生省の一方的なやり方」であり、弱みを見せないよう団結をよびかける緊急おしらせ

擬制適用廃止通達後の行動

小林 全建総連は擬制適用廃止の通達の後、抗議声明を出しました。加えて、中央闘争委員会を開催し、全国に厚生大臣、自民党への抗議電報や議員工作の行動を要請しました。1970（昭和45）年6月1日には、全国の社会保険事務所への交渉、座り込み行動を全国一斉に行いました。私たちは渋谷社会保険事務所での抗議行動を行い、土建産業渋谷支部10人、東京土建渋谷・目黒支部20人、関東建設10人、区労協20人の合計60人を動員しました。岡山では、社会保険事務所の職員が組合員に暴力をふるったという報告もありました。美濃部東京都知事と蜷川京都府知事から政府への反対要請もあり、私たちに激励のハガキが届いたりもしました。6月9日には、中央総決起大会が行われ、日比谷野外音楽堂と厚生省に総評、中立労連、社保協を含めた2万5000



P		P		P	
東京郡	厚生大原	東京郡	内田常雄	東京郡	日野野呂君徳貞保銀の無用償還額と利息増上について
	京生大原		豊田常雄		今例、庶務は前同会に日野野呂君徳貞保銀減決の一部改正を提議し、修繕費了のまま庶務になつたのを與へて、徳貞、無償適用を受けていた木工、左賀、等の無用の取扱いを五月三十一日限り閉止することとした。そのため、昭和二十八年風災、行政協賛として実施し、さらに、前同会の審議過程において一度は、その法制化も意圖された本制度を直ちに閉止し、早急に国民健康保険への移管、また国民健康保険組合設立を図らうとしてゐる旨通告することを附帯移行のためには、まず、無償適用省が充分その目的を理解するばかりでなく、受け入れに當つての公営國民健康保険の借款者たる坂市町村の理解と協力をもたなければならぬ。
					既定の方針により、無償を執行するならば、七月一日以降、その対象者が、適正な課税を受けることは極めて困難となり、延誤すべき事態の発生も避けられないてある。
					よつて、今回の借債について、健康保険臨時の抜本的改正の方角をふまえて、さらに慎重な検討を要請する。
					昭和四十五年五月二十六日
		東京都知事	奥池部嘉吉		

美濃部亮吉 東京都知事が擬制適用廃止措置について遺憾の意を表明
し内田厚生大臣に慎重な検討を要請

こうした通知に対して組合は「これは厚生省の一方的なやり方で、組合では今まで通り保険を扱います。皆さんが医者にかかれるよう法律的に確保しましたから安心してください」「保険料は6月分も今まで通り納めて下さい」「組合と厚生省の団体交渉の駆け引きです。弱みを見せて不利にならないようにみんなで団結を固めましょう」というお知らせと檄文を出しました。組合員のほとんどはこの組合の指示に従ってくれたと思いますし、やはり仲間の説得で分会会議でのオルグ活動は組合員と直接話

自民党政府、厚生省は、京都府や府民の生命と健康を守る切実な意見を無視して、一方的に日雇健保擬制適用の廃止通達をだしてきました。

京都府知事 蜷川虎三

厚生省は1961（昭和36）年に国民皆保険制度になつていたので、国保組合はつくらないという方針でした。しかし、擬制適用の廃止にもなつて動き始めたのが自民党です。私たちが擬制適用廃止反対の運動をずっと続けていたわけですが、1970（昭和45）年5月13日、いきなり廃止の通達が出たわけです。その瞬間には国保組合なんて思いもよらなかつたわけです。最初は擬制適用廃止の撤回を求める運動をやっていたんですが、すでにこの時点で自民党筋では擬制適用は復活させないというふうに厚生省の案をそのまま汲んでいたのだと思います。

ところが、この段階で日鳶は国保組合の認可をされていて、その後に全国板金や建設連合（日本建設組合連合）、日左連（日本左官業組合連合会）なんかはうちと同様に7月に入ってから認可されています。全建総連として総括の中で出たのは、擬制適用廃止は全建総連崩しだろうということでした。この流れには全建総連の力が強くなることに對しての懸念があったのは当然で、擬制適用廃止撤回で闘っている勢力を削ぐこともあったと思います。日鳶国保（全国建設工事業国保組合）設立に関する全建総連の見解が1970（昭和45）年9月に出ています。5月30日の段階で本人10割給付、家族7割にする、入院については日雇健保では2年まで、改正案では3年半となっていますが、国保組合では治るまでになつていきます。その他の給付は日雇健保並み、保険料はいくらというのができていました。これでもって自民党筋は日鳶に国保組合を作らせました。この日鳶への国保組合設立の認可は擬制適用廃止から1ヵ月でやっています。日鳶は自民党の強力な支持母体なので、そこに国保組合設立へ踏み切らせました。厚生省は新規設立を認めない方針でしたが、自民党の圧力に屈したんだと思います。



当時の資料や写真を振り返りながら語る小林さん（右）と古市さん（左）

全建総連は一生懸命廃止反対運動をやりながらも、一方では全建総連として国保組合に踏み切るのかどうか、闘争委員会ですったもんだがありました。

古市 全建総連の闘争委員会と日雇健保共闘の闘争委員会と別であつたんですね。

小林 別です。日雇健保共闘は全建総連が中心でしたが自労と全競労と全林野などがいました。

古市 そこに総評が絡んでいましたからね。

小林 絡んでいました。

古市 そうすると総評本部が実質上方針を指導するということになるでしょう。

小林 擬制適用廃止のやり取りの時も総評が入って、やはり社会党と全建総連とも直にやっていました。田邊誠さん（元衆院議員、日本社会党委員長など歴任）が社会労働委員会理事をやっていたと思います。よく自民党との話し合いをやっていて、全建総連としてはあくまでも日雇健保の修正案を呑めないということを伝えていました。最終的な修正案では療養期間を3年半まで伸ばしていましたが問題は保険料だったんです。

古市 高いランクの保険料を新しくつくるといことだったんですね。

小林 これまでは26円の印紙を貼っていたわけですが、

が、それを90円にするという案でした。90円に対しても反対をして、最終の自民党の修正案はもう一段階上げてきて120円になるとなっていて、これはどんなに頑張っても呑めないということで日雇健保法修正案を廃案にしてくれと要求しました。結果的に保健師助産師看護師法と抱き合わせで廃案になったわけです。

古市 修正案には擬制適用を法制化すると入っていますよね。

小林 今まで擬制適用というのは厚生省の通知一つだったので、止めようと思えば勝手に止められるものでしたが、法制化すれば簡単には廃止にできなくなるところまで向こうは言ってきました。

古市 やはり保険料が問題だったんですね。

小林 そうです。今まで500円くらいだった保険料がいきなり2000円になるので大変なことです。全建総連としてもこれは呑めない、他の日雇共闘も呑めないということになったわけです。

古市 他のところは日雇健保の法律適用で、擬制適用は全建総連グループだけです。

小林 そうです。だから擬制適用の組合に対しての保険料が120円まで上がる一方、自労や全競労などの保険料はずっと下がっていました。というのも

全建総連は親方衆まで入っていて、収入が高いのになんで日雇健保の安い保険料に入っているんだというのが厚生省にはいつも（その思いが）あつたんでしょう。

擬制適用廃止になる前の日雇健保法の修正案を呑むか呑まないかを中闘でやったんですが、その時に

色々とお出された中で、擬制適用廃止になったことによつて、国保組合設立へ方針転換を余儀なくされるということ、全建総連の中闘で色々検討したんですが、なぜ廃案までもつていったかという、やはり「それいけどんどん」なんです。

擬制適用廃止、国保組合設立へ向けた運動の評価

小林 「反省すべき点と評価」ということで、全建総連が中執（昭和45年9月6・7日）で出した総括の中には「きわめて厳しい情勢に屈せず、大会方針である統一要求をめざし、その可能性の少ないことを承知の上で全建総連30万が歩調をそろえて闘いぬいたのは評価するべきだ。統一要求によつて日雇健保共闘、総評、中立労連、社保協との共闘行動を強めて全野党が支持して闘ってくれた。擬制適用廃止反対早々から組織を守るために国保組合づくりなどに頑張ったこと。廃案により擬制適用廃止という最悪の状況が生じたが、政府・自民党を追いつめ修正案を出させるところまで闘い、一定の政治的打撃を与えた」というふうに評価しました。

反省すべき点には「統一要求や三重点要求を決めた理由や確認、内容について理解が完全に統一されていないなかった。そのため『廃案でいけ』、あるいは



『要求獲得でいけ』という意見が対立したまま国会の最終場面に臨まなければならなかったという点で、政府・自民党に隙をつくった」。それから総評から実際に出たのは「全建総連の方針は廃案なのか今まで通りなのかはつきりしない」「全建総連はずるい」というような不信感が表面化したこと、「廃案、擬制適用廃止という最も心配していた事態になり、組織の量と質の両面で被害をこうむった」というものでした。

実際に私が思うところとして、一つはうぬぼれがありました。日雇健保を廃止すると厚生省が言ってから7年間、廃止反対・内容改善と続けてこられたのは運動によるものだから、そういう運動をまたやれば擬制適用廃止をひっくり返せるという思いで軽く見ていた部分が実際にあったのではないかということです。ところがその最中、総選挙で自民党が圧勝したこともあって国会情勢が一変したこと（自民党300議席の大幅増、社会党90議席に激減）を見落としていたことについては反省する点となったわけですが、実際には派手な内部での強硬論、それに対して地味で現実的な意見。強硬論は「それいけどんどん、俺たちはやれば勝ってきているんだ」という意見、地味で現実的な意見は「内容的な部分をさ

らに改善させていく方がいいじゃないか」という、廃案になるかならないかの瀬戸際の議論です。そういうふうには強硬論が先行したために改正案を廃案までもっていつてしまったということです。その報復が擬制適用廃止ですから、攻撃型の戦法が廃止につながってしまったと私たちの側では受け取りました。一方は攻撃型で、私たちはここまで修正案を出させただからこれでいっていけば擬制適用廃止は止められたんじゃないかという総括です。だから国保組合が10割給付から8割給付になる時に、「日雇健保の二の舞はするなよ」という話はそこだったのです。その時に「それいけどんどん」をすると、国保組合そのものをつぶされてしまう危険性ははらんでいたもので、そういう教訓を得たということにつながっています。

国保組合設立で「自分たちの保険」へ

小林 国保組合を設立することで親方日の丸の日雇健保から自分たちの保険として、運営をしていくことになりました。当初、厚生省は保険料徴収の困難さから「国保組合ができて2、3年しか持たないだろう」と考えていたそうです。国保組合設立において、同業同種による組織化、保険料、給付率、付

加給付、保健事業などに取り組みましたが、特に保険料の徴収には厳しく取り組みました。滞納整理や滞納督促などです。それは、母体組合がすべての責任を負い、国保組合への納入は100%と決定し、それが国保組合を守ることになるというお互いの自覚と申し合わせがあったからです。なので口を酸っぱく「自分たちがつくり、自分たちが運営する、自分たちの健康保険」と言い、国保組合の優位性を強調しました。

加給付、保健事業などに取り組みましたが、特に保険料の徴収には厳しく取り組みました。滞納整理や滞納督促などです。それは、母体組合がすべての責任を負い、国保組合への納入は100%と決定し、それが国保組合を守ることになるというお互いの自覚と申し合わせがあったからです。なので口を酸っぱく「自分たちがつくり、自分たちが運営する、自分たちの健康保険」と言い、国保組合の優位性を強調しました。

国保組合設立から47年、果たしてきた役割

小林 国保組合設立から47年が経過し、その役割を振り返ることにします。擬制適用廃止という考えもしなかった大打撃をこうむっても、政治的、運動・要求的にも様々な手段を講じて立ち上がった良い意味でのしたたかさが私たち全建総連にはあり、それを活かしました。そこに全建総連が統一され、団結された意義が生まれたと言えます。

原点は、組合員と家族の健康を守るという全建総連のゆるぎない、今にも伝わってくる信念が続いています。これからもその旗を降ろさないようにしなければなりません。少なくとも、全建総連の各国保担当者は、国保組合が生まれた背景、50年に近い歴

史を学び、日常の仕事に活かし、国保組合を守るという気概を持ってほしいと願っています。

関鷲、日鷲と土建産業の関係

古市 関鷲（関東鷲職連合会）は土建産業に入っていたんですね。

小林 日鷲も今は工事業国保になっていますが、日鷲ができる前の1959（昭和34）2月と記録がありました。群馬、山梨、神奈川、北多摩、八王子、江戸消防といった鷲の組合が集結して関東鷲職連合会というのをつくり、その相談役に加藤委員長がなったと記録があります。加藤委員長が組織したと言われていますが、実際そうだと思います。事務所は土建産業の2階に間借りしていました。あれは1年くらいいたでしょうか。その時の事務局長が坪内さんという人で、坪内さんは後で笹川良一さん（元衆院議員、元日本船舶振興会会長）の秘書になりました。その人の下に中川勝さんという人がいて、この人は工事業国保の常務理事、専務理事、副理事長になりました。私はこの人をよく知っていました。その後、全国板金（全国板金業国保、全日本板金工業組合連合会）に行った人もいました。日鷲の前身は関鷲でした。その後からずっと日鷲の名誉会長と



いうのは大野伴睦（元衆院議員、自民党幹事長など歴任）とか、川島正次郎（元衆院議員、自民党副総裁などを歴任）、田中角栄（元総理大臣）など、いわゆる自民党の実力者が就いていました。

古市 関鳶は土建産業の加盟組合としてあったので、日鳶ができた時に加藤さんたちが働きかけを自民党にもしたのでしょうか。

小林 ちゃんと当時のこの全建総連手帳にも関東鳶職連合会というのが加盟組合として入っているんです。

古市 私は全建労の組織名簿に入っているのは見たことがあります。1964（昭和39）年の全建総連手帳に載っていますね。関東鳶職連合会。ちゃんと加盟組合として入っていますね。どこかのタイミングで抜けたのでしょうか。

小林 手帳にある関東鳶職連合会のところの住所、東京都渋谷区北谷町29とあり、土建産業の会館です。

古市 土建産業の会館にあったんですね。1963（昭和38）年のことです。

小林 高尾山に日鳶が石碑を建てていたのですが、そこに加藤忠由と名前が入っています。

小林 そういうことです。それで、1971（昭和46）年に特別区（東京23区）と国保組合の保険料負担の格差是正のため調整補助という項目で、話し合いを付けたということです。国保組合に対する補助方式と言うのは、特別区の被保険者一人あたりに対する都の交付金を参考に補助単価を定める方式として私たちは「特別区リンク方式」と呼んでいました。これは被保険者一人あたりの財源不足に準じて出すというふうにしたわけです。これは、新設国保組合、いわゆる擬制適用廃止以降にできた7つの国保組合については10割、既設国保組合には7割を補助する方式が当初は取られたわけです。その後、財源不足方式が変わって、これは各国保組合の必要経費から確保すべき収入額を差し引いた不足額に相当するものを国保組合の財政枠に応じて出しましょうという補助方式になりました。補助方式は頻繁に変えていました。国の法的制度と違って、東京都はあくまでも補助です。そういう制度でやってきました。

古市 最初是新設が10割で既設が7割ということは、擬制適用廃止直後は財政困難だからと言うことですね。

小林 そういうことです。いわゆる10・7ですと

東京都の国保組合・補助金について

古市 東京は国保組合関係では特別で都費の補助金があります。他の組合とは全く違う所なので、そこを東京都連の社保対部長として長年ご苦勞をされているので、その辺のことを教えてください。

小林 今言われたように、給付費に対して補助金を出しているのは東京都だけです。他は事務費として出ているのです。

古市 東京都知事が美濃部亮吉さん（美濃部達吉の息子。社会党・共産党推薦の初の革新系都知事）だったことが大きいんです。

小林 それも大きかったですね。同じ都民でありながら、なぜ国保組合の人たちには補助金がないのかという要求が出てきていたところなんです。

古市 そういう要求をまとめていたのですか。

小林 したのです。これは沖田さんがやったんです。沖田さんがちょうど美濃部時代に社会党の都議団の政調会長をやっていて、同じ東京都民でありながら国保組合に補助金がないのは不公平じゃないかと訴えたのです。ちょうど革新都政だったのでタイミングも良かったんです。

古市 市町村国保と同レベルの補助金を要求したということでしょうか。

きていました。私が国保協の幹事長をやっている最中に、もう既設・新設の垣根は取り払おうと決めました。だから、今はそれぞれの補助金格差はないはずなんです。

古市 それは財政力指数で所得調査の結果を使うということですね。

小林 いわゆる補助対象になる支出のものと、収入のもののバランスの問題でいつているわけです。補助方式そのものはそういうふうに変わっていききました。

東建国保の給付率変更について

小林 1998（平成10）年に給付率の見直しを話しました。私が最初に出したのは、建設ユニオンの中央執行委員会に6月の段階で出したんです。当時書記長で、「そんなことをなんでいきなり出すんだ」と言われましたが、情勢として説明をするために、いわゆる内圧・外圧と言う表現をしました。内圧というのは、これ以上組合員の皆さんが保険料引き上げになったら無理だろうという点。外圧はいつまでも10割給付をやっているようなところに国からはもちろん縛りもありましたが、東京都は国がそういう方針（給付率引き下げ）を出している以上、給付率



の見直しをしてくれないと補助金の対象から外すことになるから、その点でも無理だということです。そのことを今、こういう情勢ですから給付率の見直しについても考えなければならぬということを行いました。いきなりでしたが。

古市 いきなり提案したんですか。何の根回しもせず。

小林 しなかったんです。それで、もちろんユニオンの中執は紛糾しました。「東京都の補助金はどうなるんだ」「保険料が大幅に上がるのか」と、違う方へ話がいったしまったので、「今はまだそこまではいっていませんが、こういう動きです。こういう状況になりますということ皆さんに今伝えておきますので承知して下さい」と説明しました。

古市 1999（平成11）年に中建国保と東建国保は給付率を変更したんですね。

小林 中建国保と東建国保は、1999（平成11）年度から給付率を8割に引き下げたことを、1998（平成10）年に決定しました。東京都から「足並みを揃えて下さいよ」と何度も言われたんですが揃いませんでした。東京土建国保は、正式には2年遅れで実施しました。東京都は国保組合に対して理解がありました。

糾しました。翌年の建設ユニオンの大会でも「10割給付の撤退を書記長は考えているのか」という話を本会議、社保分科会でも追及され苦しい答弁をしてきました。それから東京都連の社保対部長だったので都連の大会でもそうです。

古市 それは1998（平成10）年の時ですか。

小林 そうです。敵前逃亡だの色々と言われました。この時、私は10割給付うんぬんではなく、「各国保組合で考えなさい」と言ったんです。要するに「東京都連で統一した見解で動くのではなく、そういう時期はもう過ぎてしまっているんです。給付率を含めた問題は各国保組合で考えるべきで、いつまでも東京都連一本でなんでもかんでもやるということではないんです」という意味を含みました。それがやはり攻撃的になりました。

先ほど言った東京都の国保委員会の見解というのが資料に書かれています。「東京都は国保組合について公営保険者を補完する役割と位置づけ、その育成に努めていく必要がある」ときっちり出しています。ここが大きいのです。

古市 結果としてこの趣旨を国会決議の中に入れてもらったのです。

小林 資料の中身をよく見ると、わずかでもそういう

古市 社会保障の一部だという認識があったんだと思います。

小林 それからもう一つ。東京都の国保委員会に「国保組合というのは公営国保の補完」という認識がありました。国保委員会の答申書に基づく「国保組合はちゃんと守れ」ということを絶えず言っていました。ですので、福祉局や国保の担当もそれに基づいてやっていました。でなければここまで国保組合を面倒みないと思います。

国保組合にきてから、東京都国保連合会の理事にすぐになり、国保組合協議会の幹事長を務めたりしたことで、東京都との話し合いはやりやすかったです。その後に、さらに7割になる時の話し合いでは、東建国保の理事長や副理事長としてではなくて、協議会の看板の方が強かったのかなと思いました。やはり22の国保組合を代表しているとなると、東京都も一目置くんです。それは一個人の問題ではなく。だから東京都との話し合いはやりやすかったです。

古市 この給付率見直しの問題で何か言っておかなければならないことはありますか。組織の中で厳しい批判にさらされたりなど。

小林 最初に8割給付の提案を、内圧・外圧という言葉を使いながらした時に、うちの執行委員会が紛

う趣旨はずっと出ています。

古市 それで、2004（平成16）年には7割給付にしましたが、あれはどういう経緯でしたか。健康保険法が7割になったからでしたか。

小林 そうです。本則（健康保険法）がすべて7割になったからやむを得ずやってくれということでした。2003（平成15）年度から7割給付へと国の方針に従うように強い要求があったんです。この時には東京土建国保、東建国保、中建国保東京都支部の3国保組合は足並みを揃えて7割給付に移行したんです。ここにいたるまでは、福祉局長から「国の方針で7割になることが決まったんだから、それが前提だ」とかなり強く言われました。

今後の全建総連への期待

小林 私は東建国保を含めて46年間組合に関わってきましたが、やはり建設労働運動なんて言うとおおげさですが、全建総連関係の仕事に携わって嬉しかったということから始めると、全建総連やユニオンという組織や組合がバックにあったのはすごく心強く感じました。それから、先ほども出しましたが国保組合協議会や他の団体との付き合いをすることによって、かなり人と人とのつながりが持てたこと

は、私が全建総連関係の仕事に入っていたからだと思いました。従って、何百人、何千人という知り合いができて交流ができました。

全建総連への期待は、私の経験から「要求の旗は決して下ろしてはいけない」し、「下ろしたら負けてしまう」ということです。自分たちの唯一の武器は「運動」だったんだということで、途中で立ち止まっただけはいけないんだということを自分の長い経験の中から感じたことです。全建総連について思うのはそういうことです。古市さんもよく知っているかと思いますが、昔、全建総連はスローガンに「組織なくしてたたかきなし、たたかいて勝てない」とありましたが、これは唐沢平治さん（全建総連初代書記長）が日頃から述べ運動の柱としていたのだと思います。私が組合に入ってから2、3年の時にスライドをつくったことがあります。千葉景一郎さん（元全建総連教宣部長）が中心でスライドを作ったんです。今のようなかしゃかしゃではなく、フィルムみたいにカリカリするもので、重たいテープレコーダーも持ってオルグで分会に行っていました。

あと一言で言うと、私たちや役員の皆さんは「無関心は罪（人類最大の罪は無関心）」だということを銘記することです。無関心はダメです。これはイ

ギリスのなんとか（バーナード・ショー。イギリスの作家。ノーベル文学賞を受賞）という人が言ったことらしく、無関心であってはならないということです。あと何年生きるかわかりませんが、腹に落とされています。

以上

【役員OBインタビュー特集⑧】

「組織があつてこそ運動ができる」

全国に組織がある全建総連は頼もしい存在

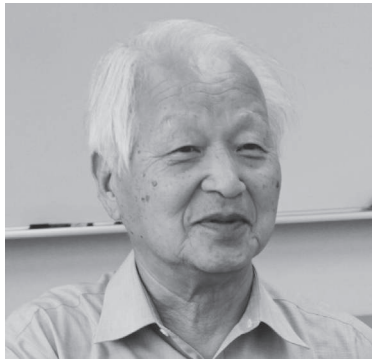
佐藤 正明さん（元全建総連書記長）

聞き手…古市良洋さん（元全建総連書記長）

2017年6月21日取材

生まれと家族について

佐藤 私は1942（昭和17）年8月30日生まれで、三重県員弁郡阿下喜町（現いなべ市北勢町阿下喜）の出身です。そこで次男として生まれ、残念ながら私の父は37歳で亡くなり、それ以来母親の手で姉、兄、私の3人を本当に苦勞して育ててくれ、本当に



佐藤正明さん

三重建労に26歳で入局。書記次長、書記長を歴任。全建総連では中央執行委員（賃金、社会保障）、財政部長、書記次長の後、書記長を1994～2007年まで13期務められる。2008～2010年に顧問
2021年11月15日、ご逝去

貧しい生活をしていました。幸いなことに持ち家はありました。私の父は大工をしていて、私が4歳の時に亡くなっています。あの頃は食料難で、栄養不足です。私はカチンコチンにやせてしまっていました。が、不思議と正義感だけは強くて、子ども同士のことでも色々と争ったりしたことがあります。家が貧しかったので大学は出ていません。県立の四日市工業高校を出ています。

日本合成ゴムに就職

佐藤 就職先は日本合成ゴム四日市工場でした。ところが、合成ゴムという会社は自衛隊出身者が従業員の半分以上を占めており、極端な差別会社でした。入った当初は大きい会社に入ったと喜んでいましたが、高卒はオペレーターといい、大卒はエンジニアと呼ばれます。日本語に直して、オペレーターは技能員、エンジニアは技術員と名札に書いてありました。

日本合成ゴムでの労働闘争

佐藤 四日市公害の闘争が行われて、私はその運動に参加しました。加えて、職場での身分差別や給料差別に不満を抱き、会社に対して反旗を翻すわけです。もう何冊も残っていませんが、「原点三重県四

日市公害10年の記録」（小野英二著、勁草書房）という本があり、私のことが書いてあります。

1968（昭和43）年、合成ゴムに勤めて8年ほど経った頃、私に千葉工場へ配転命令が出ます。その背景には、当時国策会社で国が持っていた40%の株式を放出することになって、労働組合があるところとか従業員持ち株制度を提案したことがあります。

「自分の足を食うタコだ」という内容で、ビラをまいたのです。私は当時、社青同（日本社会主義青年同盟）に入っていたので、私自身もビラをまきました。このビラについて「佐藤が書いたに間違いはない」ということで、労働組合からはけん責処分を受けます。その後すぐに、会社から千葉への配転命令が出ましたが、拒否しました。就業規則には現地へ赴かないと解雇と書いてあり、配転命令が出てから1～2週間四日市工場にとどまっていると、解雇になりました。不当解雇だということで、裁判をやり

ました。約5年間続け高裁までいったのですが敗訴となります。私は、「労使協調で組合と会社が一緒になって活動家を排除するのはおかしいじゃないか」「機械を壊したわけでもなく私は会社になにも危害を加えていない」と主張したのですが、裁判官は「佐藤さん、労使協調はなぜいけないのか。労働

組合が機関決定を行ったことについて、それは労働組合法上合法的なことで、あなたの言っていることがおかしい。解雇は正当なもの」と言いました。今思い出しても悔しい思い出です。

三重建労に入局

佐藤 その裁判の途中の1968（昭和43）年12月に三重県建設労働組合に入りました。その当時の三重建労はまだ連合会で、委員長の出身支部が本部になっていました。その時本部になっていた伊勢までしばらく通っていました。最初は日雇健康保険の証紙貼りをやりました。それから1週間ほどして、「こんなの労働組合と違うじゃないか」と思い書記長に辞めたいと伝えると、「そうは言っても他に働くところもないんだから」と言われ、三重建労に都合24年間在職することになりました。

日雇健保闘争と三建国保設立へ

佐藤 1970（昭和45）年5月に日雇健保の擬制適用が廃止されます。本部のすぐそばに社会保険事務所があつて、そこに組合員をたくさん連れて行きます。所長の机の上に土足で上がり込んで、「お前ら何をやるんだ」と言っていました。当時、「あな

たの保険証は廃止になりました。直ちに（市町村）国保に移ってください」というハガキが組合員宛にきていて、「これはなんだ」と私が先頭になってドンドコバンバカやり（闘い）しました。庁舎のなかに組合員を動員して座り込みをやって大声を出し、「警察を呼べるものなら呼んでみる」と言いましたが、呼ばれませんでした。当時、社会保険事務所は三重県に5つありましたが、全てでそういうことをやりました。

そして、もう一つ特徴的なこととして、組合員を1000人以上動員すると県庁の各階の廊下をすべて占拠することができ、座り込みをやりました。当時の民生部健康保険課国保係で大喧嘩をし、「絶対にこんなもの撤回しろ」とやっていました。他には、日雇健保擬制適用廃止反対の決起集会を2回ほどやりました。当時は、全通（全通信労働組合）、全電通（全国電気通信労働組合）が強く、自治労（全日本自治団体労働組合）や日教組（日本教職員組合）が来てくれて、集会をやったりしましたが、擬制適用廃止撤回を認めさせることはできませんでした。たまたま、三重建労と近い議員に木村俊夫さん（元衆院議員、内閣官房長官、経済企画庁長官などを歴任）がいて、当時官房長官をしていて、首相官

邸に入れました。木村さんを通じて、擬制適用廃止を止めてくれと訴えました。

全建総連でも記録に残っていると思いますが、厚生労働省の中庭でジグザグデモを（擬制適用廃止反対の運動を）やり、それは激しいものでした。私は当時28歳くらいで、デモをジグザグするのが大好きでした。その時は、全建総連もよく闘ったと思います。あの闘いがあったからこそ、政府も国保組合の設立を容認せざるを得なかったのだと思います。それまで長い間、三重県では三師会の国保組合以外は認めてこなかったものを、特別に建設国保の擬制適用の移行者だけを認めるという決定をしました。

あの頃の三重建労の機関紙を確認すると3ヵ月間発行していません。みんな国保組合の設立と言われても、何をやっていいのかわからなかったと思います。国保組合設立の方針が決定するものも、かなり難航したようでした。私はまだ中央に出ていなかったのですが、詳しいことはわかりませんでした。結果的には国保組合設立となりました。はじめは全国一本化で国保組合を設立する予定で、三重県でもその賛同署名を何百人か集めろという指示がきて、早速集めました。ところが方針が変わって、一方は全国一本で、ある程度組織が集まれそうところは単県国

保をつくってもらおうという方針に変わりました。三重県では三重県建設国保組合（三建国保・さんけんこくほ）として設立準備に入りました。これがまた大変で、必要だったのは「規約を作りなさい」「医療費の推計を作りなさい」「予算書を作りなさい」の主に三つです。それで、事務は当時私と20歳以上年上の女性で、規約を作るのも規約例を家内にガリを切らせて、それを県庁へもっていきました。医療費の推計も見よう見まねで作っていきました。六本木に三重県の東京事務所があり、そこへ泊まり込んで、国保課の職員2名と私で厚生省へ行って係官に見せました。そうするとボロカスのけちよんけちよんに言われました。要するに「医療費の推計がなくていい」ということでした。それと擬制適用と過誤調整はかなりできたのですが、その推計が全くできてないということで一晩寝ないでやりました。この時の屈辱感はありませんが、無事に認可を受けることができ、三重県建設国保組合を作りました。

少し前後しますが、三建国保の事務所については、今の本部会館の前の事務所がこの後ろにあります。それができるまではバラックのような掘っ立て小屋の事務所をまず建ててくれて、そこで事務を始めることになりました。国保組合を始めるには事務員が

必要だということで、それも家内の（勤めていた）会社から引っこ抜いてきました。なんとかやらなければということが始まりました。

ここで困ったのは、何をやっていいのか、どう作っていいのかわかりませんでした。県も国保組合の設立をずっとやったことがない人ばかりだったので。規約は法令集に載っていたので、それに則ってつくって出しました。あの頃の苦労は若かったので寝なくても大丈夫だったのですが、無茶苦茶に忙しかったです。そうこうしているうちに、擬制適用廃止者以外も加入できるようになり、それから組合員はどんどん増えていきました。ところが、日雇健保の時は証紙を21枚貼って500円ちょっとの保険料でしたが、平均的な大人で2100円にまで引き上がり、約4倍にもなりました。当初、組合員は大幅に減るかと思いましたがそうはならず、国保組合設立時には5200人いました。東京は3分の1ほど減りましたが、地方はそうではありませんでした。そこにはいろいろ理由があるのだと思います。

三重建労での運動・腰痛闘争委員会／資材闘争

佐藤 それからの運動では、腰痛の問題から取り組

みました。これは1970（昭和45）年のことで、まずは腰痛闘争委員会をつくって、のちに職業病闘争委員会と名前を変えます。それから、作業主任者足場、型枠の講習を組合として取り組みます。



熱く建設労働運動を語る佐藤さん（奥）、手前はインタビューの古市さん

当時、木材はもちろん資材が高騰します。三重県では田舎の方の藤原岳の下に小野田セメント（現在は太平洋セメントに合併）というところがありました。そこと国との交渉を行い、セメントの放出に成功しました。これはまた大変な交渉で、その当時は資材が必要なのに物がなく、商社が買い占めているのを目に見えていました。あの時、全建総連では商社とのたたかいをどんどんやってもらっていて、三重県でもそういう運動をやっていました。安定供給まではいきませんでした。資材闘争に費やした労力はかなりのものでした。

組織拡大、四日市支部の設立、賃金運動、税金対策など

佐藤 その頃から組織拡大に取り組まなければならないということになって、四日市支部を作りました。当時、四日市には、後に全建連（全国中小建築工業団体連合会）の方にいきますが四日市大工組合というところが既存の組織でありました。宮原富治さん（元全建総連副委員長。25〜31期）が四日市支部をつくるときに、説明会に自分のところの職人などをどんと連れてきてくれました。四日市支部の成功が後のいろいろな問題に結びつくのですが、三重建

労10番目の支部として設立されました。

私は血気盛んな人間なので、こんなの無理だと言われた決起集会を3・25に合わせて行います。最初は1974（昭和49）年だったと思いますが、津の体育館で行い、県下から1974人集めました。今から考えると、津の体育館から県庁までデモするのは大変なことです。そういう決起集会を何年続けたのかはつきりしませんが、ほとんど毎年1000人規模の集会を開催しました。私はいろいろな運動をやっていたので、組合は行動してないと死んでいくと凝り固まっていて、かなり強引なことをやった中の一つです。

それから、停滞していた松阪支部に手入れをします。当時300名くらいの支部でしたが、三重建労所属の専従者を送り込み、500名まで増やしました。それから、1977（昭和52）年に上野支部をつくりました。ここにも既存の大工組合があり、三重建労に加盟しないかと交渉をしましたが、「どうも三重建労さんとは筋が合わない」ということで、結果的には全建連に入りました。

前後しますが、仕事不足という問題もありました。1975（昭和50）年に、三重県建設総合住宅センターをつくりました。協同組合で、何が目的だった

のかというと、住宅生協の発注する住宅をその辺の工務店が請けていて、それをうちで請けようと特定建設業の許可も取りました。最初はうまくいくのですが、そのうち住宅生協と単価の問題で大喧嘩をしました。

税金対策では、三重建労の税金対策は支部の専従者を強くしなければいけないということで、組合員の半数動員を目指します。当時、住民税だけでなく、所得税の税金申告を知らなければならず、税金対策にかなり時間をかけました。大型間接税と消費税の関係はずっと続くのですが、1978（昭和53）年に消費税の闘争を三重建労と、他の県では県評と呼んでいます。三重建労では県労協（三重県労働組合協議会）、三重県生協連（三重県生活協同組合連合会）の3者で共闘会議をつくります。私は消費税闘争を徹底してやりました。

それから、石綿対策を一生懸命やりました。当時名古屋大学の講師をしていた久永先生や柴田先生、今でもお付き合いがありますね。レントゲン検診について、初めに社会保険病院で間接撮影をやって、それでおかしい人たちを久永先生たちの行う直接撮影をして肺活量や喀痰検査をやりました。ところが、三重建労からはアスベストの認定がなかなか取れま

せんでした。

三重建労が連合会から単一組織に

佐藤 そういう運動をやりながら三重建労の規約改正を行って、連合会規約から単一組織規約に変更し、三重県建設労働組合のもとに支部があるという形をとります。こうした行動は、上意下達ではなく、民主的にやったつもりです。そうして着々とやっていくので、単一化を決めた時には6000人組織になっていました。

ヨーロッパ視察

佐藤 外国人労働者問題で、1989（平成元）年11月に日本大学商学部教授の永山利和先生と全建総連の伊藤恵一郎さん（元専従役員。組織部長・技術対策部長・賃金対策部長・工務店対策部長を歴任）、東京土建の太和田享さん、埼玉土建の石塚至さんからフランス、西ドイツ、スイス、ベルギーに行きました。私はこの時初めてヨーロッパに行って、嬉しかったです。ここで感銘を受けたことがあって、労働者には「移動の権利」があるとILOの研究員に言われました。移動の権利というのは、国を超えて移動することで、世界では難民問題でもめています

会があつて、その時に前田幸太郎さん（元全建総連委員長）と、財政部長をしていた岡山の太塚実さんから次の財政部長をお願いされました。非専従なのでいいかと考え了承しました。それで財政部長になり、単独としては7年やりました。

それから1992（平成4）年に宮崎で大会が開かれた際に、それ以前からも説得を受けていたのですが、全建総連書記次長をやる約束しました。しかし、すぐには書記次長として東京へは行きませんでした。1989（平成元）年頃から、全建総連に来いという話で、唐沢さん（全建総連初代書記長）、矢田さん（元全建総連書記長）、加藤さん（元全建総連委員長）の3人から電話がかかってくるんです。私は当時、現職の専従者がなればいいと思っていたので、お断りをしていました。本当は行きたくありませんでした。しかし、断り切れなくなったことと、みんながそう言ってくれるので、東京へ行こうと思ったのは、一回きりの人生なので、断って何が残るのかと思ったのと、東京で私が行ってきたことが通用するのか、みんなに受け入れられるかということには不安がありましたが行くことに決めました。三重建労の大会が2月にあつて、3月から全建総連に書記次長として務めることになりました。そうし

が、あの当時日本で外国人労働者を入れるべきかどうかという論争がありました。私はどちらかというと、入れるべきだという考え方でした。条件はいろいろとあつて、人が来るだけでなく、物が来れば文化も来る、家族も来る、悪弊も来ます。

ヨーロッパに行つてつくづく思ったのは、先進国だと思っていましたが、トルコに対する反発や批判はひどいものでした。あの頃の外国人労働者はほとんどトルコからの人でした。それから、西ドイツの建設会社に行つたときに西ドイツの経営者に、日本は経営者の天国、ドイツは労働者の天国と言われます。

三重建労から全建総連へ

佐藤 いよいよ全建総連に行く話になります。今の三重建労会館ができたのが1993（平成5）年2月で、ここを去るときに私はさみしい思いをしました。この会館の2階にはホールがあつて、そこで壮行式があつて、それとは別に送別会もやってくれました。私は三重建労に約24年いて、50歳になってから東京へ行きました。

全建総連では、最初に財政部長をやりました。

1985（昭和60）年に佐賀県武雄市で全建総連大

ていると、5月頃には声が出なくなりました。

声が出なくなってしまう

佐藤 初めは近くの耳鼻咽喉科に行ってみました。原因はよくわからないと言われました。いろいろ調べてみると、のどの病気、喉頭ガンについては順天堂大学の付属医院の診察を受けるのがいいということで行きました。そうすると、生検と言つてのどの細胞を採取して検査します。一回目は「ガン細胞は見つかりませんでした」と言われるだけでしたが、二回目受けてみると残念ながら「ガン細胞があります」と言われました。手術はのどを切ると思っていました。レーザーで焼き切ります。その後、リンパックという放射線治療装置でここ（のどのあたり）を35回も焼きます。これが苦しくて、へとへとになりました。あの時3ヵ月くらい休んでいました。皆さん見舞いに来てくださってありがたかったです。が、返事をするのができず筆談しかできませんでした。私の病名は喉頭ガンでした。そこで医学書の該当のところを見ると、5年生存率25%と書いてあり、それを見てもう駄目だと思いました。当時50歳なので、55歳までに死ぬのかと思いました。それで先生に聞くと「もう放射線治療が終わっているので

大丈夫です。結果が良ければ直ります」と言われました。入院している途中に、夏だったのでシャワーを浴びてもいいと言われて、浴びている最中にダメだと言われていましたが声を出してみました。そうすると声が出て嬉しくて泣けてきました。

阪神・淡路大震災

佐藤 1995（平成7）年1月に、阪神・淡路大震災が起こります。救援対策本部を書記局に作って、私が本部長、平山書記次長が事務局長となります。それで物資の支援と現地対策本部を作らなければいけなくて、現地は平山さんがやってくれました。当初、お金については2億円もあれば足りると思っていましたが、兵庫県連の共済が死者について高い金額を払うことになっていて途中から規約改正をしますが、とても足りないということでカンパの目標を4億円にして、それ以上に集まります。現地の対策本部は田中秀和さん（元兵庫県連会長）と甲南土建が宿舎を独自に建ててくれました。三宮の駅前でビルが倒壊していて大変な時に行きました。

印象的なことは、お金の問題と、組合員に限らず一般の人を含めた現地の人が非常に親切だったことです。私が三宮から初めて阪神電鉄に乗り換えてい

くの歩いていかなければなりませんでしたが、ちゃんと案内してくれました。東日本大震災の時もそうですが、人間は助け合わなければなりません。あの時に、全建総連の良さは助け合いで、労働組合の原点だとよくわかりました。4億円というお金はそう簡単には出ませんが、みなさんのご協力で出ました。よく集まってくれたと思います。物資では、ブルーシート、簡易コンロ、ボンベなどの支援がしっかりと行われました。

その一方で、幸いなことに、1997（平成9）年12月に全建総連の組織人員が75万人を突破し最高現勢を記録します。これを超えることはなかなか難しいのではないかと思います、超えてもらいたい気持ちがあります。

中建国保8割給付について

佐藤 中建の給付率8割についてですが、1998（平成10）年10月に第39回新潟大会があつて、その前から3団体声明など、いろいろな文書が出ています。

古市 給付率の問題は7月の中建理事会で初めて出てきた話で、全建総連会館へ千葉土建の皆さんが来たわけですね。加藤委員長から、「組合の人が来てい

るのだからちゃんと会って話を聞きなさい」という指示が出ていて話を聞いていましたが、そこからずっと始まっているわけですね。

佐藤 最初は中建国保の給付割合をどうするかということが議論の中心でした。あの時は組合会にも出ていて、それを受けて中執があるのです。私の記憶では、提案部分も含めて討論に4時間かかったんです。

古市 反対する人たちの認識は違っていて、全建総連が仕事放棄したなどと言っていました。そんなことは一つもなく、その前の部会でも国保給付率を含めた問題を討議する委員会の設置を提案したんです。そうすると、委員会をつくってもいいが給付率の問題については議論しない前提で認めていいというのに四役専門部長会議でなりました。給付率の問題を議論しない委員会をつくっても価値がないです。結局四専で了承が出なかったので部会で合意が得られず、できませんでした。

佐藤 実態を言うとは3団体声明のほかにも、抗議の文書が私のところに来ました。それから無言電話も夜中にかかってきたりしました。千葉土建の人たちを中心に全建総連会館に来て、私と徳永さん（元全建総連書記次長）、古市さんが対応をしたわけです。

彼らは本心で10割給付が大事だと言っていました。私もそう思いますが、情勢はそうではないということです。私が中央執行委員会で言った言葉は、このまま放っておけば日雇健保の二の舞になるということです。現に当局がそう言ったのです。

そして、中執でもう一つ覚えているのは、「組合員を槍袈（やりぶすま）にさらすようなことをするのが全建総連指導部のやるべきことなのか」と答弁したこと。その時、「玉砕するのであればよいですが、そうはいきません」ということです。3団体声明では、佐藤書記長の指導力は全くないなどと書かれています。そんな文書が全国に送られたのです。

このことで感じたことを言うと、組合員が真剣にそういうことを言うてくることについては、否定もしませんし、懇切丁寧に会っていました。それが全建総連書記長なり、専従役員としての役割だと思います。しかし、中執の討論は、その時の情勢を正確につかむのが問題で、闇雲に突っ込んでいって10割給付で国保組合の補助金である特調、特別助成を廃止されていいわけがありません。古市さんは覚えていますか。国保課長をやりその後局長となった某氏が、「このままいったら擬制適用廃止の二の舞ですよ」と言ったのです。

古市 年金局長をやっているときに会いに行きましたね。局長室で会いました。向こうから来てくれと言われて行ったんです。

佐藤 そうです。「もういい加減にしないと擬制適用廃止の二の舞だよ」、つまり、「全建総連つぶれるよ」という意味合いのことです。別にそれに脅かされたわけではないですが、本気で全建総連を権力が恐れていたということ、朝日新聞などいろいろな新聞を使って、10割給付を徹底的にたたいていましたね。

古市 そうでしたね。

佐藤 あのマスコミの宣伝には、ともに反論したと思いますが、あの時、私は大会での分裂も覚悟していました。あそこで分裂していたら今の全建総連はありません。その後、翌年（1999年）の5月に、矢部さん（元全建総連副委員長）の謝罪声明が出ます。

古市 あの当時、給付率を下げないと次の予算どころではないという情勢でした。全建総連の方針としては、10割給付の道を守るのはもちろんですが、各国保組合が独自にやるということは拘束できないということです。

佐藤さんの全建総連書記長時代の運動の一番の課

13）年に私はIFBWWの世界大会の場で挨拶をしています。IFBWW・JAC（日本協議会）に全建総連はオプザーバー加盟していました。それまでに中執に何度も加盟の提案をしましたが、賛成されませんでした。主要な反対論としては、IFBWWは国際自由労連だったんです。これは「労使協調の組合だ」と反対されました。世界労連でなくては駄目だと。世界労連のことを調べてみると、ソビエト連邦の崩壊と同時に世界労連も崩壊していました。私は、国際連帯はどうしても必要だと思っていて、グローバルと言っている時代、世界が大きく変動している時代だったじゃないですか。日本で中立を保つのは構いませんが、世界の中で情報を得ていく立場にいないといけません。ところが全建総連ではなかなか受け入れられませんでした。BWIに加盟したのはいつでしたか。

古市 私が退職した翌年（2013年）です。

佐藤 やはり時代の流れだと思いました。やっとわかってくれたんだと。世界に冠たるIFBWWです。特にドイツ建設労組（IGBAU・イーゲーバウ）は世界大会で聞いていましたが、やはり言うことが違います。あの当時、数は向こうのほうが小さく、50万人くらいの組織でしたが、ちゃんと労働者の権

題というのは、やはり10割給付問題でしょうか。

佐藤 組合に入ってからのことと言うと、擬制適用廃止の問題と、8割給付問題です。全建総連書記長という立場で言うと、あれだけ抵抗されるとは思いませんでしたし、抵抗して当たり前だとは思いますが、全建総連が存在するかどうかっていう瀬戸際のことでした。

古市 東建国保と中建が10割を撤退して、東京土建国保は2年遅れて給付率を変更しました。（給付率を見直さない）東京都が都費の補助金をゼロにすると行ってきたそうです。そうになると保険料を1万円ほど上げなければいけないという大きな事態に直面することになります。

佐藤 そして、8割給付問題の決着はつくのですが、その後に規約改正をやりました。5分の4条項のことです。この5分の4条項というのは、8割給付の話が発端でつくられます。

IFBWW（BWIの前身）について

佐藤 IFBWW（国際建設・林産労組連盟。BWIの前身）についてですが、先程ヨーロッパに行った話をしました。その時に労働者移動の権利の問題や労働協約が必要という話です。2001（平成

13）年を守っていました。私が初めてヨーロッパに行ったときに「ドイツは労働者の天国だ」という言葉がありました。職場ごとに交渉委員会があって、色々な労働条件を決めることができるようになっていきます。ドイツ労働総同盟というのはかなり力があって、ドイツの社会民主党も今は落ち目ですが、世界全体が社民主義ではなくなっています。政権に影響力があるということが、どれほど影響力があるかとよく分かりました。そんなことからIFBWWの世界大会で演説したことだけでなく、色々な批判もありましたが、JACの幹事会が2ヵ月か3ヵ月に一度あって、無理してでも行こうと、自分の責任でやろうと続けてきたことがBWIの加盟に続きます。

公契約法（条例）について

佐藤 公契約に話を移します。公契約法の出始めのころ、伊藤恵一郎さんが賃金対策部長をやっていた時のことです。デイヴィス・ベーコン法とかそういうものの翻訳物のページを冊子で出していました。それで、今でも「公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律（入契法）」という法律があると思いますが、私は中央建設業審議会の委員をして

いたので、この時、衆参とも傍聴していて、委員会でも野党議員が発言していました。

参議院へ法律が回ってから、「建設労働者の賃金、労働条件の確保が適正に行われるように努めること」という附帯決議が付きます。その後、野田市で公契約条例ができますが、各県で陳情を出す時に入契法の附帯決議の中に私が言った言葉があり、適正な賃金、労働条件を確保しなければならないと書かれており引用されています。これが一つの役割を果たしたのではないかと思います。条例の制定については、それぞれの組合の努力があつてのことだと思いますが、この附帯決議がある意味では役に立ったのではないかと思います。私は、公契約法について本当は法律にしなければならないと思っています。公契約法については、古川景一さん（元全建総連顧問弁護士）の冊子がよくできていると思います。

全建総連運動とは

佐藤 全建総連運動というのは一体何かという時に、私が全建総連に行つて思ったことは、「全国に組織がある」ということです。簡単に考えがちですが、これはすごいことです。連合組織とはいえ、全国に組織を持ち、全国単産としてそれなりに機能を果た

全建総連の発展に向けて

佐藤 基本的には政党支持の自由を守る。組合の自主性を守る。そして決めたことも守る。

建設従事者は減っていますが、最高現勢75万人回復を目指してください。IFBWのところでは言い忘れましたが、世界的に見ても労働組合の出発点は一人親方とか職人の組合です。それが企業に吸収されたり、下請に入りながら労働協約を作っていくままです。ですので、全建総連は特殊な組合では決まらず、いずれ労働協約を大企業なり、それぞれの地域で結べるような組織に発展します。少し見ていると、建設産業全体の投資が減り、増えている部分もあるかもしれませんが、なかなか労働条件が改善されないで厳しい状況に置かれて、組織も最高現勢まではなかなかいきません。今は62万人弱ですね。私が書記長をしたときに伸びたのは、情勢も良かったことでもあります。高度成長ということもあり、「ほれ建てる、ほれつくれ」という時代です。しかし、建築というのは土地と離れては存在しません。この日本という狭い国土の中に人が住まう、超高齢化を迎えて空き家率も高くなつてきていて、この問題をどうやって解決していくのかというのを、全建総連もしっかり考えていかないといけないと思います。

している。いろいろと批判はありますが、いろいろな方針を貫いてきて、国保、労災、税金、その他運動をやってきましたが、組織がなければできませんでした。やはり、全国に組織をもって団結してきたということ、色々な経過もありましたし、悔しい思いもたくさんありましたが、そのことが全建総連運動の中で身に染みたことです。全国に組織があり、それぞれが組織活動を行い、全建総連の決定事項について曲がりなりにも実践をしている。統一行動には参加する、決起集会にも参加するという、全建総連は頼もしい組織だと今でも思っています。

それから中央の専従役員として、予算要求のロビー活動や法案ができるたびに、国会議員に対するロビー活動を盛んにやりました。国交省、厚労省、林野庁にも行きましたが、役所に行くことによって情報を得るという役割。

また、嬉しいことは、全国を回って、一番長く話をしたのは、宮崎に行つて学習会で7時間話したことがあります。それから、四国のある組合は私が話したことを記録に残して冊子にして、組合員に言い伝えているというふうに言つて下さったことがあります。それは嬉しかったです。

古市 全建総連・新築瑕疵担保責任保険団体制度

（ゆうゆう住宅仕様）では、自社検査ができるようになって、年間500棟が目標ですが、足りていないのでみんなで頑張つて取り組もうと機関紙「全建総連」に書いてありました。

佐藤 今、日本で家が建っているのが、そんなに少ないはずはありません。結局大手がみんな取つていくのです。そういう時代の趨勢、宣伝力、積水とかいろいろなところがどんな家を建てています。それはそれでやむを得ないので、それに対してしっかりとした労働運動をやっていく必要があります。ドイツの労働組合を見ていて思ったのは、そういうところでは、そういうところと企業交渉ができる点です。大体申し上げたかなと思います。機関紙などもよく見てもらつて、立派な年史をつくってもらいたいと思います。

以上

組織を割らずに団結が一番

千葉 景四郎さん（元全建総連教宣部長）

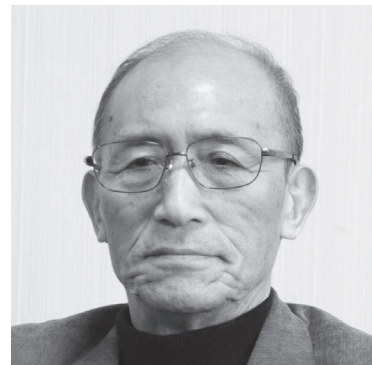
聞き手・清水謙一さん（全建総連書記次長・当時）

山下正人さん（全建総連教宣部長・当時）

2017年2月17日取材

土建総連から始まった建設労働運動の世界

千葉 1959（昭和34）年のことです。土建総連（全国土建労働組合総連合、全建総連の前身組織の一つ）の書記局員として、建設労働組合の世界に飛び込みました。入局のキッカケは、中央大学に在学中、私と同じ大学に通う中島君という人がいて、そ



千葉景四郎さん

全建総連の前身組織の一つである土建総連（全国土建労働組合総連合）に1959（昭和34）年に入局、書記長だった唐沢平治さん（全建総連初代書記長）とともに当時から建設労働運動に尽力。全建総連の教宣部長を9期（1988～1996年）務められる
2024年2月13日、ご逝去

仲が良く統一の機運も高まり全建総連結成へ

千葉 土建総連の事務所は、港区芝白金三光町にある東京土建事務所の一角を間借りしていました。書記局は唐沢書記長を筆頭に5人しかいなかったのですが、唐沢さんが一番地方に行きました。組織担当の鈴木弘さんが未組織の県へ行き、核になる人を見つけたのです。鈴木さんは岐阜、山口、熊本をつくりました。土建総連時代の活動家探しは、共産党の関係で見つけました。

私は最初から教宣担当でした（青年部と掛け持ちで）。亡くなった鈴木さんが組織担当でした。背が小さく、福島県出身でした。今の全建総連会館の応接室にある「鈴木文庫」は、鈴木さんが亡くなった後に、お兄さんが寄贈してくれたものです。今の話は私しか知りません。全建総連の結成について知っているのは、世の中に私しかいません。1960（昭和35）年に組合にいた人はみんな亡くなってしまったでしょう。

土建総連の唐沢さんと全建労の加藤忠由さん（第8代全建総連委員長）、両組織はある意味で敵対関係でしたが、全建総連結成で一緒になって良かったんです。結成前は別々にオルグ活動をするわけですが、この2人がオルグ先で鉢合わせすることもありまし

の人が私を活動家にしました。そのせいで入らなくてもよい共産党に入れられました。上田君、千葉（私）、中島君と3人の活動家というか、左翼が中央大学にいました。上田君は杉並の西部建設（現在は東京都連・建設ユニオンに合流）に入りました。その関係で中島君を引っ張り、中島君は私を引っ張るわけです。中島君は土建総連だったので、私を引っ張ったわけです。

入局する前は、学生の頃からずっとやっていた日中友好協会で仕事していました。ただ、安月給で生活ができません。そんな時代に、中島君が土建総連の方が良いよ、と言ってくるわけです。あの頃で月給6000円くらいもらっていましたが、土建総連に来ると1万3000円になります。それはとても魅力的でした。

その土建総連は、名前が「土建」です。何となく怖いでしょう。学生運動とは世界が違います。大工や職人ではなく、土方（土木工事に従事する労働者）だと思い、「いやーしまったな」と思ったものですが、来てみれば何のことはありませんでした。唐沢さん（唐沢平治氏。土建総連書記長、全建総連の副委員長、初代書記長などを歴任）も中央大学で、みんなそういう人ばかりでした。

だから。全建総連結成時は、土建総連は5万8000人、全建労は1万2000人、東建産は3080人で、仲が良く統一しようという機運が高かったんです。

あの頃の組織拡大は、日雇健康保険が結成以前の1953（昭和28）年にでき、一人親方は労使関係がないため入れないところを、厚生省が労働省に頭の良い人がいて「法律上はできないが、擬制適用ならば良い」となりました。そのため、組合を使用者とみなして労使関係ができたようにして、日雇健康保険が適用された背景があります。そうして、色々な地域に行って、日雇健康保険というものがあるので組合を作りなさいよ、とオルグして組合を結成させ組織を増やしていったのです。ちなみに、全建総連結成したの頃は、それほど増えませんでした。清水 全建総連の結成大会のことを聞かせていただけますか。

千葉 1960（昭和35）年の中野公会堂で行われた全建総連結成大会を知っているのは、今となっては私しかいないでしょう。前日に、東京駅の前にあった国労会館で土建総連の解散大会を行っています。中野公会堂では関東鳶職（関東鳶職連合会・関東鳶）が木遣りをやったりして賑やかでした。11月24日に結成大会が開かれました。この日に開催した理

由は分かりませんが、きっと、唐沢さん、加藤さん、坂本さん（坂本貞雄氏。第6代全建総連委員長、中建国保初代理事長、東建産書記長、元三鷹市長）で決めたのだと思います。なお、坂本さんの自宅が東建産の事務所でした。全建総連結成時の書記局には、土建総連から4人、全建労から2人来ました。

日雇健康保険を前面に出し組織拡大進める

清水 1960年代の前半から中頃は、今の県連・組合の結成大会などが相次ぎました。

千葉 全建総連結成以後は中島君が未組織へオルグをし、唐沢さんや私も行きました。

山下 機関紙を見ると、どこどこが加入したと続々と報道が出ています。

千葉 思い起こすと、岐阜県の飛騨に白鳥という町があり、太子講由来の大工組合を訪ねていった記憶があります。そういう隅々まで行っただな、と思います。片方では、東京土建のような新しい理念の基につくっていった組合もあれば、大多数は太子講のような同業者組合です。

日雇健保が使えるから入ってくるわけです。入ってくると変わるわけです。全建総連本部の指導方針が明確なので、最初は気分が合わなくても、慣れて

うでないとあります。一般社団法人のところもあります。

千葉 今は意図的に労働を外してたりすると思います。例えば土建組合など。これらの組合が抜けないで加盟しているのだから、この組合は本当にえらいです。幅広くて良いです。

埼玉では、今は建設埼玉ですが、昔は大工組合があつて埼玉県連でした。それが埼玉土建ができて、連合会ではなかなか対抗できなくなっていたのです。そこで唐沢さんが埼玉県連に乗り込み「連合体では埼玉土建にやられるので、一つになれ」というわけです。

清水 唐沢さんという人は、どういう人だったのでしょね。

千葉 彼はそういうことをやります。そういうことを一番知っているのは私です。唐沢さんは、その場で使い分けますよね。埼玉土建がくるので、まとめるために埼玉県連を単組化するわけです。

山口では当初、国鉄労働組合の関係で下関に大工組合がありました。全建総連も土建総連時代から国鉄労働組合の建築協議会と関係がありましたので、まず、下関大工組合が全建総連に入りました。この決起大会には私が行きました。書記長になったばか

くると合います。そうすると、太子講や大工組合から建設に名前を変えていきます。少しずつ変化して、全体が徐々に慣れ親しんでいくわけです。

清水 今でも労働組合を名乗っているところと、そ



全建総連の結成時から本部書記局で活動されていた千葉さんに当時の思い出深い運動や組織、人物などについて語っていただく（左は清水元書記次長）

りの当時の田村さん（田村豪勇氏。第12代全建総連委員長）が立派な挨拶をしていたのです。山口にもこれほどすごい活動家がいるのか、と嬉しく思いました。やはり田村さんが県本部から中執になり、最後は全建総連で委員長をやりました。大工さんで頭の切れる男でした。

清水 今では山口であれば新幹線で行ったりできますが。

千葉 昔は寝台車には乗れなかったのです。寝台車に乗れるようになったのはだいぶ後の話でした。夜行列車でも寝台車は価格が高く、乗れませんでした。私が地方に行くのに寝台を使えるようになったのは、だいぶ後でした。

あと、私は青森出身ということで、青森まで13時間もかけて頻繁に行かされました。あの頃の切符は、とりわけ、指定券の購入は大変でしたが、国労となりがあつたので、頼むと取ってくれました。

清水 当時の国鉄は駅舎から何まで自前で作っていたんですね。

千葉 だから大工さんがいたわけです。その建築協議会を中につけていました。

清水 以前、福岡建労で委員長をしていた佐藤儀明さんは国鉄で大工を習って、独立したそうです。

千葉 彼は直方の人でした。話していると段々思い出してきますね。また、兵庫の前田さん（前田幸太郎氏。第9代全建総連委員長、兵庫県連元会長）は三池炭鉱にいました。生意気な男で私とは性格が合わず、頻繁にケンカしていました。

ところで、日雇健保では傷病手当を出したり、保険料もずっと安かったです。日雇健保の証紙を巡っては、社会保険事務所に貼った手帳を持参するとハシロを押してもらいますが、向こう側は面倒臭いのか、組合にハシロを渡して勝手にやれと言うわけです。昔は呑気なものでした。

初の全国的な賃金引き上げ中央総決起大会

清水 1960（昭和35）年に全建総連が結成されました。私の1960年代のイメージだと、協定賃金運動、日雇健保の改善運動で大規模集会などもやっていたかと思っています。

千葉 全建総連結成から翌年の1961（昭和36）年8月10日、初めて日比谷で協定賃金引き上げと日雇健保改善の2つの柱で大決起大会を行いました。当時、賃金対策部長が名古屋土建で書記長をやっていた鈴木正明さんという方で、熱心な人でした。唐沢さんとも意気投合していました。それまで協定賃

金はないから」と言われたものです。

私は矢部君のために随分と無理をしました。ヘルシンキ（青年学生平和友好祭）への代表派遣でも、関西を敵に回して実行しました。「千葉が強引に矢部に（ポストを）持って行った」と言われ、実際に矢部君が行きました。本当は関西に譲るべきでした。そして私は、中央委員会が何かでつるし上げられ、青年部担当をクビになるわけです。昔は中央執行委員会の他に、中央委員会があり、そこで青年部は良くないなどの発言が出て、唐沢さんからクビを宣告されました。

機関紙は組合運動の先を照らす灯台

千葉 1960年に全建総連が結成して、日雇健保を使えるからとオルグをして組織を増やしましたが、日雇健保擬制適用廃止の影響で組織が3割ほど減りました。私は、いつまでここで仕事ができるのかという強い危機感を持っていました。県ごと抜けるのではなく、組合員が減っていく、一時はかなり意気消沈していました。その中で力を果たしたのは、機関紙でした。

私よりも当時、東京土建の機関紙「けんせつ」の田川実教宣部長が、「組合は仲間の灯台」だと言

金は各県バラバラでしたが、全国的に一斉にやってみてはどうかと、東京へ全国から集まってやろうじゃないかという意味合いとして、野外音楽堂で総決起大会をやるわけです。これは、初めての全国的な賃金統一闘争になりました。ちなみに、土建総連や全建労でも賃金引き上げ運動をまとめてやろうということではなく、協定賃金と言えば各地域で協定するだけでした。

当時、東京土建青年部の矢部君（矢部正氏。東京土建委員長、全建総連副委員長、全国青協議長などを歴任）が電柱にステッカーを貼り、捕まったりしていました。なぜステッカー貼りをしたかというと、当時、国鉄労働組合闘争が激しくて、駅舎でステッカーを貼るわけです。それを見て、やろうじゃないかと始めたわけです。それで張り出して、全建総連の私たちもそれは良いねとなって、やるわけです。

また、私も若かったので、協定賃金を払わない親方に対して交渉に行こうと方針を決めたわけです。そうすると矛盾が起きるわけです。青年部が親方のところへ行って「協定賃金払え」「賃金払え」というわけです。それがひんしゅくを買いました。その点、矢部君は関係なくて私は書記なので怒られるわけです。「矢部と千葉はつるんで何をやるか分から

ました。高く掲げて明かりを灯して先を見る役割は、機関紙が担うということです。そのためにも、機関紙が元氣を出そうということです。私も同じ教宣だったので、一緒に頑張りました。

1963（昭和38）年、初めて教宣の会議を行いました。その頃はまだ機関紙をつくっているのは半分もありませんでした。新しくできた組合は発行していましたが、古い組合は、昔の大工組合だったこともあり、機関紙の「き」の字も知りませんでした。しかし、会議を行うと組合機関紙をつくっていないような人も参加します。

今でも思い出すのは、西で開催した時に鳥取県連の津村組合長（津村正義氏。元全建総連副委員長）がいて、彼も教宣学校に来て、一念発起し鳥取も機関紙を発行しようと、「匠」という機関紙を組合長自らがつくりました。彼は色々な肩書の多い人で、倉吉の名士でした。東京に来るときは、夜行列車の寝台車で来ますが、そこで原稿を書いていたそうです。ひと月も休まずにずっと続けるわけです。

東では青森県の浅虫温泉で行いました。青森県連も組合長が機関紙を作らなければ、という思いで作ってくれました。

組織活動と教宣活動は車の両輪

千葉 その当時から、機関紙「全建総連」は月3回発行です。

清水 機関紙を発行できていない組織が多くあったので、そうした組合のためにも中央機関紙を発行していたわけですね。

千葉 しかも、昔は機関紙を売って、組合費が安かった分稼いでいました。月3回発行の理由は、低料第3種郵便を取るためでした。発行の内訳は、10日付は青年部の機関紙で、1日と16日付は全建総連の機関紙で、実質的には月2回でした。私にも力がありませんでしたので、2回のうち1回は各専門部の特集みたいなものを作っていました。賃金なら賃金、社会保障なら社会保障で。その当時は通信員制度もなく、それほど記事も上がってきませんでした。**山下** 全建総連からの運動の発信という性格が強かったと思います。

千葉 この組合は工場や会社と違い、「オイ、こっち向け」と言って向いてくれるわけではないので、当時の組合の方針を伝えるのは機関紙しかないです。ただ、なかなか配付が大変でした。配ってくれる組合の一方で、たまにオルグに行くと、配らないで組合事務所に置いてあるのを見ました。苦勞して作っ

ているだけに落胆しました。組合の機関紙を皆さんに配るというのは、下部組織がしっかりしていないとできません。だから、組織活動と教宣活動は車の両輪だという話になります。

余談ですが、機関紙の購読料での稼ぎは教宣部の部費に直接充てられません。だから私は「機関紙で稼いだお金だから、取材をもっと自由にできるように教宣部で勝手に使わせろ」とケンカをしましたけども、負けました。

また、教宣部一人体制が長いこと続き、途中で古市さん（古市良洋氏。元全建総連書記長）が入り、一緒に10数年やりました。だから、古市さんは今でも私に対して、あちこち取材に行かされた話をします。古市さんとは一番長くやりましたから、本人もやはり思い出が濃いそうです。金田さん（元全建総連主任書記）とも何年か一緒にやりました。

あと、教宣活動で海外へも取材に行きました。初めて行ったのは40歳。唐沢さんが行ってきたというもので、青年平和友好祭のためにソ連に行きました。それから、機関紙協会関係の取材で色々な国に行きました。今では考えられません。

手巻きの映写機使ってオルグ、組織拡大の武器に

清水 1973（昭和48）年あたりには、建設労働組合活動の手引きで「組合」というのを出したと見ました。私も見たことがあるのですが。

千葉 ありました。組合の旗がひらめいていて、私がつくりました。中には職人の歴史があり、佐野瓢人さんが表紙を書いて、横浜の民間の学者の斉藤秀夫さんが職人の歴史の前史を書いてくれました。その後こういう事業をやっていると紹介しています。

清水 それまでも方針徹底をする会議をやっていたと思いますが、全国的な意味で組合活動に対する教育としては、初めてのものだと思います。これが1973（昭和48）年8月1日に発行されているそうです。この辺りから税金のテキストなどが始まるという気がします。

山下 あとは、オートスライド（テープレコーダーとスライド写真を組み合わせた映写機）で随分とやっていたかと思っています。

千葉 オートではなく、手巻きです。それも全建総連ではなく東京土建です。3万円から5万円という幻灯（げんとう。スライド）をつくるわけです。東京土建が行うと「すぐにお前もやれ」と指示がある

わけで、私も東京土建に負けちゃいけないと思ってやるわけです。

まず、シナリオから書かなければいけません。シナリオを書くのに、箱根に泊まり込みで執筆しました。しかし、お酒を飲み過ぎて全然原稿が進みませんでした。今でも思いますが、東京土建があんなもの作らなければ私もやらなくて済んだのに、触発されてやるんです。二日酔いで頭も痛いですが、モノにしないといけないので一生懸命書いて持ち帰りました。それで唐沢さんに見せて、写真撮りして幻灯をつくりました。それが全国に広まります。本格的な組織拡大の武器になったと思います。

私はスライドを全部で2本作ったと思います。「躍進全建総連」という題と、その後に日雇健康保険の何かを作った気がします。

余談ですが、幻灯なのでナレーションがいります。素人にはなかなかできません。たまたま私の妻が劇団民藝に知り合いがいて、宇野重吉さん（俳優）に頼んでくれました。テープレコーダーとシナリオを持って宇野さんのところに行きました。本当は1、2時間で終わると思っていたわけですが、宇野さんから「おい君、これは誰に聞かせるんだ」と言われて「職人さんです」と答えると、「ダメだよ。こん

な難しい言葉を使つて通らない。書き直せ」と言われて、全面的に書き直しました。あの偉い宇野重吉が、結局半日付き合ってくれました。それで幻灯のナレーションを吹き込んで作りました。

向こうはプロで、私はまだ学生の流れでやっていて、労働組合用語を使っていたので、「誰に聞かせるんだ」と言われるわけです。その一言で、独りよがりではいけないということで、もっと機関紙や文章を易しく書かなければいけないと思い、勉強しました。

神田川の氾濫で会館が水浸しに

千葉 高田馬場にある今の全建総連会館は昔、集中豪雨による神田川の氾濫で浸水を二度経験しました。一度目（会館完成の翌年にあたる1978年4月）は、皆さんからのお見舞いで色々持ってきてくれましたが、二度目にはありませんでした。一度目は後片付けして、川沿いのうなぎ屋で特上を食べました。今思うと、あの日は朝からずっと雨が降る中、中央執行委員会（中執）を会館で行い、14時頃に会議は終わりました。中執の終了後はすることがなく、矢田忠昭さん（元全建総連書記長）と2人で隣の店に飲みに行きました。16時頃から飲んでいると、どん

どん雨が降ってきて、そろそろ帰らなきゃという時に、水浸しでドアが開きませんでした。サイレンは鳴りませんでした。

それで、開かないと帰れないという話をしていたが、矢田さんと飯田さん（飯田勝彦氏。元全建総連総務部長・教宣部長、元土建産業書記長）とで2階へ行き、また飲みました。さすがに雨が止んで、扉が開くと1階が水浸しになっていました。皆さんからひんしゆくを買いましたが。

二度目の方が被害は大きかったです。下階の金庫が動くほどでした。金庫が動いたものですから、書記が潰されるんじゃないかと言っていた記憶があります。教宣部はと言えば、カメラが使い物にならず、駄目になりました。おかげで、良いカメラに買い替えましたが。

唐沢平治さんは一番嫌いで一番好きな男

千葉 唐沢さんは優秀な人でした。アイディアは良いですし、活動家です。運動をどんどんつくっていきます。住宅デー、協定賃金の決起大会、日雇健保の反対デモで厚生省に行つて座り込みでも何でもやってケンカします。何かあれば唐沢さんでした。

ただ、敵がいなくなると「唐沢天皇」と呼ばれ、

威張つて偉くなっちゃって隙が生まれました。そして皆さんから「唐沢をおろしてしまえ」となったわけです。擁護する人もいましたが、彼を全建総連から追い出す時には、私がその片棒を担いでやりました。全建総連書記長をおりた後の彼は、出身の長野に戻り、北信越地協で地盤を固めて副委員長として戻ってきました。

清水 私は全建総連の中央執行委員になったのは20年前ほどでした。私は東京土建の唐沢さんや全建総連の唐沢さんについてはあまり知らないのです。私

が知っているのは長野の唐沢さんです。
千葉 やはり、東京土建というのは、全建総連の唐沢さんです。全建総連をつくった人ですし。

清水 当時の唐沢さんは、土建総連の書記長をやっていましたよね。

千葉 初めから書記長です。全日土建でも書記長でした。当時、東京土建が一番中心でした。

彼の出自は、中央大学を卒業して兵隊に引っぱり張られます。ただ、足が悪かったので即日帰京し、そのうちに戦争が終わりました。生まれは長野県伊那（いな）市でして、そちらにある建築労働組合の書記になりました。その組合の組合長が内山正人さんという方で、当時その内山さんは全日土建に入って

おり、彼を東京へ連れて行きます。それで、全日土建の大会か何かで内山さんから「議長をやれ」と言われ、とても上手にやりました。それで、伊那に帰るのはもったいないから東京にいらとなり、そのまま全日土建に書記次長として入りました。そのうちに全日土建から土建総連へ移るわけですが、彼は一番のケツ持ち（問題処理のために動く人）だったと思いますし、私にとって一番嫌いで、一番好きな男でした。

1990年代でしたか、唐沢さんが副委員長の頃に一杯飲んでいると「千葉君、これから全建総連を背負って立つのは誰だと思う」と聞かれたことがあります。「西は佐藤正明、東は川野幸徳だろう」と答えた記憶があります。それはその通りになりました。佐藤さんは全建総連書記長、川野君は埼玉土建初代書記長として、埼玉土建を大きくしました。

晩年のことですが、私も彼と仲良くなりまして、私とまんちゃん（三枝満慈郎氏。全建総連の副委員長、書記長、社保対部長などを歴任）と久保田さん（久保田保太郎氏。元東京土建副委員長）の3人を浅間温泉（長野県）に招待してくれ、旧交を温めたこともありました。亡くなる頃には毎日電話が来ていました。全建総連の書記長の後は中央執行委員長を務

めて晩年を過ごすべき人と思いましたが、その書記長をクビになったのですから、人生というのは分からないものです。

三枝さんの著書「まんちゃんのとびうと」について

千葉 三枝さんは、土建総連時代に唐沢さんとうまくやっていたそうで、1963（昭和38）年に足立支部から全建総連へ呼ばれます。退職後に執筆した「まんちゃんのひとりごと」ですが、私的には良いものでした。ただ最初、東京土建は一定部数を引き取るつもりだったそうですが、読んだら悪口を書かれているので、キャンセルしたそうです。これには、三枝さんも困ったのではないのでしょうか。

清水 東京土建の中では公然とした文章とはなっていないのです。ただ役員は専従を中心に読んでいるのですが。

酒で語り合った荒井春男さんの思い出

千葉 荒井さん（荒井春男氏。元住宅対策部長・技術対策部長）は住対部長を長くやっていましたね。

荒井さんは、全建総連結成前に土建総連の役員を務めていましたが、全建総連結成の際は一旦、役員を降りなければならませんでした。そこで、唐沢さん

は荒井さんが可哀そうだから「千葉君、慰めて来いよ」と言い、私にお金をくれて新橋まで行きました。これは全建総連結成の前の晩のことです。彼と2人で飲んだ記憶があります。唐沢さんも気を使ってくれました。

私は、荒井さんとは色々とありました。長崎で原水爆禁止の大会に行った時だと思います。私たちだけ同じホテルに泊まり、2人で港近くの飲み屋さんへ行きましたが、共産党を巡る話で大喧嘩になりました。夜中の2時までやって、いい加減嫌われました。

全建総連30年史づくりに取り組む

千葉 1994（平成6）年には、全建総連30年史が発行されました。私は前書きとあとがきを書き、相羽君（相羽宏紀氏。連合通信社の記者）にほとんど下請させました。製作期間は半年くらいかかったのではないかと思います。相羽君は大変だったでしょう。ほとんど機関紙から取ってきています。彼は頭が良い人です。私は30年史で書いたように、誰でも読みやすいように、読み物風にする方針としました。

定期大会での退任挨拶で

千葉 1997（平成9）年の第38回大会で、議長に5分だけ挨拶の時間が欲しいとお願いしました。強引に大会運営委員会に頼み、しゃべらせてもらいました。

私は、37年間の全建総連の運動から5つのこと「①組織拡大の大切さ、②要求実現のための大衆行動、③組合民主主義、④特定政党支持を押しつけない、⑤仲間の団結を大切にすること」を学んだと、生意気なことを言いました。そんなことする人は私しかいません。それくらいわがままを聞かせてもらいました。

全建総連の良さは、基本的に意見が違っててもケンカをしない、徹底的なケンカをしないということです。敵は可能な限り作らないでいくという暗黙の了解、基本的には団結が一番で、組合を割ってはいけないというのが、皆さんの間に確固とした信念としてありました。だからこの組織がもったのです。ただ、国保の10割給付見直しの時は賛成と反対で割れましたね。全建総連の将来を左右するものとして、日雇健保擬制適用廃止以来の危機的問題だったと、言えるのではないのでしょうか。

以上

【役員OBインタビュー特集⑩】

常に目線を組合員にあてる

徳本 茂さん（元全建総連住宅対策部長）

聞き手・清水謙一さん（全建総連書記次長・当時）

大江拓実さん（元全建総連書記次長）

2017年8月10日取材

京都建労が地域に根ざした組合を目指す時期に書記局へ

徳本 私は、6人兄弟の末っ子の三男として生まれ、3歳の時に父親が亡くなり、その後、極貧の母子家庭で育ちました。子ども心ながら、貧富の差に社会に対して疑問と憤りを強く持ち、それが活動の原点



徳本 茂さん

京都建労に1972（昭和47）年に入局し書記次長、書記長、また京都建築国保組合で常務理事、専務理事を歴任される。全建総連では、会計監査1期、中央執行委員11期、2008～2011年（第48～51期）に専従中央執行委員（住宅対策部長）を務められる

となっています。

私が京都建労に入局するまでは、本部が各支部に書記を派遣し、時間が来たら戻ってくるという形式でした。24歳で京都建労へ入局した1972（昭和47）年は、組織前進を図っていいこうとしている時で、各支部事務所を拠点として築き、書記局を一人置くようにしていました。また、書記局の複数体制をつくろうとしており、右京支部と洛南支部では組合員も多く、もっと早い段階から書記局の複数体制をとっていました。1970年代には、そういう体制を敷いて、地域に根ざした組合を築いていこうとスタートした時期でした。

京都建労に入る前は、民青（日本民主青年同盟）の専従者でした。組合に入る契機は、京都建労が書記局複数体制を行うので知人より書記局になってはどうかという話が来ました。組合の目的や活動内容、書記局の職務等の説明を受ける中で、未経験の仕事をすることも面白いかと興味津々で入局しました。意外にも賃金は低く、遅配や欠配はありませんでしたが、世間一般の平均賃金の半分程度の水準でした。

支部時代に日雇健保擬制適用廃止の名残で苦労

徳本 京都建労本部の以前に11年間、南支部にいま

本部でアスベスト対策に本格的に乗り出す

徳本 1983（昭和58）年に京都建労本部に来て、労働対策部に入りました。京都建労では元々、労災職業病問題に対する位置づけを非常に高く持っており、腰痛や振動障害、有機溶剤、業務災害もありますが、職業性疾患に対する取り組みは1970年代の初期から取り組んできました。全員問診や検診、じん肺もやっていました。そうした中、1984（昭和59）年の大会で、アスベストの危険性について代議員から発言がありました。

このアスベストという毒性のある物質については、山科支部の代議員が大会で発言したことから始まります。アメリカの留学生のリチャードマイケル君が「こんな粉塵（ふんじん）の現場にいられない」と職場放棄をしましたが、当時はそうした行動は一般的には考えられないことでした。その際に舞っていた粉塵が実はアスベストだったというものです。現場にいた組合員が、アスベストはそんなに恐ろしいものかと調べ出して、大会で発言したわけです。

それを受けて、京都建労本部は放置できない重要な問題として、大会の翌年に調査活動を行うとともに、「京建労アスベスト対策委員会」をつくり、現場調査やサンプル調査、学習会を繰り返し、アスベ

した。組合員は最初170人でスタートし、当時書記局は2人体制の中、拡大に本格的に取り組みしました。清水 その当時の拡大のありようはどうでしたか。170人というと全員の顔が分かりますよね。徳本 私が本部へ移る1982（昭和57）年は370人でしたが、それでも全員の顔と名前が一致しました。京都全体で1万人組織を目標にして取り組んでおり、その年、1万人を超えました。南支部の時代で一番苦労したのは、1970（昭和45）年の日雇健保擬制適用廃止の名残が強くあったことです。建設国保に移行して、こんなに高い保険料は払えないという議論を、なかなか脱することができませんでした。当時の舞鶴支部では、バス3台に乗りして東京での擬制適用廃止撤回の集会に行ったと聞きました。そんなことは今ではできません。当時のエネルギーの強さと、絶対に廃止してはいけないという強い思いがあったのだと思います。大江 国保組合を作った当時は、まだ「弁当とケガは手前もち」という考えが残っていて、またその時代に戻ることを許してはいけないという流れがあったのだと思います。

ストに曝露（ばくろ）されている人の調査をしよう
と読影活動に入りました。

1986（昭和61）年の定期大会でアスベストの
全廃を決議、その模様をNHKが取材・テレビ報道
して、その後の現場調査の模様も全国放映となり、
各分野・地域で大きな反響を巻き起こしました。

名古屋大学・久永（ひさなが）先生の全面援助を
得て実施した建設現場でのアスベスト暴露の実態調
査の結果は、安衛法の規制をはるかに超える驚くべ
き数値を記録し、日本でも初めてのデータとして各
方面に大きな影響を与えました。

大江 その当時、全建総連でもアスベスト対策を始
めて、ビデオやパンフレットを作ったりしたんです
よね。そうした取り組みを受けて、三重建労の佐藤
正明さん（元全建総連書記長）が久永先生にコンタ
クトをとり、対策や読影を開始し、京都建労よりも
早く認定を取りました。

清水 あの頃は何もなかったので、地元にも有力な先
生がいないと労基署も労災認定に動けとは言えない
時代でした。

徳本 京都建労は労働局と交渉し、建材のロットで
積んだところに、「a」マークをつけるようにして
いました。印をつけないとアスベスト建材かどうか

大江 京都は本部が支部書記の賃金を払っていたの
ですか。

徳本 そうです。プール制ではなく本部直轄で、支
部が大きくても小さくても同じ賃金水準で規定に基
づいて支払っていました。もちろん、書記局間の賃
金の差はありませんでした。

清水 あの頃は建設従事者も増えて、組合員も増え
ている時だと思っています。1997（平成9）年の労働
力調査で685万人でした。どこの組合も増えてい
る時代で、全建総連でも75万人の最高現勢の時です。
徳本 そうです。ちょうど上げ潮の時代で、4年連
続で組合費を引き上げました。京都建労も最高現勢
2万563人でした。

命綱守るための保険料引き上げ

徳本 1993（平成5）年からは、京都建築国保
の常務理事として籍を置いていました。京都建築国
保は、それまでに予算の認可庁である京都府から法
定積立金の充足率が非常に低いと指摘され、計画的
に高めていく方向性を示すように言われました。つ
まり、保険料の引き上げをしるということです。医
療費の動向や国の補助金が減らされ、ペナルティ問
題やさまざまな攻撃を受ける中で、4年連続で保険

わからないということが始まりましたが、ロットごと
につけていたので、結局分かりづらいのです。しか
も毒性についても何も書いていませんでした。そこ
で、単品につけるように繰り返し交渉しましたが、
なかなかさせることはできませんでした。

清水 裁判の判決でいうと、周知義務ができていな
いということになるわけですね。「a」と書いて
あっても何かわかりません。しかも、梱包に一つ
貼ってあるだけです。「a」マークの表示がアスベ
スト対策への前身だと国は言うわけですが、それ
はダメだと我々は返します。

書記局の賃金改善のため組合費値上げ

徳本 書記局の賃金水準が低かったため、1993
（平成5）年の定期大会の時に、思い切って組合費
500円の値上げを提案しました。この時は加藤忠
由さん（元全建総連委員長）が来賓として来られた
時で、「大会討論の雰囲気では絶対否決される」と
言っていました。その通りの結果となりました。
その翌年の大会で、組合費値上げに再挑戦しました。
1年間議論し、このままの書記局体制でいいのか、せ
めて世間一般水準に賃金を引き上げる必要があるの
ではないかと議論を重ねて、引き上げとなりました。

料を引き上げることになりました。私は、「値上げ
の徳本」だと言われました。

その一方で、組合では財政担当もやっていたので、
組合費の引き上げもありました。両方とも値上げば
かり行い、合意と納得をどうやって作っていくかと
いう点で大変な思いをしました。しかし、命綱とし
ての国保を守っていかなければならないという点で
は組合員と一致しているので、渋々引き上げに同意
されました。順風にはなく、組合会でも3分の2
条項があったのでギリギリで賛成するということ
でした。

京都建築国保組合は表具組合と共につくる

大江 京都の特徴として、国保組合を京都表具協同
組合と一緒につくっていることですが、こうなった
経緯を教えてください。

徳本 擬制適用廃止後に国保組合設立の過程で同業
組合に申し入れをし、表具組合と鳶組合が話に乗っ
てきました。

ところが、鳶組合は攻撃を受けて途中で駄目にな
りました。表具組合は自分たちの保険をつくるのは
大事という思いから、攻撃をはねのけて一緒にやる
ことにしました。政治的に言えば、自民党系の人ば



かりでしたが、自分たちの健康を守るためには必要だということで、表具組合の中で固めて一緒にやることになりました。

京都建労は、国保の中でも表具組合に対して特別な扱いをしてきました。非常に大事にし、京都建労の方が大きいから従えというような上からのやり方は一切取りませんでした。ずっと大事にできて、事務費還元金も余分に支払ったり、人件費を京都建労が負担したりしてきました。私がいた頃の表具組合の組織人員は230人でしたが、今では100人位に減っています。伝統産業でコツコツやっていくものですからね。

朝日新聞の国保組合攻撃

清水 1995（平成7）年頃は、朝日新聞の国保組合攻撃があり、徳本さんは国保の専務理事をやられていた頃だと思いますが、その時の様子はどうでしたか。

徳本 ちょうど健保適用除外問題と絡んだ話でした。同じことを京都府も言います。役員を中心に問題意識があるものの、組合員としてはあまり関心がなかったように思いました。

大江 新聞を見て、こういう不正をしている組合で

大体5ヵ月くらい、毎週土日にブルーシートなどを

を支援する救援隊を送りました。その当時、京都建労の支援要請を受け入れたのは阪神土建でした。阪神土建の原田久夫執行委員長が頑張って受け入れ態勢をつくってくれたため、京都建労は先方の邪魔をしないように支援をする方法を取りながら、住宅診断や防水シート張りなど専門性を活かした住宅ボランティア活動に本格的に取り組み、復興住宅建設にも従事していきました。建設労働者・職人の社会的役割を認識し、安心・安全なまちづくりを目指す上でも貴重な取り組みとなりました。

大江 全建総連の災害救助運動の先駆けというのは、ここで確立されましたね。

組合名称に「建設」は感情として許されなかった

徳本 1998（平成10）年に、京都建労の規約改正提案を行います。「京都建設一般労働組合」に名称を変更しようということで、事前に議論を重ねたものの、叩きのめされ、大会にも提案できませんでした。

変更の要点は、建築というのは狭い視野でしかなく、広い意味で建設という言葉を入れようとした。当時、町場からゼネコンや下請従事者を含めた

あれば辞めたいという問い合わせがありましたよね。私は当時東京土建の書記長として、朝日新聞へ抗議に行きました。東京土建国保にも取材に来ました。

徳本 朝日新聞は、京都建築国保には来ませんでした。その時に来たのは会計検査院でした。その前に、近畿厚生局が国保の監査に来ました。根掘り葉掘りやられました。京都府は毎年指導監査に来ていましたが、近畿厚生局が来たのは初めてでした。事前に色々な質問項目を並べて、その準備をしました。細かいところまで聞いてこれながら、4時間ほどやっていました。

会計検査院は2時間で済みました。ちょうど会計検査院の職員が悪いことをしていて、マスコミに取り上げられたことについて、京建労会館の2階で詰問しました。検査をするのはいいですが、その問題をはっきりさせないかとやっていたのです。私は当時、国保の専務理事と書記長の兼務でした。

阪神・淡路大震災での支援活動

徳本 1995（平成7）年1月17日に阪神・淡路大震災が起こりました。その週には組合員委員会を開催していて、緊急に特別決議をして支援を決め、支援物資を送りました。

方向にシフトしていた時期だったので、提案としては正しかったと思いますが、感情的に許されないとこの経過がありました。支部の統廃合問題で支部がなくなるのはけしからんというのと同じです。「総論賛成、各論反対」という感じです。

清水 以前、京都建労で事業所対策の問題について話をした時に、専従者はそういうふうにしないと増えないと理解できましたが、組合員の感情的な面で反発がありました。「何もやらない人を増やして何になるんだ」と休憩中に話しているのを聞いたことがあります。

徳本 町場の影響力がまだまだ高いのです。それだけに、そこを脱皮できない弱さがありました。昔はもっとひどかったのです。社会保険未加入者の組織化は、今でこそ当たり前ですが、当時は大変でした。そんなところまで京都建労の組織領域としていこうという感覚は、組合員にはありませんでした。本部は必要だということで、議論を繰り返し行い、ようやく事業所の組織化に手が付けられてきたというところでしょうか。何度も繰り返し議論を行い、一朝一夕にはいきませんでした。

大江 東京と違うところもそうですが、全建総連で法人事業所問題の総括的なことをやる必要があると



徳本さん（中央）に印象深い取り組みなどを語っていただく
左は大江元書記次長、右は清水書記次長（当時）

運動の結
果、網野町、
京田辺市、
加悦町、木
津町、大江
町、福知山
市で住宅改
修助成制度
が創設され
ました。
2000
年1月には、
1969（昭
和44）年3
月の京都府
庁中庭の集

府・京都市庁舎包囲行動、個人請願行動、国土交通
省交渉、議員要請などを具体化していきました。
とりわけ、100万人署名は、11団体（最終25団
体）による署名推進委員会を2001年4月に結成
して運動を進めました。署名運動は府下各地域に広
がり、広範な市民からも歓迎され、46万筆を京都
府・市に提出しました。

清水 そうした論は、佐藤正明さん（元全建総連書
記長）が「社会保険加入は当たり前」「年金権問題
だ」と主張していました。私たちは「何を言ってい
るのだ、現状はこうだ」と議論していました。今は
社会保険完備でない人が来ず、社会保険の適用は
大前提問題としてクリアするしかないと収斂されて
います。
徳本 私は2005（平成17）年に京都建労副委員
長に就任し、後任の書記長は池田君（池田和弘さ
ん）でした。2005年の段階で、私は57歳で定年
の63歳まであと6年でしたので、それほど長い時間
があるわけではありませんでした。早く後任の書記
長を育てるため、当時49歳の池田君にバトンタッチ
しました。

なお、全京都建築労働組合の「全」は、オール京
都ということです。その当時、京都建築工業協同組
合という昔の大工組合を発展させたところがありま
した。そこと京都建労はこの地域でも組織的に対

立していました。当初は向こうが大きかったです
が、徐々に右肩下がりになっていき、逆にこちらは
伸びていったという歴史があります。

また京都建労は、組織拡大運動はとても遅れてい
ましたが、選挙は強かったのです。当時の委員長
だった浅田源三郎さんが、右京区から府会議員に出
馬することになり、各支部で朝・昼・晩と総動員で
した。1回目の補欠選挙は落選でしたが、2回目は
当選しました。府会議員になったのは、1967
（昭和42）年です。そういう経験をしているので、
選挙はめっぽう強かったです。拡大はさっぱりだっ
たので、組織拡大も選挙のように頑張ろうというス
ローガンでした。

不況打開、仕事起こし、「住宅改修助成」100万 人署名運動

徳本 全国の経験に学び、京都府・京都市はじめ府
下全自治体に対して「住宅改修助成制度」創設を目
指して、落ち込んだ京都経済を立て直し、仲間の仕
事の総量を拡大するため、2001（平成13）年か
ら本格的な運動を展開しました。

「住宅改修助成」100万人署名、学習会、街頭
宣伝・署名、決起集会、全自治体キャラバン、京都

会・座り込み行動から31年ぶりに京都府庁前・京都
市役所前での座り込み行動（3日間470人参加）
を行い、多くのマスコミが取り上げ世論を広げるこ
とができました。2000年3月には、京都市議会
が「公共工事の地元優先発注」の請願を全会一致で
採択しました。

全建総連の住宅対策部長を務める

徳本 全建総連本部には2007年から来ました。
4年間ですが。就任早々、姉齒（あねは）耐震偽装
問題という大きな問題を抱えました。組合員への多
大な影響と混乱をもたらした事件でした。極めて専
門性が求められる分野であり、全くの素人の私に
色々な非専従役員の方々から温かい援助と支えてい
ただいたことで対応できたものでした。大変お世話
になりました。

2005年に姉齒問題が出て、現場では仕事の段
取りができないだとか、4号特例があるのに4号ま
でがストップして仕事にならない等の問題が出まし
た。ピアチェック（構造審査）などを始めて、検査
機関が往生してやって、数次にわたる技術的助言も
出されましたが、それを呑み込まないままに処理が
滞留して、一向に審査が降りませんでした。これが

2006～2007年に噴出し、全建総連は何をしているんだとなったわけです。事情があまり分からないところからスタートしなければなりませんでした。

なお、住宅対策部長に就任する前の話ですが、古市さん（古市良洋氏。元全建総連書記長）から担当部署の相談がありました。「工務店対策部で考えている」と言われましたが、私が部長として思い描く運動の範囲が限られると感じ、住宅対策をやらせてほしいと伝えました。ただ、国や他団体の委員といった役割は他の方に担ってもらおうということで決まりました。

私が住宅対策部長の時は姉菌問題の他、国交省の「長期優良住宅等推進事業の技術基盤強化事業」という10億円の補助事業に取り組みました。この補助事業は調査活動（既存住宅調査、住宅訪問調査）として、アンケートをすべて全建総連が点検しました。書記局が総出で取り組みました。この事業を上手に活用した主な組合は、神奈川県連や長野県建設労連などでした。

大江 組合員さんにはものすごく喜ばれました。あれがあって全建総連の求心力が高まった時期ですね。

ると、何とかいけるとなって2万円という水準が確保でき、そのうち宿泊費や交通費とほとんど膨れ上がりました。また、仮設の費用も当初言われていた400万円ほどよりもずっと膨れ上がって600万円までいきました。これには福島県も頑張っていました。

2011年の4月8日に、全建総連と全国中小建築工事業団体連合会（全建連）・工務店サポートセンター（JBN）と日本建築士会連合会の3団体で「応急仮設木造住宅建設協議会」を設立しました。協議会は、「地域再生・ふるさとをふるさとの人の手で」として、地域工務店と在来工法を活かした地域材を活用し、地域の雇用や賃金確保につながるものとして位置づけました。

それまでは、プレハブ建築協会が各都道府県と災害協定を締結していることに伴い、独占的に行われていましたが、大規模災害が発生した場合の応急仮設住宅の建設は、地域の雇用確保、経済再生、仕事創出を柱とし、速やかに木造の応急仮設住宅を供給するため、そして、地域の大工・工務店が施工することによって、災害後の地域の雇用を確保することを目的として、協議会から発展させ、「全国木造建設事業協会（全木協）」を9月1日に設立、都道府

東日本大震災で応急仮設木造住宅建設の道をひらく
大江 2011（平成23）年の東日本大震災における全建総連は、仮設住宅を結び付けたということで、ある意味ではさらに求心力を強めたということもあります。

徳本 結果的に2016（平成28）年の熊本地震の仮設住宅建設につながりました。

清水 福島で応急仮設木造住宅に取り組めていなかったら、熊本の話にはなっていなかったでしょう。徳本 その契機となった福島の和田さん（和田正光氏。株式会社エコビレッジの元代表取締役社長）の力があるのと、県とのパイプがあったことが大きいと思います。

大江 和田さんは、特に組合に入っていたわけでもありませんでしたが、入ってくれました。やはり、先見性や能力があるというところが大きいです。

徳本 また、青木さん（青木宏之氏。元JBN会長）も力がありました。青木さんは被災地にお金が回ることを意識されていた方でした。当時の大工賃金の相場が1万4000円の中、青木さんは賃金2万円で積算しました。和田さんは最初、これに難色を示しましたが、青木さんは何とかいけるのかもしれないから、やってみようと言いました。そうす

県との災害協定締結の取り組みを展開しました。

清水 熊本に行っても思いましたが、県の木造などに対する思いや政策判断がどんなものがあったのかにもよるのではないかと思います。熊本は何年か前に阿蘇大水害があって、その時には阿蘇町の方にくっっている仮設は木造で、そういうものがありました。あとは、熊本県が森林県、木材県なので、地元の林業振興の基盤があったのが良かったです。今回は見事に熊本につながりました。

役員と書記それぞれの心構え

清水 徳本さんは京都建労の書記長をやられて、全建総連の専従役員もやられました。内と外から見ると全建総連はいかがだったでしょうか。

徳本 外からだと全建総連は大したことのない組織だと思っていました。ところが内ですと役員は一緒でした。政治的立場の違いこそありますが、みんな一生懸命でした。どういう位置にいるかは別にしても、対組合員との関係を大事にしようという人ばかりです。

清水 全建総連や京都建労に期待することはありますか。

大江 全国的に書記の処遇についてです。ちゃんと



しているところは良いのですが、そうでないところは簡単にクビを切られたり、書記長をやっていた人もいなくなってしまう。全建総連として、各県連・組合に書記の位置づけをはっきりさせることをやったほうが良いと思います。そうしないと地方は大変だと思っています。

清水 徳本さんは書記についてどうお考えですか。

徳本 組合の書記局教育は必要だと考えます。自分の生きざまとしてどうなのか、立ち位置はどうなのか、立脚点はどうなのか、組合員と接していくのか、というのを経験できる組合と事務員的な組合もあります。一概にはいかないにしても交流をしないと、なかなかうまくいかないと思います。書記局だけを集めた全国会議をするとか、本来書記局というのはこうあるべきという話だけでなくても、悩みも含めて吸収できるような場を作っていく必要があります。

組合の歴史として、なぜこういう組合ができているのか、今なぜ必要とされているのか、その中で自分たちがどうあるべきなのかができないと、少しのことと辞めますし、適当な仕事しかないということにとどまってしまうと、組合が不幸になり、組合員が不幸になります。そういうところの教育や学習や交流も含めてやることは、組合を大きくたくま

ところから、今の酒井書記長など若い人がずっと入ってきて今育っています。大事なことだと思います。

清水 京都建労も色々苦勞して支部統合や書記局のエリア配置など工夫してやろうとしています。昔は一人で良かったかもしれませんが、今は集団的に配置しないと業務が回りませんね。幅が広がり過ぎて。

徳本 組合書記局の業務の幅は、昔に比べて今は確かに広がっていますが、組合員にとっては全然関係ありません。自分の思いや要求が完結すれば、組合員は満足してくれます。常に目線を組合員にあてるといふ仕事の仕方を心がけておかないと、何のために自分はやっているのかという自問自答もしないといけません。

また、指導部というのは常に新鮮さを持ち込むことをしないと、ただスケジュール的に同じことの繰り返しで情勢に流されてやらざるを得ないという対処法的なやり方ではなく、積極的にここに組合員をもっていくという目線や運動の提起をしないといけません。そのために組合員の実態を常に把握しておくことが必要です。

例えば組合員に仕事がない、相対的に不況の場合、

しくしていくことだと思っています。

清水 まだ全建総連では、学習テキストが「歴史に学び未来を拓く」しかありません。いま徳本さんが言ったような書記局に向けてのものは何もありません。せいぜいやられているのは、専門部段階での実務や活動者会議の中での原則的な学習しかないわけです。これもそれぞれの組合でできているところと何もないところと両方あります。私は、組合費を引き上げるからいうわけではありませんが、やはり書記の待遇は大事です。本当に変えないといけません。

大江 私は全建総連でも書記の研修をやるようにしました。本部の人もやらないと、歴史などよくわかっていません。忙しさにかまけて、本部の書記教育をちゃんとやらないといけない。現場経験がないことも含めてです。現場で研修がある際に行かせるとかです。

清水 この間、拡大行動に連れて行ったりしています。東京土建がやっている事業所訪問の集中行動にも行きました。もう少し座学が必要だと思います。

徳本 京都建労では、給与改定で組合費値上げをしてでも大学の当時の初任給よりも高い水準にもっていきしました。そうすると、新卒がきたりしました。それまでは中途でとん挫した人が入ってくるという

どういう運動を展開すると組合に求心力がもたらされるのか、組合に入って良かったと思ってもらえるのか、です。実現するには時間がかかるのかもしれませんが、そういう展望を与えるということを心がけていかないといけないと思います。そういう意味での実態を知ることです。

清水 私は運動の総括が大事だと思っています。ちゃんとした総括ができれば運動の方向性が見えてくると思っています。

大江 ちゃんとした総括ができる組織が減ってきています。

多数派形成、運動で全建総連の役割発揮を期待

徳本 全建総連は、加盟組合の歴史や政治的立場はさまざまですが、要求で一致すると運動やたたかいに全力をあげる素晴らしさを持ち、同時に、同種・同業、地域に絶大な影響力を持つ強みを発揮する、仲間からの信頼が厚い類稀（たぐいまれ）な「労働組合」です。まさに統一と団結を地で行く組織です。

また、全建総連は全国の建設労働者（従事者）の多数派を形成する役割と責務を担っています。当面、100万人の全建総連を目指しつつ、過半数以上の組織化で、国・自治体への影響力・発言力を高める

とともに、ゼネコンや大手住宅メーカー等と対等のテーブルで団体交渉を展望し、結果として、労働組合運動の牽引車の役割を発揮されることを期待します。

以上